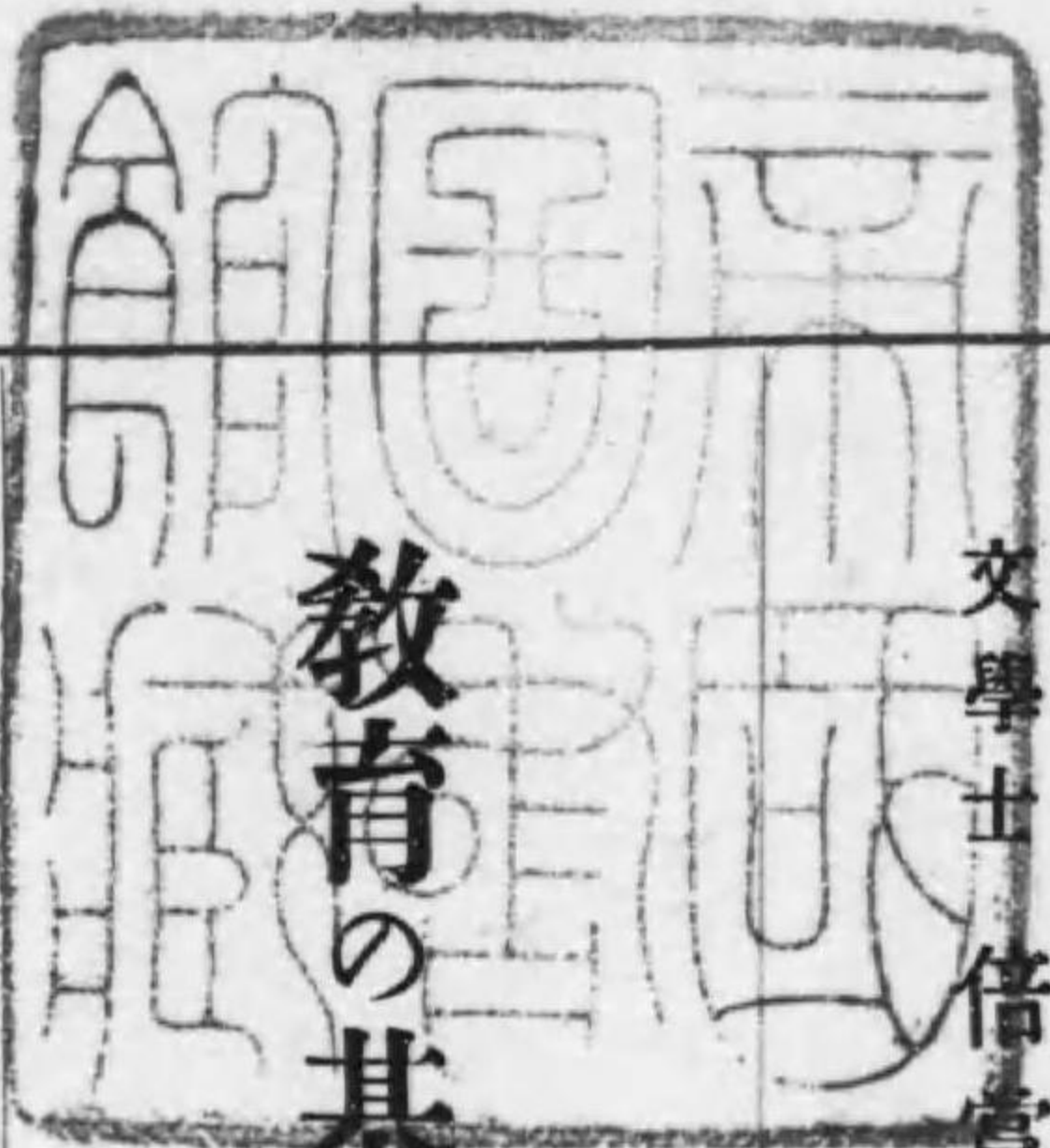


525
251

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





文學士 倍實義雄著

教育の基礎としての論理學

全

大正

13. 11. 5

内交

東京 太陽堂 發行

525-257

序

本書は些少のヒントを、ラッセルの「教育の立脚地からの論理學」(Russell: Logic from the Standpoint of Education) から與へられた外は、殆んど全くウエルトンの「教育の論理學的基礎」(Welson: the Logical Bases of Education 1921 年本第十版) に依つて、抄譯的に且勤めて意譯的態度で以て叙述した者である。ウエルトン氏は英國リード大學の教授で元來は教育學の擔任であるが、特に論理學研究に興味を有し、其に關する數種の貴重なる著述を出してゐる。

此本叙述の目的は、「眞の教育の仕事に對して合理的なる基礎を與へやうとするにある。」(ウエルトン) としてかかる試みは、論理學の研究尙幼稚なる我が國、及び學問的基礎が尙大いに缺けてゐる我教育界に對する者としては必ずしも無益であるとは言はれ得まいと思はれる。

それで一帶我が國に於ては少數の専門家を除いては、論理學の研究が尙幼稚なる状態にあると思ふ。邦文の書としては一樣なる初歩の形式論理學のみが見られる様である。だがかかる所謂死骸的なる形式論理學では、就中我々の直接要求たる教育指導の任に當る事が比較的少な

い。我々の要求は眞理探求の眞の指導をなし得る者に向つてゐるのである。此要求に自ら應ずる者として本書は、形式論理學に及ぶ事最も少く、主として前世紀後半以後に發達したる學說を集め主眼を人間知識の成立及科學研究法におき、而して其教育に對する關係が十分に考慮されて計劃されてゐるのである。「かかる論理學の基礎に立つてのみ、教育學が知的教育の法則を定立するを得るのであり且教育的方法を發見し得るのである。」(ウエルトン氏序文より)其故に、本書に或意味の大なる特色が見られると思ふ。

次に我一般教育界が尙、大いに學問的基礎が欠けてゐる事に對しては多言を要しない。お互に努力して此欠陥を補ふべきであるが、就中現下の急務は論理學的訓練に於て高き標準に到達するといふ事である。かの自學主義の教育の如きも論理的訓練の低き指導者によつて導かれるならば十分なる効果を上げる事が出来ないであらふと思ふ。

最後に紹介者としての私の不備の點は誠に汗顔の至りに堪えない。文は拙く或は大いなる誤謬もあるであらう。勿論此等は全然私の個性が負擔すべき責任にぞくする。敢て諸彦の御示教を仰ぐ所以である。

大正十三年十月十日

倍 賞 義 雄

教育の基礎としての論理學 目次

第一章 知識の性質一般

第一節 教育と知識	一
第二節 知識と眞理	二
第三節 知識と迷信	三
第四節 知識と信仰	六
第五節 野蠻人の哲學	一〇
第六節 事物の總和として説明さるる世界	一三
第七節 法則による世界の説明	一六
變化の因子……法則の必然性及普遍性……分子及勢力	
第八節 組織による世界の説明	二三
第九節 實在及知識の性質	二九

真理の探求

第十節 精神的構成としての世界……………三六

第二章 知識の基本要求

第一節 知識の要素……………四〇

第二節 知識の基本要求……………四二

第三節 感官知覚の程度に於ける基本要求……………四三

同一律……………矛盾律……………拒中律……………理由律

第四節 法則の程度に於ける基本要求……………四六

因果律……………すべて事件は原因を有する。……………同一原因は同一結果を生む。……………同一結

果は同一原因から来る。……………原因と結果は勢力に於て同等である。……………因果及び時間

上に於ける其相互關係。

第五節 組織の程度に於ける基本要求……………五七

終極原因……………目的因

第三章 知識と言語

第一節 觀念と知識……………六三

第二節 觀念と實在……………六三

第三節 觀念と影象……………六三

思惟と想像

第四節 觀念の發達……………六六

第五節 觀念と言語……………六八

第六節 言語と知識の交渉……………六八

第七節 聲音言語……………六九

文 字

第八節 言語と學習……………七一

第九節 聲音言語及文字言語……………七四

第十節 意味と文脈……………七六

言語の特殊的及一般的意味
 第十一節 言語の曖昧……………八一

個々の言語の曖昧……………構成に於ける曖昧

第四章 知識と論理學

第一節 論理學の性質……………九三
 第二節 判斷の性質……………九四
 第三節 判斷と論理學……………九五
 第四節 思惟の抽象的性質……………九六
 第五節 形式と質料……………九八
 第六節 抽象的形式的なる論理學……………九九
 第七節 論理學の職能……………一〇一
 第八節 論理學の價值……………一〇三

第五章 判斷の性質

第一節 判斷と命題……………一〇四
 第二節 判斷と眞理……………一〇六
 第三節 判斷と經驗……………一〇八
 第四節 判斷は分析綜合の兩作用である……………一一〇
 第五節 主辭と賓辭……………一一三
 第六節 繫辭……………一二六
 第七節 判斷に於ける分析と綜合との相對的卓出……………一二七
 第八節 概括……………一二八

第六章 判斷の型式

第一節 判斷の主要なる型式……………一二九
 第二節 判斷の發達……………一三一
 非人稱的判斷……………指示的判斷……………個別的關係判斷……………歴史的個別判斷……………枚舉的判斷
 ……普遍的判斷の探求……………一般斷定……………假言的判斷……………可逆的普遍判斷……………選言的判斷
 第三節 否定……………一三六

第四節 定言的判斷に於ける質と量……………一三九

第五節 假言的及選言的判斷に於ける質と量……………一四二

第七章 命題の形式的關係

第一節 命題の四つの形式……………一四五

第二節 概念(命辭)の周延……………一四七

第三節 換位法……………一四九

第四節 對當の様式……………一五一

包攝關係……………矛盾關係……………反對關係……………小反對關係……………對當法概括

第八章 知識の方法

第一節 眞理と證明……………一五五

第二節 方法の性質……………一五六

第三節 方法の原理の發達……………一五七

アリストテレス……………中世の論理學……………ペイコン……………ニワトン……………ミル……………現代の論理學

第四節 方法と思考……………一六一

第五節 方法と事實……………一六二

第六節 方法の推理的特質……………一六三

第七節 方法的思考の特質……………一六六

目的……………一定の出發點

第八節 方法に附帶する謬論……………一六八

先決問題要求の謬論……………論點相違の謬論

第九節 方法的過程の本質……………一七二

第十節 推理の本質……………一七三

推理と組織……………推理と既有知識……………推理と普遍

第十一節 演繹的及歸納的推理……………一七八

第十二節 分析と綜合……………一八〇

第十三節 分析的及綜合的方法……………一八二

第九章 演繹推理

第一節 演繹推理の種類……………一八四

 A 三段論法

 第二節 三段論法の性質……………一八五

 媒概念の周延……前提によつて保證される結論……三段論法の妥當性……三段論法の派生的規則

 第三節 三段論法の形式……………一九三

 第四節 假言的三段論法……………一九五

 B 構成法

 第五節 構成の性質……………一九八

 第六節 構成の型式……………二〇〇

 第七節 構成の歸納的方面……………二〇二

第十章 歸納的方法一般

 第一節 歸納法の意義……………二〇四

 第二節 歸納の一般的方法……………二〇五

第十一章 觀察

 第三節 假説の直接的及間接的吟味……………二〇七

 第一節 觀察の重要……………二〇九

 第二節 誤謬に對する觀察の責任……………二一〇

 第三節 觀察が先入知識に依存する事……………二一一

 第四節 觀察と推理……………二一二

 選擇……認識……觀察と推理との區別

 第五節 觀察と偏見……………二一三

 第六節 觀察と科學的器具……………二一四

 第六節 實驗……………二一四

第十二章 證明

 第一節 證明の必要……………二一七

 第二節 證明の認容……………二一八

 第三節 證明の吟味……………二二〇

十分なる信用……正確

第四節 匿名の證明……………二五七

第五節 證明の確認……………二六九

傳説……獨立なる確認

第六節 証明の缺存よりする推理……………二四三

第十三章 假説

第一節 假説の性質……………二四二

第二節 假説の起源……………二四六

第三節 假説と事實……………二四九

偏執の危險

第四節 假説の吟味……………二五一

第五節 記述的假説及有効假説……………二五三

第六節 假説の許容……………二五五

第七節 決定的事例……………二五六

第十四章 假説の直接的發展

第一節 偶然的一致と必然的連結……………二六〇

第二節 經驗的概括と枚舉的歸納……………二六一

第三節 比論……………二六四

第四節 直接歸納法の性質……………二六九

第五節 契合法……………二七四

第六節 拒斥法……………二七六

第七節 差異法……………二七八

第八節 共變法……………二八一

第九節 剩餘法……………二八五

第十五章 假説の間接的證明

第一節 直接法と間接法との關係……………二八七

第二節 間接法の最初の使用……………二八九

事情による證明

第三節 歴史に於ける間接法……………二九一

第四節 地質學及生物學に於ける間接法……………二九三

第十六章 定義分類及説明

第一節 知識の方法の目的……………二九六

第二節 定義の發達……………二九七

第三節 定義の性質……………三〇一

第四節 定義及意味の陳述の他の様式……………三〇四

第五節 定義の限界……………三〇九

 固有名詞の意味

第六節 定義の規則……………三一二

第七節 分類の性質……………三一六

第八節 分類の規則……………三一七

第九節 分類と定義……………三一九

 分類と分割

第十節 選言的分類……………三二一

第十一節 包攝的分類……………三二三

第十二節 分類及定義の一時的性質……………三二七

第十三節 分類と説明……………三二八

第十四節 説明の限界……………三三一

第十五節 論理的説明と熟知……………三三一

第十七章 論理學と教育

第一節 論理學と教育との一般的關係……………三三四

第二節 社會と相關的なる教育……………三三九

第三節 方法と自己活動……………三四三

 器械的にあらざる方法

第四節 知識論の傾向と相關的なる教育方法……………三四七

 發見的方法

第五節 科學の方法と教育の方法……………三五〇

目次

第六節 方法の準則…………… 三四

(目次終り)

教育の基礎としての論理學

文學士 倍 賞 義 雄 著



第一章 知識の性質一般

第一節 教育と知識

ペイコンが其の最も著名なる一論文の冒頭に曰く、「真理とは何ぞや」とは冗談好きのピレートの言だが、さて之が解答は得て求むべからざる者である。」と。此言は此ローマ太守への誹謗なりや否やはさておき、其は正しく、もしも教育者ならば其を取入れてはならぬ或精神的態度を表明するものである。彼等の仕事の主要なる一は教授といふ事である。所で教授といふ事は二つの部面を有する。一は即ち生徒であり、他は即ち教ふべき主題である。此兩者の間に知

第一章 知識の性質一般

識といはれる關係を定める事を該教授が敢てするのである。教授の目的とする所は其故に知識を收得する爲に生徒を導く事、並に生徒に其知識を使用し或は擴張する力を發達せしめてやる事に存するのである。

第二節 知識と眞理

扱知識 (Knowledge) といふ語の意義は如何と自問するに、それは眞理なりと證明され得る人間思想の部分である、と自答する外に仕方がない。而も人間の思想は其が世界の事實と符合する限りに於て眞理である。あらゆる知識は兎に角眞理の集團なのである。勿論一切を包含する全一の知識といふ者は我々は之を知らず又知り得ざる者である。といふのはかゝる全一としての知識は實在の全體だといふ事になるからである。別言すれば其は宇宙其者だといふ事になるからである。其は無限な者であるから有限な人間の知力によつては決して把束せられる事が出来ない。だが産出が相つぐから知識が増加する。新しき出發點としての新地位に臨む場合我々はかつて持つてゐた知識を、新神祕を開くべき鍵として使用するのである。我々の祖先にと

つて其等が超自然的働きを假定するにあらずんば説明する事が到底出来なかつた程不思議であつた事柄も我々に取つては平凡な事となつてしまつてゐる。斯様にして所謂迷信の範圍なる者はたえず狭められてゐる。一帶迷信といふ者は知識が缺乏し想像が其代理をした場合にのみ働き出すからである。けにクロツド氏は「野蠻人こそは魔力といふ物に其生活を支配せられてゐる」といつたのであるが、我々文明人の生活に於ては、法則並に組織による合理的概念が益々完全に生活を支配する様に傾きつつあるのである。

第三節 知識と迷信

現代文明人の思想は其故に、野蠻人の其よりは大いに異なつた者である。一見しただけでは特に其感じが強い。だが此事のために兩者の思想間に連続が存在するといふ點に盲目となつてはならぬ。又前者の思想が後者の其より徐々に而も困難を伴ひながら發達したのだといふ事も觀過してはならぬ。人類が半開であつた過去に於て低き知識から生れた事情といふ者は、數千年の歴史を通じて何時でも表はれてゐる。野蠻人が己が見聞する現象を説明するに使用したか

の魔力魅力仙人乃至すべての器具にもあるとした不可思議力等に關する信仰といふ者の代りに知識が使用せられる様になつたといふのは、抑、人間が想像する事の外に思考し探索するといふ事をやり出した時からの事にすぎぬ。現代のヨーロッパに對するかゝる思惟の始まりは三千年近き以前にギリシヤに表はれたが、其後徐々に進歩して來た。だが長い期間にわたつての停滞並に時には逆轉すらも無いわけではなかつた。我々は多數のヨーロッパ人の生活を迷信が支配してゐるのを知るために太古まで後戻りするにも及ばぬ。ゼームス一世は魔力につきて固き信仰を有してゐた。彼の著者「惡魔學」の中に彼は言ふ「魔物は如何にして亞麻又は粘土で肖像を造るべきかを示してゐる。彼はかかる肖像を焙くのであるが、それであるから其像に相應する名を有する人達は其場合病氣によつて溶かされ乾かれてしまふといふ事が常に有り得るのだ云々」と。かくてゼームス王は英吉利のソロモンであつた。實際知識が缺乏すれば迷信がはびこるといふ事の多くの例證を求めんために現代をはなれるには及ばない。自然法の普遍性につきて透徹せる概念を持つてゐる人は今日に於てなほ比較的少數である。クロツド氏は否定すべからざる眞理「文明人の上皮をはぐと眞皮の中に野蠻人が見られる」といつた。彼は更に語をつ

ぐ、「其證にザドキールの星夜の聲 (Vox Stellarum) を航海曆 (Nautical Almanac) よりもてはやす人が多い。又夢の書 (The Books of Dreams) と幸を話す人 (Fortune-Teller) とを臺所に備へぬ家庭は稀であるから。」と。私が引用したクロツド氏の興味ある書には多くの他の事例が與へられてゐる。讀者は疑もなく其に接する事が出來ると思ふ。しかし無智の結果が迷信を生み出すといふ事については十分に述べ得たと思ふからここには此以上にのべぬ。扱迷信は人間の感情特に恐怖の情緒に主として其起源を有するといふ事は顧みられねばならぬ。即ち不可知といふ事が、自然法に關してほとんど或は全く概念を持つて居らぬ者には一般に恐怖を生ぜしめる者だから。所で此迷信が單に精神的誤謬なるのみならず、之が行爲を決定すると受取らるる限り實際的意義を有する事になる。斯様な迷信を除去する唯一の方法は知識を増進する事であるとの事は上述の主意よりして自ら明であらう。此點は教育者にとつて大いに興味の存する所である。再びクロツド氏の言を引用しやう「生活術は大部分情緒を統禦する所に存する。又其を或方向に導いて行く事に存する。而して其事をば最も新しき知識と其適用に自由を具備した、知性のみがなし得るのである。」と。

第四節 知識と信仰

上述せる中に我々が考慮せねばならぬ最も重要な若干の事項が含まれる。第一に我々は知識は信仰とは異なるといふ事を知るのである。信仰とは少しの疑問もなく心に受容せらるる者である。野蠻人は文明人が重力の法則に確信を有する如く種々なる形式の魔力に對し確固たる信仰を持つてゐる。そして彼等の信仰は其行動に影響するのである。バスト人は川の堤をさける。それは自分の影が水に落ちた場合鱒魚が其を見付けて自分を害する事がない様にとのためである。アラビア人はもしもハイナが影をふむと其の人の談話力を失はしめるといふ事を信じてゐる。「さてかゝる信仰に矛盾する經驗が常にあつた事であらうがそれにも拘らず其信仰が永い間存続したといふ事は如何にも不思議である。之は他の經驗的事實——即ち人間が信仰といふ事につきてはどうしても保守主義になり勝ちの者だといふ事實——に依るでなかつたならば決して説明が出来ない事に相違ない。偏執といふ事は人生には異常の力を持つてゐるものである。人々に對し思想上新氣軸を出す事を困難ならしめる者はかかる強き精神的惰性である。々

「ゴトはいふ「眞理が開かれて行く事に障害をなす者は誤謬ではなくて、怠惰偏執習慣性等の活動を善ばぬ事柄である。」と。人々が何故に是或は彼を信するやを内省しかくして其信仰を或は持續し或は棄却する様になるのは、上述の怠惰が壓倒せられて研究の精神が起つた時に於てのみである。此事は我々に信仰と知識との差異並に兩者の關係につきての了解を得せしめる。個人の精神状態に關係する者である限り知識と信仰とは問題たる事實に對して、それが眞理だとの十全なる確信を持つ状態であるといひ得る。だが兩者は次の點で異なる。即ち知識に於ては其に對する確信は其以外の他の知識が自明であるといふ事によつて保證され得るが信仰に於ては其が出来ないといふ事である。例へば野蠻人共が、地震が或超自然力者が己が支配下にある者に對する怒りの表明であるとの事を信じてゐるのであるが、しかし彼等は地震其物をはなれて此信仰を明かならしめる事が出来ないといつた様な者である。所で他方現代の科學者は否定し得ざる明確の許に地震も亦自然法の結果に外ならぬのであり、其自身宇宙の秩序的働きの表現であるといふ事を示し得るのである。かくして地震を他の物理的事件と關係せしめる事によつて、科學者は單なる信仰に代ふるに知識を以てするのである。

尙更に最も重要な差異が存する。信仰は常に個人的行動に屬する。若干の人が或事につき同一なる信仰を持ち得る。かゝる者を我々が漠然信仰を享有すとか共通信仰を有つとかいふ。だが語義を嚴密にした場合信仰といふ事は共通ではない。共通的な者は信仰の對象である。各人が各自信するのであり各人が己自身の十分なる確信を感じるものであり而もかゝる確信は相互の間に融通し能はぬ性質の者である。各人のなし得る最上は或人が自分に傾く限り、同一對象につき信仰を持たしめやうとして其人に改信を要求せんがために影響し得る事だけである。信仰といふものは其故に本質上特殊的な者である。即ち特殊的個人的精神の樣態を意味するのである。之に反して知識は普遍的である。即ち若干の精神に共通せられ得る者である。此が即ち前述せる如く知識は眞理の集團である所以であり、又換言すれば其は實在の或部分につきての洞察であるといひ得る所以である。だから知識は或個人的精神にのみ依存する者ではないといふ事になる。といふのは信仰も個人的な思想も眞實世界の要素をば變ずる事が出来ないからである。知識は個人的精神の働きによつて増大するといふ事は眞實である。しかし知識の或部分が明にせられるや否や其は他人に傳へられ得、而して普遍的性質の者となる。知識の各部分を定立す

る證明が明にせられ得るのは實際かかる所に存するのである。勿論或知識が或個人心によつて把束せられた場合には其は信ぜられるのである。そして其個人心の内容の一部分をなすのである。知るといふ働きは其故に個人的ではある。然しながら信仰は信ずる行動以外に出で得ぬに反して、知識は單なる知る働き其者ではない。何故ならば其を説明すべき十分なる根拠を有つてなかつたら其は知識ではないからである。即ち其は世界の秩序の一部分であるといふ事にはならないからである。かゝる証明を會得し得る人ならば、かくの如くして証明せられた知識を受容するを餘義なくされるのである。其故にすべての知識は其本質上普遍的である。何故なれば其を理解する事が出来る精神は其を單に信すべき或物として受容するのみならず實際に証明されるが故に眞なりとせらるる或物として受容せねばならぬからである。

すべて知識は眞であるが信仰は時々誤であるといふ事實は知識の一般條件は個人的信仰から獨立であるといふ事を知らしめる。かつては人々は自分達の豫想した知識が其後の進歩によつて不完全又は誤謬であるとして示された場合に於ても、自分達が知識を有してゐると信じてゐた事がしばしばあつた。斯くの如きは、知識も信仰も個人に於ては完全なる確信であるといふ

事並にすべて知識は信仰であるがすべての信仰は知識でないといふ事に思ひ及ぶと容易く其誤なる事が了解せられる。それであるから、自分の信仰は十分なる證據によつて支持されてゐるといふ事にして自分を欺くといふ事は人々にとつて有り勝である。特に其證據の價値を評價すべき力が幾分自分の知識の程度に依存する事さへあるので尙更さうである。かゝる人はそれedyもすれば己れの偏見による考察を混亂せしめ、理性にのみ屬する眞の理由と、信仰とを同一視する様になるのである。かゝる考察は、眞でない者が知識であると誤られた場合には、理性が認識の條件と分離された状態にあるのだといふ事を我々に知らしめる様になる。——此條件が具備された場合知識となるわけの者のである。かゝる條件の性質を吟味する事が此書に於ける自分達の試みなのである。

第五節 野蠻人の哲學

文明人と野蠻人との思想を比較の結果知られた第二の點は、何時の時代でも人々は自分達の生存してゐる世界につきて或説明を求めやうとして居る、といふ事である。彼等の生活に於け

るいづれの時刻に於ても彼等は己の願望感情思想等によつて統禦され得ぬ對象並に現象と觸接せられてゐる。嵐がやつて來ては彼等の小屋を打ち壊してしまふ。太陽は昇つたり沈んだりする。月は満ちたり缺けたりする。雲は濃つたり消え失せたりする。のみならず更に自分自身の行動が屢々自分が豫期もしなければ願望もしない結果を生じたりする。新しいいちごを食べて病氣になる事もある。岡に登らうとして石を踏んだ場合倒れて傷つけられる事もある。結果を豫期し得る場合でさへも多くは其を防ぐ事が出來ない状態にある。水を發見し得ないで渴に苦しむ場合もある。山火事に包圍されて焼け死んでしまふ事もあるのである。

斯くして最も低き發達程度にある人でも、自分は世界の中に其一部分として存在する者であり、而も世界は自分達よりは全く獨立の者であるといふ事を認めざるを得ぬのである。だが野蠻人は言葉につき正確なる意識を有しながら思索を始めたのでない。彼等は直接な人格的意識を有せざる或物が自分の生命に關係する者だとの考を馬鹿けた程に信じ切つてゐる。又自分に病氣を起させる様な働きをば常にさげやうと努力した者である。彼等は自分への禍の新しき出所を見付けやうと常に心にかけてゐた。そして不可知を疑ふ傾きはあつた。野蠻人は全體とし

ては此世界を見る事を決してしない。彼等に對しては此世界は、自分達の生活並に快樂に對して一般に悪しき意義を有する孤立せる事物並に事件から成立する者であつたのである。彼等によつてせられる最も明なる説明は、すべての物が自分達が持つてゐると同じ様に生命を持つてゐる者だと結論する事であつた。萬物はすべて生き物である。或は少くとも生きた靈魂の住所である。(一般に惡意を有する靈魂の)かくてあらゆる野蠻民族に特有なる魔力に對する信仰といふ者が生じて來るのである。

それから野蠻人は實物と其象徴との區別をもなし得ない。彼自身と彼の陰影とは特に嚴に結びついてしまつてゐる。だから或人が危害を加へられやうとする場合、其自身ならず其人の影に危害が加へられても、其人が危害を加へられた事になるといふ事が一般に信じられてゐる。同じく、或人の姓名が其人の完全なる一部分であるといふ事も信じられてゐる。そしてもしも或人が己の敵の姓名を知つてゐる場合には其敵を全く己の支配下におく事が出來るといふ事はほとんどあらゆる野蠻人に共通せる信仰である。しかるが故に多くの野蠻人に於ては眞實の姓名といふ者は全く祕密にせられてゐるのであり、あらゆる個人は渾名によつて知られる事になつて

ゐる。

斯くの如き二三の例が、野蠻人の哲學の中に或る首尾貫徹せる者を期待してはならぬと我々を警めてくれる。彼等は此世界を全體としてでなく、何所までも部分的に説明しやうとする。彼等は自分達の經驗に於けるかくの如く分列せる對象が何であるかと自問する事すら之をなす事が眞に困難なのである。其等の者の眞性につきては彼等は全く無智なのである。だが其等は事物間の關係であるといふ事をばおぼろげではあるが了解しかけてゐる。彼等が説明の際已れの計劃を基礎づける關係といふのは、著しき、しかし時には大いに淺薄ではあるが、類似といふ事である。それでも科學が基礎づけられるといふ始まりは、此の漠然たる斷片的なる認識關係に於てせられるのである。

第六節 事物の總和として説明さるゝ世界

人間が野蠻の状態から徐々に脱出する場合、次第々々に其人の時と勢力とが單なる生命の保存といふ事にばかり費されるといふ事ではなくなる。人々は直接に自分を感觸しない者或は全

體としての世界につきても求知心を持つといふ時期に到達する。然し尙傳統的信仰の影響といふ者が強く残つてゐる。彼等は尙自分達を宇宙の中心に位する者として、そして又自分等への恩澤のために太陽も月も星も大地も造られたのだと、決めてゐるのである。とはいへやはり物をば——即ち感官を通じて自分を感觸し得る物質的對象をば——自分と其物とは相對的關係の許にありそして其關係の許にのみ其對象の性質が生ぜしめられる者だとはせず、全く已より獨立な實存の部分として考へてゐる。換言すれば彼等は此世界を自分と偶然的關係の許にある事物の總和として見てゐるのである。此見地よりして物は九柱戯の木の如く或は玉突の球の如く其性質を變ずる事なしに如何様にも排列する事の出来る存在の總和であるといふ事になる。かゝる哲學の中に尙魔力及超自然的働きにあてられた空所がある。何故なれば、事物間の關係が、全く關係せしめられる事物の性質に影響する事なく平凡な不定な物として見られた場合には、其關係は周到には研究せられる事がないであらうし、且生命力による此論が尙理解する事の出来る事件の説明には相變らず取入れられるといふ事が明であるからである。であるからやはり魔物が世界の組織の部分として残る事になり、其悪影響を避けんがためには或手段が講

ぜられなければならぬといふ事になる。是を以て魔術使用の餘風が今以て西ヨーロッパの人々の多數の間には極めて普通の事柄であるのである。「多くの神祕的文書が悪しき魔力に對するお守りとして西ヨーロッパの田舎人の間に秘藏されてゐる」(クロツド)のである。

更に事物間の關係が實在の組織に重要だと認められず又研究もされずに残される限り、著しき類似といふ事が説明しやうとする人間の試みに正しからぬ影響をば絶えず與へる事であらう。斯くの如くして「第十七世紀の醫者は不圖した無意識的な氣持で以て、病人に其生命を延ばす爲に木乃伊の粉を與へたのである。サー・トマス・ブラウンがいふ如く、木乃伊は商品になり、Mianin が傷を治療し、古のエジプト國王は香膏として賣られる。」(クロツド)のである。今日でさへサフオーク並に他の島々では、疣に對する普通の療法は蝸牛を祕密に、スグリスグリの棘で刺し、其を疣の上に擦り然る後に其を埋める事である。さうすると其蝸牛が腐蝕した時に疣も消え失せるといふ事になつてゐる。此事はかのチェロキ印度人が美聲を保たうとする時にコホロキコホロキを煮て其汁を飲むのと全く同じ程度の行動なのである。

第七節 法則による世界の説明

自らの性質を感觸するなき關係におかれた事物の總量のみが此世界にあるのだとする説明は不十分ではあつたが、尙數世紀以前迄は人心を満足せしめた者である。人々が眞に世界の構成に於て關係の重要な事を評價し始めたのは、近世自然科學の發生の時からである。しかしながら事物の獨立性についての古き見解は、尙すべての教育なき人々の哲學の間には依然として残つてゐる。——即ち子供並に成人の中でも大多數の者は尙かゝる見解を有つてゐる。そして教育者が世界といふ者につきて、より眞なる概念に生徒を導くために、發足せねばならぬといふのは以上の見地から來るのである。此點に關しては他の多くの點に於けると同様に兒童は民族進化の階程をなす者の如くでもある。

以上の主意からして近世科學は、事物の性質は其の關係によつて影響せられ出て來る者だといふ事の發見と共に始まるといふ事が出來るわけである。而も此發見は物自身をより深く研究する事によつて得た必然的結果であつたのである。皮相な觀察でも、多くの物は自分達が配置

せられる關係の如何によつて變る、といふ事をば明に知る事を得る。雲は風によつて散らされ雪は日に當つて溶かされる。實際他物の如何によつて或事情が異つて來るらしく思はれる。あの永恒的な小丘に於けるよりも更に安定な者は何物に於ても之を求むる事は出來ぬ如くでもある。しかし更に嚴密なる觀察は斯くの如き者でも絶えず變りつゝもあるといふ事を悟らしめる。即ち雨霜急流水河等常に作用してゐたのである。そして此等の作用の結果は注意深き觀察者によつては直ちに見られ得るのである。即ち變化するてふ事はあらゆる事物の特性であつて單なる若干事物の偶有性でないといふ觀念は愈々人々に周知の事となつた。けれども疑もなく、テニソンが次の句に表はした概念に達する迄には可成の長い間があつたのである。

"The hills are shadows and they flow

From firm to form and nothing stands

They melt like mist, the solid lands,

Like clouds they shroud themselves an I go!"

變化の因子 しかし變化は其變化の原因となるべき働きを包含する。此働きは物自身の中に求

めらるべきか或は其と積極的關係の許にある他の或事物の中に求めらるべきか、乃至此兩者の結合其者の中に求めらるべきかである。扱外部からする働きといふのは多くの場合明に知られる。木や土は急流によつて洗ひ流される。美しくしき野原や繁華な都會は火山の爆發によつて壊されてしまふ。火は萬物を焼き水は溺れしめる。だから外的働力はすべての變化に對して十分なる説明を與へるかの如くに或者には受取られる。ここに我々は亦新方面の許にあるのではあるが古き信仰の殘存をも見出し得る。古の信仰では事物は本質的に鞏固であるとされた。そしてすべての變化は一般的秩序に於ける偶然的例外的なる者と見なされた。そして變化が觀察せられた場合それは外的働力に歸せしめられたのである。此考より多少新にせられた見解によるに、變化其者をば先の見解と反對に最も普通なる状態とする。しかしあらゆる變化を外力に歸する點では前者と一致する。だが求められる其働力は超自然的存在並に不可知力の其とせられず物質にある力であつたのである。

しかしかゝる見解は、より深き批判的吟味をなさしめない。外的影響は唯一の決定的因子でないといふ事が直ちに了解せられる事である。櫟の實と穀粒とが同所に植ゑられ、同じ天候と同じ土壤との影響の許にあるとしても、一方からは穀物が成長し一方からは櫟の木が出て來る。何物も全然土壤並に氣候に固有なる條件を離れては生長し得ず、其故にかの生長は此等外的條件によつて決定せられるといふ事は眞である。しかし實際に起る發達はかゝる條件の外其者自身の性質によつても規定せられるといふ事は、同様に明である。そして此性質は其物自身の本質なのである。だから外的條件は發達に於ける助力的要因であるといふ事になる。しかし此のみが發達の性質を規定する者ではないのである。植物生長の歴史は其內的性質並に環境の二つが考へられた場合にのみ理解せられ得るのである。

動物の方では同じ事が更に明にせられ得る。動物は植物よりは遙に外的制約から獨立である。何故なれば自己の住所を變更する事によつて自分に適する條件を求め得るから。かゝる事をなし得る限り、動物は條件によつて規定されるよりはむしろ條件其者を規定しやうとするのである。勿論外的條件も動物の生活に全然關係がないといふことではない。長い間には彼の組織を大いに左右するのである。たが單なる環境の影響は動物の生活の全體に對して其理由とはなり得ない。此自己決定といふ事が最も高き程度に於て人間に見られる。人間は己の理性と意志と

の習練によつて、あらゆる仕方にて己の環境を加減する事が出来る。人間の爲す事及び人間が成らうとする標的は人間の外にある事情によつて影響せられる事は勿論である、而も其は可成の程度にまで而せられる事は屬々ある。だが人間の行爲並に其生活は全くかゝる外的事情のみによつて決定せらるゝ者ではなく、人間自身の性質によつて支配を受けてゐる。

非組織的世界の方面につきても同じ事情が見られる。土壤は急流によつて洗ひ流される。しかし侵蝕の範圍並に様相は流れの性質にもよるが亦土壤其自身の性質によつても決定せられる。多くの固體は熱を受けた場合融解する。しかし蠟は攝氏六十五度で溶けるのに鉛は三百三十五度に達するまで固體のまま居る。鐵になると千二百度で固體から變化する。

要するにあらゆる對象のすべての變化は内力と外力とによつて規定せられるのである。變化の範圍並に時間は主として外的働力によつて規定せられるが、其性質は如何に部分的の者でも事物の内的本質によつて規定せられるのが普通である。

すべて生起する所の變化は必然的であるといふ考が起るのは以上の事が完全に把束せられた場合に於てのみの事である。そして此場合必然的といふ語の意義は斯く斯くの條件の許に斯く

斯くの事物が與へられた場合には斯く斯くの變化が起らねばならぬといふ事である。此事が即ち現代科學の特質たる法則の普遍性でふ概念である。我々は此法則の範圍を縮小してしまふ傾きがある。だからハクスレー教授が「思慮深き人でさへ常に驚愕の眼を以て、海岸に風に追はれてくだけの波のうねりの形並に疾風の前に飛ばされる飛沫の方向は、定まれる原因による正しき結果であるといふ事實を知る。だから運動の法則並に空氣や水の性質からして演繹的に規定せられるのは同じ様に驚愕であるべき者に相違ない。」といつてゐる。

かかる例は我々の知識は實は如何に制限を受けてゐる者であることを示す。人々が知識を擴めやうと勵むのは或實際的利益の要求の許にせられる事が多い。であるから人々が其を正しく考へる——即ち眞に考へ或は知らうとする——のが價值ある事だと認める所の事實並に事件は極く少數部分の者に限られるのである。しかし正しき思想は科學的思想である。我々は、正確に考へる此少數の現象を除けば何物も科學の圈内にあるとは云へないといふ事に思ひ到る傾向がある。だが科學の範圍と可能的知識の範圍とが同一である。それは故クリップフォード教授がいつた次の言の如くである。「科學的思想といふのは長き名稱を備へた科學的問題に關する思想

との謂でない。科學的思想といふのは別に存しない。科學の問題は人間に普遍的なものであり即ち人間と交渉を持つた或は持ち得るすべての事實であると謂ひ得る。云々。

分子と勢力 であるから法則の普遍性につきての科學的概念は宇宙に生起するすべての事象を、其内に含まれてゐる關係によつて説明しやうとする試みであるといへやう。それで關係せられたる事象の性質が恒久性を保つといふ事を假定する事によつて此事象が明にせられるとしたならば、如何なる變化も、事物に働く事物の活動につきては既知といふ事になるので、正規的の者だとの立言は、其に應じて言はれ得るといふ事になる。だが現代の物理學は其上に更に説明を試みて普通事物の性質——動物植物岩石水等を同一原則の許におかうとする。物理學は物理的世界の終極の構成要素として無数の分子といふ者を想定する。其分子といふのは見得ざる程の微小な者であり、恒久的持續を保つ者であり、不變の性質を有する者であるとする。此等の分子は種々なる位置を取り或は運動をなすが故に、種々なる種類の自然現象並に其變化的なる發達が表はれて來るのであるといふ事になつてゐる。であるから分子自身は變化を表はすべき如何なる積極的な性質をも持つてゐない——其は只働力並に反發力の中心に不變的持續

を保つものとせられてゐる。變化といふのは、だからエネルギーの結果である。其は單に分子の周圍に集まりたる力が排列し直される事である。そして宇宙の終極の實在はエネルギーの中に見出されるとする。そしてかゝる、世界につきての機械的説明は勢力保存の原則に於ける最も進歩せる形式であると思定されてゐるのである。此説はたしかに單純ではある、しかし實在の終極の完全なる説明としては不十分な者である。其は非組織的世界の現象全體を完全に説明する者ではない。又生命の現象特に發達的な現象に關係する事は全く不可能である。

第八節 組織による世界の説明

のみならずかゝる場合でないとしたとて機械的な學説が思想に對して最後の休安所を與へる者ではない。何故ならば其は、存在するすべての者をば相互關係の許にある從屬的の者としてしまふからである。今もしもAといふ現象がXといふ慣例的關係の許にあるBとCとの結合に歸して説明せられるとしたとしても、尙此等XBC等が等しく説明を要求するといふ事にならう。此等の説明に與る要素も亦同様である。だから我々は決して終る事なき關係に依る説明の

連鎖の中に追ひ込まれてしまふ事になる。更に我々は、我々が事件又は變化につきて云々する場合には實在する者としては分離して居らぬ世界の部分的過程を思想上に於て任意に引離して取扱つてゐる、といふ事を記憶せねばならぬ。マツハが次の言の如く其事を表はしてゐる。「自然には原因もなければ結果もない。自然は單なる一の獨立せる存在である。自然は單にある者である。」と。自然といふ語はここでは全體としての宇宙を意味する。此宇宙は相互關係といふ事によつては説明せられない。何故なれば此宇宙以外に他の如何なる者もないのであるから。かゝる事が我々を科學的説明の程度から哲學的説明の程度へと導いて行く。哲學的説明の本質は、變化は其自身に内在する活力によつて起るとする一組織として宇宙を見るときに存する。しかし我々が考へ得る自己自身に起源を有する活動といふのは單に思惟と意志活動とのみである。即ち理性的意志其者のみである。だから我々が説明につきての追求を行く所まで續けて行くとしたならば、一切實在を包含する絶對的存在の理性的活動の表現として此宇宙を見るを餘義なくせられるといふ事にならう。かうなると即ち科學の範圍を越えて哲學に入つた者なのである。マーツ博士はいふ「科學は我々に自然と生命とを理解する事を教へぬ。此事

は哲學又は宗教の問題にぞくする。」と。所で教育が其仕事を完成したといはれ得るは、媒介による即ち科學的なる個所が通り過ごされて此終極的なる個所に到達した時に於てのみである。我々が見てゐる發達の必然的秩序の概念は、であるから、教育者にとつて本質的なる用意の一部分であるわけである。

組織の觀念は部分的には科學的見地に於て認められてゐる。といふのは、科學の見解によると宇宙といふ者は、最早感官知覺の説明に於けるが如く獨立的結合の總體としての者ではなく相互に本質的關係の許にある部分の組織されたものとなるからである。哲學的の見解は單純に此組織といふ觀念を成就し其をすべての説明の基礎にする。そしてかくなす事によつて其は其自身の中に、先行せる説明様式のいづれに於ても眞であつた所の者を取入れる事をするのである。組織といふ事によつて眞に意味せられる所の者を主として考へて見るといふ事は、ここには好い事であらう。例として時計といふ一の器械を取つて見やう。時計は種々なる車、バネ、並に他の材料からして組立てられてゐる。だが此等の者は或る定まれる様式に整へられるでなければ一個の時計を組立てるわけには參らぬ。だから時計は單なる其部分の完全なる總和のみと

いふ事にはならぬ。此等の部分が相互に一定せる關係の許におかれるでなければ時計にはならないのである。更に其各部分の意義は其關係に依存してゐる。といふのは其意義といふのは其各部分の時計の中に於て已の任務即ち時計が要求せられる所以たる時間の測定といふ事を果すための分擔其者であるからである。しかし、此分前をば其部分が時計の他の部分の分擔に依存する活動を通してのみ成就する事が出来る。であるから他の部分との關係の許にある知識は、如何に問題に於る部分が其任務をなすかに付ての理解を吾人をして可能ならしめるのである。しかしながら何故にかゝる任務がせられるかとの洞察は、其時計全體がよつて以て存在する目的の知識と、よつて以て目的が仕遂げらるべき時計の全活動に對する其部分の活動の關係につきての知識とを、包含する者である。であるから組織に於ける或部分につきての完全なる理解は、其部分の他の部分並に全體に對する關係の知識を包含するわけになるのである。勿論此等の關係の遠近につきては各異つた程度の者であるわけである。しかし一の組織の中には斷絶といふ事はない。だからすべての部分は直接或は間接に他の部分と連結されてゐるのである。或部分につきての完全なる知識といふのはそれに屬するあらゆる關係——直接たると間接たると

に論なく——の知識を包含するであらう。であるから全體につきての知識であるべきである。時計の如き小規模な又人工的な組織につきてならば叙上の如き完全なる知識といふのは求められ得る。しかし組織の規模が擴大され又其が複雑になるにつれて、かゝる完全なる知識に到達する事が困難となる。だが組織の特質といふ者は其範圍並に複雑の度に無關係であつていづれの場合でも同じである。かくて科學的見解は宇宙の中に關係的に排列せられてゐる本質的なる部分を主張する事によつて其を一組織として見る。哲學的見解はかゝる部分の本質的關係を全體に總合する事によつて、即ち其によつてのみ完全なる説明が與へられ得る全體といふ者に各部分の目的又は機能を關係せしめて組織なる概念を發達せしめ完成せしめる。

此宇宙の組織に關する人類の全體の知識は甚だ不完全な者である。各個人の知識につきいふならば尙更不完全な者である。といふのは種族全體の知識が貧弱であるとしても、其は各個人の限られた能力と比較するに尙はるかに廣大な者であり、何人も其一小部分以上には之を支配する事が不能なのであるからである。故に我々は専門家なる者を持つ事になる。即ち知識の全領域は幾つかの部分に分割せられる。そして各人は已の努力を或る限られたる分節に制限する

のである。此等の分節を我々が漠然と個々の科學といつてゐるのであるが其は其自身に於ては稍完全に組織せられた者である。そして其等是我々によつて次第により小なる要素的組織に分割せられてゐるのである。組織といふ概念は、其故に知識を組立てる場合のすべての人の試みを決定する事になる。我々は其自身大きな組織の構成にあづかる無数の小組織を持つてゐるわけである。此構成は宇宙自身全部を包含する大組織に達するまで續けられやうとする。そして此全過程を通じて關係の連續といふ事が見られる。であるから最小部分でさへ——一粒の塵又は一瞬の氣持ちの如き——他の部分及全體と本質的なる結合の許にある。即ちテニソンが功妙なる次の句に言へるが如くである。

"Flower in the crannick wall,

I pluck you out of the crannies,

I hold you here, root and all, in my hand,

Little flower-but if I could understand

What you are, root and all, and all in all,

I should know what God and man is."

第九節 實在及知識の性質

しかし次の質問が提出され得るであらう「如何なる意味で此終極の段階の者が知識といはれ得るのであるか？其はむしろ一の哲學的想像又は宗教的の信仰ではないか？」と。此疑問に答ふべく我々は今少し十分に知識の性質を研究せねばならぬ。

知識は前述せる如く實在の本性の洞察である。換言すれば知識の對象は常に我々自らも其部分になる實在世界の或部分である。さて我々が感覺的存在のいつれの者とも接觸を保つてはゐる。我々は視覺する。しかし我々が見る者は我々が望む者とは無關係である。我々は聽覺する。しかし何を聽くのかを決定する事が出来ない。我々は觸覺する。しかし觸れられた表面は我々の望む所によつて左右されない。即ち亦我々の精神内容と無關係である。我々は味覺し又嗅覺もする。しかし結果としての感覺は味覺され嗅覺される對象其者のみに歸せしめられる。換言すれば知覺せられる者が我々に與へられるといふのは、實在世界の性質によつて我々に規定せ

られてゐるのである。かくて實在は我々を制約してゐる。實在と想像とを區別するのは此制約的力である。しかし實在は單に、現實的感覚によつて經驗せられる所の者でない。我々は同じ制約を記憶にも見る。我々は過去の行爲並に經驗を想起する事が出来る。しかし我々が其記憶が過去の經驗と大いに異なつた者であつてほしいと望んでも、我々は其を異つたものであると信ずる事が出来ない。其記憶も我々の實在の一部分である。其は我々の實在的過去である。其過去は我々が想像的に望む過去とは大いに異つた者である。此制約は未來に關係する者としては受取られる事が出来ない。未來といふのは實に之を豫期するといふ事もしばしば起り得るかである。しかし此豫期も單に幾分可能的だといふに止まる。其は過去の場合に於て誤なきが如くに誤りないといふ者では決してないからである。

しかし現在の感官知覺も過去の記憶も實在を我々に熟知せしめる以上の事はしない。實在は我々に知識材料を與へる。しかし知識其物をば與へない。最も單純なる場合に於てすら感覺に與へられる者は思惟によつて解釋せられなければならぬ。我々は直徑二三寸の黄色の球を見て其が橙であると認める。かく認識する場合我々は其橙に現在我々の感覺到表はれてゐる以上に

他の多くの性質並に關係を歸せしめる。我々は其を汁多き暖地に生長する木の實であるとする。更に此以外の事を此小さき黄色の球が我々に對して意味する。而かも其等の意味が現在直接に我々に經驗せられてゐるといふわけではない。其或物は過去の經驗に於て與へられたものであり、或者は他の證明によつて知られ、或者は推理の結果知られたのである。更に他の例を引くならば、私が朝に目覺めて地面が雪に覆はれてゐるのを見るとする。そして私の記憶は昨晚私が床に就く以前には雪が降つてゐなかつたといふ事を想起せしめるとする。私は何等の躊躇もなく雪は昨晚雲から降つたのであるといふであらう。しかし私が感覺的經驗によつて其を知るのでない。私は其を推理したのである。疑もなく其推理は過去の經驗に基づいてゐる。しかし其推理自身は決して感覺による經驗でもなければかゝる經驗の過去の記憶でもない。そして雪で覆はれたのだとして此地面が私の眼に影せしめる眞白なる景色を説明する時でさへ、勿論、前述の橙の例に於けると同じ様に感覺的經驗を超えて爲してゐるのである。のみならず感覺的經驗は思惟によつて埋めらるべき多くの間隙を残す者である。例へば私は今朝自宅を出て午後歸つて來たとする。私は自分が出た後も元の位置に其家が立つてゐるといふ事を全く信じ切

つてゐる。しかし私の家は終日私の感覺に表はれなかつたのであり、又或人が終日其家を知覺してゐたといふ證明を其人から受けたわけでもないのである。而も私は其家の立つてゐる事を決して疑はない。といふのはもしさうでないとすると、私の家が、誰かが見たり觸れたりする所の位置に有て見たり、或は其は知覺せらるべき場所に直接ある者ではなくなつて見たりするといふ假定を私はせねばならぬからである。即ち此様な事は考へ得ざる事であるからである。換言すれば其事は實在の唯一可能的説明といふ事に矛盾するからである。もしも物の存在が其等を知覺する事に依存するとしたならば明に物は知覺を強ひる事が出来ないといふ事になり存在も瞬味になる。しかし此不合理は思惟に照して見るとさうなるといふのであり、思惟より獨立なる感覺の證明に依つての話ではないのは勿論である。

かくて兎に角あらゆる場合に於て感覺的印象が我々に意味を以て來る場合は先づ以て思惟によつて解釋されなければならぬといふ事が知られるわけである。又意味なき場合には其等が知識となる事が出来ないといふ事になるのである。かやうに解釋された場合我々は其を事實とよぶ。事實といふのは其故に思惟によつて説明された事物又は事件である。そして此解釋といふ

事は廣義にいふならば現在の經驗と過去の其とを調和せしめる事だといふ事になる。であるから解釋は或は誤りである場合もあるといふ事は疑ひない。黄色の球は上手に造られた橙の模型であるかも知れぬ。眞の橙其物でない場合もあらう。地面が白くなつたのは雪ではなくて白き霜であるかも知れぬ。しかしかゝる場合には更になされる研究が、我々が臆見的に與へた説明を或普遍的な者に照應せしめる事によつて其が誤りである事を示して來れる。偽橙は觸覺や味覺に於て過去の經驗と調和しない。白き霜を見た場合には雪を見た場合に經驗する事の出來ぬ事柄に接する。又かゝる場合は夜もすがら外に居た人が其晩は雪が降らなかつたと我々に知らしてくれる事もあらう。眞理は其自身に矛盾する事が出来ない。であるから矛盾が見出された場合には我々に何等かの誤りがある事になる。あらゆる思惟は此事を基本要求として立てねばならぬ。何故なればもしさうでないとすると思惟其自身が不可能といふ事になるからである。かくて我々は或人の證明が其の多くの經驗と調和する或説明と兩立しないといふ理由の許に其證明すらも拒斥するに躊躇しない事もある。例せば次の如くである。

ロイス・ド・ランゲメントが陸から十哩離れた海中を泳いでゐる場合に其陸上の住民が自分達

を救助すべく筏を出すのを見る事が出来たとの事を主張するとしても、もしも其等の住民が十六呎以上の高さの人でなければ地球が球状をなしてゐるといふ事が右の事實を不可能ならしめるであらうとの理由の許に、其陳述を眞理として受けとる事を拒斥する態度に我々が出でざるを得ないのである。何人も此著者の話を地球の形状の一般學說に反對する者として、受容する事をしないであらう。何となればもし是認するとすれば其眞實性をば疑ふ事の出来ぬ多くの事實に矛盾する一の事實を是認するといふ事になるからである。

勿論前述せる如く或時に眞理と思はれた者が後になつて誤謬であるとされる場合が少なからずある。此事が或未知の事が受容せられたる説明と矛盾を生じた場合常に起るのである。我々は絶えず日常生活に於てかゝる事例に遇つてゐる。そして「此事につきては新方面の見方をなすべきだ」との語は、すべて既知の事實と調和する者として今迄我々を満足せしめてゐた説明は今や其と矛盾する他の知識によつて缺陷を生ぜしめられたといふ事を指示する者である。我々は其場合既知の其に於けるが如く新事實に對する新しき説明を求めねばならぬ。世界思想史上に於て恐らくは最も著名なる斯かる回轉の事例は、地球の代りに太陽が太陽系の中心になつ

た事であらう。此場合、かの天動説が天體の運動につきて知られ得るあらゆる事實に一致するとして數世紀間眞理であつたにも拘らず、此説を不十分ならしめる新事實の發見が、亦表はれてゐるのである。であるから他の知識と一致するてふ事は即ち眞理を求める試みになるといつても宜しいと思はれる。更に知識が常に進歩するから世界の説明に於ける或項目が眞理であるといふ事を絶對的の確度を以ていふ事がしばしば不可能であるといふ事にもなつて来る。のみならず知識は多くの場合過去に於ける説明を將來に於て訂正せねばならぬ事があるのである。しかしながら、

知識が發達する場合眞理であると確定された其總和は次第に増加してゐる。説明の或項目についていふならば其が事實の唯一の可能的説明であるとされた場合には其が絶對的に眞であるとして定立されなければならぬ。もしも地面が實際雪で以て覆はれてゐるならば其雪は雲から降つて來た者に相違ない。同様に我々の知覺から獨立に存在する物的對象の連續的に存在する事の假定は我々の經驗に確實性を齎す唯一の可能的手段である。であるから一の説明が必要である場合には今迄の解釋を受容する事を拒絶するの意味に於て其は思惟並に人間の經驗に矛盾

を導き出す事であるわけである。其説明は其が意味づける眞實の經驗が然る如く亦知識の一部分なのである。我々が此節を始めた問題に對して解答を發見する事はかゝる考察の中に於てせらるべきである。我々が宇宙が自己決定をなした組織である——過去現在未來を通じて存するすべての變化の中に其自身を表現する所の合理的活動の表現——であるといふ説を知識の資料であるとする事はかゝる必然的説明の意義に於てせらるべきである。其は人類の思惟と經驗とを調和する事が出来、且知識に確實なる基礎を與へ得る唯一の説明である。加ふるに我々が世界を説明する事が出来且其中に起りつゝある事柄に意味を與へる事が出来るといふ所謂其事柄は、世界は自身合理的な者だといふ事を證明する者である。合理的思惟は其自身合理的思惟の表現にあらざる世界の中には何等の意味をも持たない。といふのは合理的といふ事以外には意味を有する者は存在しないからである。此假定なければ人間の知識は礎のない建物なのである。

第十節 精神的構成としての世界

次に我々はいづれの場合に於ても大小に拘らず知識資料が我々に與へられる——其事による

に非ずんば我々が實在を構成する事が出来ぬ——といふ事を知る。しかし他方に於てかゝる資料が思惟によつて解釋された場合にのみ知識内容となるのである。實在を我々に知らしめる者は思惟である。此意味に於て人間は自分の世界を自ら構成してゐるといふ事がいはれ得る。實に各人が各自らの世界を構成してゐるのである。何となれば吾人はいづれも自己自身の個人的經驗によつて實在との接觸に入るのであり、又其經驗を自己自身の知識の分量に依つて解釋するのであるからである。しかし吾人の中如何なる二人の者も全く同一の經驗及び知識を有する者ではない。であるから我々は各自多少異なる立脚地から世界をながめてゐるのであり、又異なる人知の媒介を通してそれを眺めてゐる。而も共通なる知識を有する。すべての知識は同じ實在に關する者だから。そして多くの心があるけれども唯一つの知識あるのみである。思惟に於て實在が各異りたる個人的構成となるてふ事はボサンケット博士によつて次の言に巧妙に譬へられてゐる。「其は同じ建物をちがつた立場から見た配景圖の如き者である。我々の個人的世界はかゝる繪に比較し得べき者であるだらう。其中に含まれる事物は關係並に機能に於て同一の者であるべきである。だから我々は其各々を了解する事が出来る。即ち私の繪は東から

見たのであり、他の人の西から見てかいたのであるとしても其等を同一關係の許にあらしめる事が出来るのである。」と。それで我々が個人的知識の全體を代表し、其全體が人類が眞理を把束する範圍である所の、共通な知識と符合するといふ事は、唯或個人の實在の構成を他人の其と比較し、其結果として各個人のが總合せられ擴大せられる事によつてさうなるのである。此が即ち普遍的知識であり、かくて我々各個人の知識は其中の單なる不完全な反影といふ事になるのである。

斯る普遍的知識は或一時代に出来る者でないといふ事は注意されなければならぬ。其は世界を更に更によく理解しやうとする數ふるを得ざる各時代の人達の試みの結果である。即ち最初は實際的必要上喚起せられ、加ふるに更に進歩せる時代に於ては單に知識自身を求むるといふ知識慾のために喚起せられた試みの結果である。あらゆる個人は過去の思想を相續する者である。といふのは其人は自分が生れた社會に生活して居り自分が學んだ言葉に表はされてゐる多くの説明を見出すが故である。斯る知識の大部分をば彼は、言葉を使用する爲の模倣と學習とによつて無意識的に之を得るのであり、他の部分は他人からの直接の教授によつて得るのである。

かくて如何なる個人も世界を始めから經驗を通して了解しやうとする企てをしない。多くは他人によつて既に理解された其物を受容してゐるのである。もしさうでないとしたならば何等知識の進歩といふ事が出来る者ではないのである。此事が即ち人類の普遍的知識を絶えざる大洪水の如き者たらしめるのであり、又人類をして益々十分に宇宙の謎を解く事を得しむる所以である。

の發達によつて可能にせられる立脚點のちがふ所から出て來るのであつて、經驗の説明が導き出される所の原則に於ける差異ではない。所で此普遍的原則は知識を獲得する過程を分析する事によつて見出され得る者である。其等は知識の基本要求といはれる。何故ならば其等は始めからあらゆる知識に先だつて假定せられてゐるものであり、其知識發達の致命的血液ともいふべきであるからである。知識が發達する場合此等基本要求が更に廣き更に深き意味をもつて來る。だが其等の本質に於ては何時でも同一を保つものである。

此等基本要求の内四つの者が最も重要な者である。(一)同一律 (二)矛盾律 (三)拒中律 (四)理由律、である。此等は協力的の者であつて、或者が他の者の中に或意味では包含せられてゐるといふ事になるから、其等を別々に吟味する代りに、前章に於てのべられたかの世界の説明に關する三大段階——感覺による、法則による、組織による、——の各について更に其等基本要求と結合された者を論ずる事が便利であると思はれる。

第三節 感官知覺の程度に於ける基本要求

感官知覺といふ程度に於ける者の特徴は——恐らくは其による説明は無教育者の常識の其だといはれるであらうが——人間が感覺によつて知覺する所の普通の事物は實在の終極の形式であるとする事である。關係といふ事は無視されてしまふ。事物は永恒の小山の如く確な者とせられる。關係といふ事は事物の周りに雲の如くに集まつてゐる者にすぎない、そして事物の眞の性質といふ事には何等の意義をなす者ではないのである。此見解によるに世界は分離せる獨立せる者の總和である。そして知識の最高目的は其等を正しく分類し記述する事にあるのである。

同一律はこゝでは最も顯著な働をなす。其はすべて物の本質は不變であるといふ事を主張する。此事は差異や變化を否定するわけではない。同一が知られるといふのは雜多の中に於てのみである。櫛の木は大いさ形乃至位置に於て一本づゝ異なる。而も其等は其の生活に於て一般的同一性を示す者として見られる。時は若干の速さを以てすべての者に變化を與へてゐる。そして我々は或變化を豫期すべきを知り、そしてもし變化が現實に見られなくとも其等の者が絶對的に同一であると認める事を斥ける。もしも私が或子供が私が三十年以前に知つてゐた子供と

全く同じであるらしいのを今日見るとした所で、其類似といふ事が其人達は同一の人であるとの信念を私に與へないであらう。同一といふのはかくて雜多の中に常に發見される事柄なのである。

予盾律は同一律に完全正確なる意味を與へるに緊要缺くべからざる者である。其は同一の性質の者が矛盾せる二の状態にある事が許されないといふ事換言すれば或陳述と共に矛盾せる陳述とは二つながら眞である事が出来ないといふ事を主張する。勿論或陳述と其否定とは兩方も同一時に於ける同一實在物に關する者でなければならぬ。昨日は眞の意味で私が頭痛するといふ事が出来ても、今日も同じ様に眞實の意味で私が頭痛がしないといひ得る。そして此二つの言ひ方が矛盾であるとか或はどうしても兩立しないとかいふ譯の者でない。何故なれば二つながら私に關しての陳述であるとしても一は昨日の私であり他は今日の私であるから。實は同一律は「曾て眞なりし者は常に眞である」といふ言方で表はされねばならぬ。何故なればもし其陳述が時と共に變る物についての事だとすると、其原則は或時間の制限内の事柄になつてしまふからである。其時間の制限といふ事があるにしても、或陳述が事物の本質に關する者で

ある限り其者への時間の制限は其者の存在と同延でなければならぬ。かくて櫛の木が櫛の實から生へるといふ陳述は世界中の過去現在未來通じての櫛の木すべてに對して眞として適用される者でなければならぬ。是に於て同一律と矛盾律とが如何に相互に補足し合ふかが知られる。即ち同一律は櫛は常に櫛の實から生ぜしめられるといひ、矛盾律は櫛は他の仕方では生ぜしめられるといふ事と外の木が櫛の實から生ぜしめられるといふ事とを否定する事をなすのである。拒中律は或陳述か其否定かのいづれかが眞であるべき事を主張する。同時に其等の中のいづれかが偽でなければならぬ、といふ矛盾律を完成せしめる。此律の重要な任務は、我々が或陳述を偽であるとした場合には必然的に其れに矛盾せる立言が眞なるを證明する事に存する。勿論此原則も既述した他の者と同じ様な正確を以て理解されなければならぬ。此は二つの矛盾命題の中何れが實際眞であるかにつき我々に常に保證を與へるといふ事をば含む者ではない。疑問の場合には我々はどちらとも決定し兼ねるのである。それは或方法に於て、我々は事物に關する十分なる知識を所有してゐないからである。我々が似よつた目方の二つの物を持ち上げた場合其いづれがより重きかを決定し得ぬ事がある。しかも其内の一方が實際上他の物より重

いのである。一對の天秤が此問題をば解決してくれるわけである。疑問は物其自身の中に存するのではない。其等が我々を感觸する結果に對する我々の解釋の内に存するのである。

理由律はすべて物は説明を與へられなければならぬといふ事を主張する。知識なる以上我々は或説明が常に不完全であると考へてゐる。そして多少は想像的分子も含まれてゐると考へる。前章に述べた如く野蠻人は不完全なる程度の思想の典型的代表者であるが、やはり説明を求めやうとする。しかし彼等は或假定せられた超自然的物の中に主として此説明を求めめる。實に人々が自分達の周圍に存在してゐる事件につき眞面目に説明を求めやうとする際には既に思想的に一段進歩したものであるわけである。

第四節 法則の程度に於ける基本要

此第二階段即ち法則的科學的なる階段の特質は、世界の事物を相互關係といふ事によつて説明しやうとする試みをなす事である。既述せる如く、現代の物理學は感覺的事物について斯る説明をなすのであり、そして殆ど説明しつくしたかの如き觀ある。其は終極の實在を單純にし

て變らざる分子の相互的關係の中に見出し、且、物の性質の恒久性は其の要素たる分子の相互關係が恒久的なる事によるのだといふ事を教へる。同一律矛盾律拒中律等は其故に、より廣き適用をせしめられるわけである。此等は分子間の關係に先づ第一に適用せられる事になる。そして次にかゝる關係の許に構成せられる事物に適用せられるといふ事になるのである。

更に、現代物理學は此等事物が相互關係の中にあり、そして斯る關係に於ける變化如何によつて變化するといふ事を眞實として主張する。だから宇宙の現實的現象は事物相互間の關係が研究せられた場合にのみ理解せられ得るのである。此事は理由律を有力なる者とする。勿論他の者もさうされるが、何故ならば事物の性質の同様性は要素的分子間の相互關係に於て同様性を假定する事によつて説明せられるのであるが如く、變化につきての同様性も其に参加する事物の關係に於て同様性を假定する事によつて説明せられるといふ事になるからである。我々はこゝでは同一性 (Identity) としふよりはむしろ同様性又は相似性 (Similarity) としはうと思ふ。何故なれば前述せる如く同一性といふ事は雜多の中にでなければ見られ得ないのであるが同様性といふのは此兩者を結合した者になり、其故に宇宙に生起する現實的事象に適用するには最

も妥當した言葉であるからである。あらゆる類似せる現象の中には類似といふ事のもとになる同一なる要素が含まれてゐる。そして其を基礎としてのみ一方から他方へ推測が行はれ得るのである。しかし此同一の要素といふのは決して常に表面に表はれてゐるものでない。實は多くの場合我々は其存在を、正確に其性質又は大いさを明にし得ずとも、とにかく假定せねばならぬのである。即ちミルが次の言にいつてゐるが如くである。「自然の成行は實は單なる統一のみでない。其は限りなき雜多である。或現象は我々が最初其現象が含まれるとして見た其同じ結合中に常に循環して居り、或現象は偶然的の如くである。更に或現象は、結合中の特殊なる個所に獨占的に拘束せられたる者として見る事が常であつたのであるが、其が豫期に反して今まで結合されてゐると思はれてゐた要素から分離して居りそして他の全く反對なる様相に結合されてゐるのを見る事もある」と。

とに角始めの經驗に於ては此世界が渾沌たる者である。そして前述せる如く野蠻人は世界を渾沌と見てゐたのである。此が彼等が同一律のみをあらゆる説明をなすべき獨立な本質として物に適用した次第である。「人間が相續いて同じ様に死ぬ、しかしすべての場合を通じて説明し

得べき或恒常的説明原因があるといふ事は野蠻人には決して起らないのである。さうはせずには彼等は引續いて起る死を其自身獨立な一事件として、明に豫期されない事として、見る。そして又或超自然的働きによつてのみ説明され得べき者とする。「現象のあらゆる現實的な混沌の中に常に現實的本質的な統一があるといふ概念が、人間が己の經驗を説明する様式を支配する様になるのは、關係の重要な事が認められ、そして智識の基本要素が其關係に適用された場合に於てのみである。そして其場合科學が始まる。といふのは人々が自然現象中に含まれてゐる同一要素を探すべき試みが自分に課せられたといふ事を認識する様になり、そして要素が多様の中に存在してゐるのだといふ事を知る様になるからである。かかる要素が見出された時に科學的事業が始められたのである。通常の様式に結合されてゐるかかかる同一なる少數の單純な要素を我々が何所かに見出し得るといふ事になつた場合には、其等の物は親知の感を伴ふて我々に影ずる。我々は最早驚かされない。現象中に新奇又は異様の感を與へる者がなくなる。眞實親しみの感をもつ様になり、其等が我々を困惑せしめる事もない。即ち現象は説明せられたといふ事になるのである。

それで科學によつて與へられる説明といふのは、如何なる制約の許に或變化又は事件が生起するかを決定する事の中に成立つのである。かゝる制約の全體が動力因或は單に原因——問題とせられる現象の「*why*」と呼ばれる者である。だから因果律といふのは理由律の一つの部面だといふ事になる。因果律の最も一般的な原理は次の如くである。(一)すべての事件は原因を有せねばならぬ。云々。だから同一律及び其補充をなす他の律と相まちて其は因果の統一性でふ事を次の如く公理として假定してゐる。——即ち、(二)同一原因は常に同一結果を生ず、(三)同一結果は常に同一原因に歸せらるべきである。(四)原因と結果とは勢力の立場から見れば常に相等しき者である。云々。

前述せる如く、以上四つの内の第一公理は世界を説明しやうとするあらゆる試みに含まれてゐる。最も疏雑な野蠻人でさへも其事をば假定してゐる。しかし他の三つは説明が關係的形式に求められる場合にのみ働くのである。其で人々が最初知識を求めた動機といふのは實際必要にせまられての事であるから因果の統一性は其人々には先づ第二公理の如くに反響するのである。其の程度の人々は如何なる制約から與へられたる結果を生じたかといふ事よりも其逆であ

る、或與へられたる制約の許には如何なる結果が出て來るかといふ事の方により多く興味を持つ。だから彼等は因果を主として原因の方から研究するのである。換言すれば彼等は多少注意して或る望でゐる結果を生み出すべき所の制約を分析して見るのである。そして或場合に或結果が得られた場合に其はすべての場合に起るであらうといふ事を、彼等が共同に制約を確かめ得る上に於ては假定するのである。彼等も、かくて因果律を適用するといふ事になるのである。

しかし得られたる結果がしばしば一般的であり、人々の實際的必要が其を細心に分析すべく彼等を勵まさない事がある。それで第三公理が眞實でなくて或結果が異なる原因より異なる機會に生ぜしめられ得るといふ事が淺薄なる觀察にはしばしば起り得る事もある。もしもさうだとすると因果律は平面的のものになつてしまふ。即ち同一律は其適用は半分だけといふ事になるから。而も實は以上の事實が最近まで普通の概念となつてゐたものである。野蠻人でも自身の活動が自身の目的を遂げやうとする際重要な役目を演ずる場合には因果の或統一性を認める。彼等は食物として望む動物或は敵を殺さうと欲する。そして色々な仕方で此事をなし得ると知つてゐる。彼等は可知的な力によつて生ぜしめられたのでない死方を實見した場合に

は、悪性の靈魂によつて破壊的働力が同じ様に試みられてゐるのだといふ事を假定する。死といふ事はかかるが故に明に種々なる原因の結果である。扱て野蠻人のみが事件を説明するのにかゝる粗雑な仕方であるとわけではない。ミルの如き大論理學者でも次の如く言ふ。「唯一の結果が唯一の原因のみから生ぜしめられるといふのは正しくない。制約の集合——即ち多くの原因が一の死といふ結果を生ぜしめ得る。」と。しかし死といふ事を申すに當つて、彼は、原因を發見するに必要であると自らいふ同じ探求的分析をば結果の方へは適用しなかつたといふ事を自ら表はしてゐる。検屍官の訊問はかかる分析を完うせしめやうとする試みだといつてもよからう。そして正しく同一の原因からは同一の結果が出て来る、といふ假定の許にのみ必然的に此訊問が進めらるべきである。死一般の如き物はない。あらゆる死は或特別なるものである。彈丸が頭を貫いた結果又は砒素を飲んだ結果としての死を云々する場合には、我々が其言葉を甚だ漠然と使用してゐるのであるか、又は我々は全體としての結果から最も著しき個人的利害と關係すべき或一事實のみを切り離して考へてゐるのである。第一の場合に於ては頭に生じた穴が死と同様に彈丸の結果のいちぢるしい事實である。同じく身體の組織に於ける特別なる事

情といふのが死と同じく確に砒素を飲んだ結果として生じてゐるのである。

一寸見た所では同じ結果が或場合には或る原因により或場合には他の原因によつて生ぜしめられるといふ事は確からしく思はれる。かくて摩擦燃焼蒸氣の液化氷結壓縮等すべてが熱を生ぜしめる。此等の事實相互よりも更に差異ある者があり得るであらうか？ 而も此等の場合すべてが同じ様に共通なる機械的法則による分子運動の遊離といふ事を含んでゐる。此事例が巧に因果につきて通俗的見解と科學的見解とが異なる事を明にするものである。前者は自身感官知覺の範圍に限られるし、そして因果を視覺又は觸覺に表はれる物の相互關係の中に見出すのであるが、後者は其を定まれる條件の許に定まれる仕方で變化しつゝある恒常的同一なる性質を顯はす所の過程其者を分析する事に求めるのである。いづれの場合でもかかる分析は困難なる試みである。多くの場合其が尙成就されてゐない。しかしかかる分析が可能であると見られた場合には、表面的には非常なる多様を表はす者の中にも、其分析が根底に横はれる同一性を常に示す事であらうといふ事の信仰は、因果は統一的だとの公理を受容する中に含まれてゐる。

第三公理が第二公理の後に認められるが如く第四公理が第三公理の後に認められる。而も尙

因果律に對する同一律が適用せられるのを見る。そして其が最も一般的なる形式に表はされた場合に勢力保存の法則になる——即ち宇宙間に於けるエネルギーの總量は増減する事がなく、單に表現の様を換へるのみである。云々といふが其である。之が現代物理学の最新の概念の一である。しかし我々は此法則が知識發達に於て初めから基礎になつてゐたといふ事及び此法則による説明が、單に多くされる様になつた事のみを主として其の中に見るだけである。

因果に關する此等公理を考察すると、他方に於て、因果につきての普通の見方は不定な者だといふ事を明ならしめる。我々は常に原因といふ者は必然的に結果に先立つものだとしてゐる。實際單なる繼起關係を眞の因果關係と間違ふ事が少なからずある。即ち彗星の出現と戦争又は他の災難と相ついで起る場合其等の間に因果關係ありとするが如きである。だが原因は常に結果に先立つものでないといふ事が容易に示され得る事である。汚點がインキの一滴を紙の上に落した結果であるとしても其汚點は其インキが紙と接觸する事につゞいて起るわけではなく、其接觸と同時に起るのである。又晴雨計の水銀の高さが空氣の壓力の結果であるとしても其が壓力と同時に起る現象である。或場合に於ては結果が原因に續いて起る。クリケットの球

が棒によつて打たれる。そしてボールの運動が原因たる打撃に續いて起るのである。しかし我々はここに再びかかる過程のより深き分析をなす必要がある。棒によつて與へられた運動は其打撃の瞬間にボールに付與せられた者であつて其瞬間の後に起つて來るのではない。かくて其運動は起源となる打撃に續いて起る込み入つた結果である。更に分析を加へると、或事件が同時に原因であり又結果でもある者の、不斷の移動を見る事が出来るのである。

であるから原因と結果とが續いて起るか又は同時に起るかといふ事を我々が云々するのは、如何に我々が其語を使用してゐるかといふ事に依存した事である。ホエウエルが次の言に巧に言つてゐるが如くである。「瞬間的に起る結果又は變動は其を生ぜしめる瞬間的力又は原因と同時に起る。しかし我々がもしもかかる瞬間的なる力の連續を一の合成せられた原因と見るならば、其場合結果——即ち其原因による恒久的結果としての最後の條件——は原因に續いて起る事になる。此場合結果は直接に原因に繼いで起る。原因があり其につゞいて結果が起る。原因並に結果によつて占められる時間は相互に引續いて存す。一方が他方が終る時に始まるのである。」云々。

要するに、我々は世界に於ける變化の連續即ち事件といふ一名の許に含ましめる者の人爲的特性について記憶せねばならぬ。ホプハウス氏がいふ「事件が始まるとか終るとかいふ事はない。只或状態から次の状態に次第に移り行く過程あるのみである。我々は顯著にして明に他から區別し得る状態を別々の名で呼んでゐる。そして異つた事件として取扱つてゐる。しかし、或意味では異なつてゐるがお互の間に境界がないのだといふ事を心得ておかねばならぬ。」云々原因並に結果といふのはかくて普通使用せられる意味では、或連續的なる過程を前と後とに人爲的に區分した場合の單なる部分的名稱にすぎぬ事になつてしまふわけになるのである。

因果律といふのは、其故に人間の心が其によつて働くといふ法則である。其は感覺的經驗によつて合成せられる者でない。何故なれば其はかゝる經驗のあらゆる説明に包含せられてゐるものだからである。ホエウヘル云ふ「如何なる原因が如何なる結果を生ずるか、或る特殊なる事件の原因は何であるか、或る特殊なる過程の結果は何であらうか、などといふ事柄は其で以て經驗が我々を開發せしめ得るものである。しかしすべての事件が何等かの原因を持つて居ねばならぬといふ事をば經驗が之を證明が出来ぬとの外に證明する事が出来ない。」と。又經驗が

或原因が普遍的に或結果と連結せしめられてゐるとの事をば證明する事が出来ない。だがかゝる事はあらゆる科學的法則の陳述には假定せられてゐる事柄である、といふのはかゝる法則は或因果關係が或限られた場合に於て觀察せられるとしてもあらゆる場合を通じて眞である事を意味する、と主張するのであり、而も此事たるや明に觀察によつて證明も反證もされ得る者でないからである。かゝる法則を確立する事が此程度に於ける知識の理想であるわけである。

第五節 組織の程度に於ける基本要末

だが我々は前章に於て、一般的法則の許に特殊なる場合を適用する事による説明は終極の者であり得ないといふ事並に我々は思惟の必然性によつて宇宙を一の自己決定による組織として認めるを餘義なくされるといふ事を研究した。かゝる考方からすると我々は明に科學的程度の知識に於て説明法則を適用する以上の範圍の或重要な説明法則を持つ事になるのである。宇宙自身已を構成する部分と同じく、かゝる法則を體現する者として認められねばならぬ。宇宙は同一律によつて、己れの無限なる多様性の中に其本質を保持する一の絶えざる統一體として

見られてゐるのである。矛盾律によつては其は本質上動かざる者として何等の矛盾を含まざる者として認められる。即ち我々は矛盾を常に誤謬の證明の中に見出す事になるわけである。つまり此矛盾律は誤謬が結局恒久的の者でないといふ事を我々に知らしめるのである。拒中律によつては我々は世界を相互決定の部分から成る一組織として見る、最後ニ理由律によつては我々は宇宙を、部分部分間の關係に説明の第一歩を供給する者として、又部分が全體に對する關係の中には終極の説明を供給する者として見るのである。

科學的方法による説明を論ずる場合我々が其が機械的の者だといふ事即ち或現象を説明するに機械的法則による他の部分との關係を以てするといふ事を認めた。而もかゝる説明が終極の者でないといふ事を我々が考察した。科學的説明を支配してゐる動力因なる概念は目的概念による哲學的程度の説明によつて補はれる。此が組織といふ概念には固有なる者である。時計の例に立戻つて見やう。其が時を示すための動力因は、部分と部分との關係である。しかし其は何故に時計が存在するかといふ事をば説明しない。此は時計を使用する人間の目的の中に存するのである。時計は實に此目的のために人間によつて工夫せられ又造られたのである。そして

其目的がなかつたら時計は存在しなかつたであらう。此目的の概念——其はしばしば云はれる如く終原因といつてもよい——は人間が此世界を説明しやうとするに當つて次第に其説明の試みを形造つてゐるのである。勿論其目的といふ者は常に人間に關係してゐるわけではない。時計の如く人間が己れの目的に供するために自ら創造した様な場合に於ては人間の中に目的があるが。しかし我々は太陽や月や星が單に光を人間に與へる目的のみによつて存在してゐると考へる程度以上の所に達してゐる。又事物の存在が人間にとつて或功用をなすためにあるのだとする事を發見するための努力が専ら考へられたとする程度以上の所に達してゐる。尤も斯くの如き考へ方は第十八世紀に於ては尙一般に普及せる考へであつた。そして家の中に住む有害なる昆虫が、ベストが人間を選練する爲にあるのだと言へた様な根據と同じ様な根據の許に説かれた場合には、誤謬の最頂に達した時であつたと申しても過言ではあるまい。

我々は今やあらゆる形式の存在を其自身に目的を有する者として認めてゐる。勿論かゝる目的は心に賦與せられた事物によつてのみ了解せられ得るのである。人間は或形式の資格を得やうと目論む事が出来る。又最も下等な動物でさへ、満足せんがために勵む所の要求については

意識を有してゐる。所で現代進化論の言ふ所を聞くに、動物の世界に於けると同様に野菜等につきても進化が見られるとある。だから我々は櫨の木の存在の目的が櫨の木の生活に於ける完全を徐々に獲得する所に存するのだといふ事を最も明に言ひ得るわけである。非組織世界につきてさへも我々はあらゆる變化が或目的を徐々に獲得するためにあるのだとして考へねばならぬ。尤も其目的を人間の要求と關係せしめて見やうなどとしてはならないのであるが。すべて事物は、其自身の性質を表現してゐるといふ限りに於て其事物が己の目的を成就しやうとしてゐるのだといふ事がいはれ得やう。かくて我々が、あらゆる變化が或目的を持つた者であるがしかし其目的はしばしば我々からは隠されてゐるのだ、と考へ得る。ハリス博士が次の言に云ふが如きである。「進化論の見地によるに、僅かなる進行が相對的に起りつゝある所にも或目的が存する。そして事實力法則等は一切を説明すべき大なる世界の過程の或部分として見らるべきである。此見地から科學が哲學の中に起つて來るといふ事が言へる。科學があらゆる對象を進化の見地から研究するといふ事になつた場合には、其最高の目的は分類を發見する事にあるとする態度並に法則を終極の者とする態度を超越したといふ事になる。新しき状態又は條件

を産出する能力因の外に、終極の原因即ち目的——なるものが存するのである。」云々。

第二章 知識と言語

第一節 觀念と知識

我々はあらゆる知識といふのは、經驗に正しく或意味を與へる事か、又は其を正しく説明する事かである、といふ事を了解した。又かゝる説明といふのは其經驗と他の經驗とを調和するの義であるといふ事も知つた。換言すれば實在の或部分に意味を附けるといふ事は或適切なる組織の中の己れにふさはしい位置に於て已自身を考へて見るといふ事である、といふ事になる。しかして實在の組織は精神的構成即ち觀念として意識の中に存在する。かくて意味を附るといふ事は或る經驗を既に意識中にある觀念の許に考へて見るといふ事である。だから經驗が解釋せられる場合には觀念でせられるのであり、知識は、眞であると證明されるかゝる觀念によつて、すべて成立するのだと言つてよからうと思ふ。

第二節 觀念と實在

しかして實在といふのは我々各人にとつては斯く解釋せられた者としての我々の經驗にすぎないのである。だから觀念といふ言葉によつては心が實在を把束する仕方といふ事が意味せられるのである。實在の如何なる部分も知られるとする以上其は觀念として意識の中に存在するのである。觀念は實在世界が知識世界から分離區分せられてゐる者であるがために、單に意識中に模範的に存するのだといふわけの者ではない、だから我々は、外界の事物が我々の心に已自身の寫しを、丁度印が蠟の上に形象を捺すが如くに又或物の像が寫眞乾板の上に印象せられるが如くに、印象せしめる者だといふ様に考へ込んではいならない。眼の網膜が甚しく乾板と類せる働きをなす事は事實である。しかし眼は心ではない。網膜の像が其自身意識ではないのである。

第三節 觀念と影象

我々が心の眼との言を云々する事、及大部分の人々がありもしない對象につきての精神的影

像を可成明瞭判明に思ひ浮べる事が出来るといふ事はやはり誤つた事ではない。影像といふのはしかしながら觀念ではない。單に觀念の象徴にすぎない。或橙が現實に我々の知覺に昇つた場合其者の形狀色彩等が橙といふ語が意味する他のあらゆる橙の象徴であるが如く、橙の視覺的影像は全く同じ態度の象徴として意味をなすものである。觀念といふのは、現在の經驗を他の場合の經驗と關係づける際に心が見出す所の意味に外ならぬ。そして心に生じ得る如何なる精神的影像もかゝる意味の單なる事例に過ぎぬのである。

實際多くの場合かゝる影像といふのは觀念に對應する所の者ではない。其が表はれる場合には曖昧なる意味と間違つた理解とを生じ勝ちのものである。「我々は力によつて或結果を與へられた或對象を心に描く事が出来る。——而も其對象をば力が加はる前にも後にも心に描く事が出来るのである。即ち我々が力の結果をば影像し得るが力其自身をば影像し得ないといふ事になる。我々は力をば考へる事が出来るが其を影像し得ないのである。」(ハリス)だから或物の觀念を持つといふ事は其者の性質並に意味を知る事である。換言すれば其物を考へる事で、實在としても又心的影像に表はれた者としても其者を知覺する事だといふのではないのである。

る。

疑ひなく眞の思惟といふのは困難な者である。多くの人々は心的映畫のパノラマを其思惟に代用して満足してゐる。此傾きはストーリーリングの次の言にいへる如くである。「其者は現實に於てのみ得られる寫眞の如き作品といつてよからう。永らくの間作者は單に我々の眼に對するもののみを描く事を望んだ。そして心に對する作品をば成就しやうとはしなかつた。歴史は今や繪畫陳列室又は人形芝居の如き者である。特殊の足や鼻を持つた人々、市街の中の行列、戦争の光景——之等は影像である。すべて影像である。しかも面ゆがめ面いがみ面などばかりがいづれの場合に於ても見られる。我々は決して考へる事を強ひられてない。單に見る事のみやつてゐる。丁度右方には此を見在方には其を見るところといつたかのカラクリを覗き込む場合の如くに。」云々。尤も

ストーリーリング博士が我々に示せる如くに、かゝる影像は思惟の始まりであり其が表現する條件を成すといふ事が正しい事である。人が思惟の第一歩——即ち感覺的思惟——にある際には彼は己の知覺又は影像と其等の意味とを分けて考へる事をしないであらう。だが我々はかゝる

程度の所から抽象觀念又は意味の程度の思惟へと移つて行くでなかつたならば已を神祕を了解する域にまでは決して達せしむる事が出来ず、只己自身の影象に便りなき餌を求むるのみであらう。是即ちかゝる影象が個人的特殊であるといふの義である、而も其特殊なる物はいづれも其自身の性質と關係とを示しそして其際の性質と關係とは意味を表はす部分となるのである。幾何學の問題を解決する際如何に誤られ易いものであるか、といふ事を知つてゐる。我々が三角形一般につきて或關係を定立するとしやう。其場合我々が描いた特殊なる三角形が偶然にも二等邊のものであつたとする。がかゝる偶有的なる性質を本質的のものとなし其基礎の許に誤つた推論を進めるといふ事は我々には有り勝ちの事である。影象は特殊なるに對して、意味は常に普遍的なものである。即ち我々が同一觀念の許に考ふるあらゆる個々の經驗に共通なる者なのである。

第四節 觀念の發達

もしも我々が、如何にして知識即ち意味の系統が各個人の心に發達するものであるか、尋ねて見るなら、我々は曾ては一般に受容されたが今日では明に誤謬であると證明されてゐる一の學說に直ちに接する事であらう。其說によると、心が個々の事物の觀念から始められる、次に比較を用ひて其等分類する、かくて練瓦師が壁を造ると同じ様な仕方次第に己れの世界を築き上げる事を續けて行く、といふ。此以上の誤りはない。現代の心理學は心が全體としての己の經驗の漠然たる適用から始められるといふ事更に次には經驗の種々なる分節が己の興味或は特種なる注意を引く様になるから其經驗が次第々に分割せられる様になるといふ事、を十分に證明した。ボサンケット博士が示してくれた如く、「光學的な助力なくとも注意を引く遠き景色の様相を知る事は、或る結果を齎す力がある。」といふ事で以上の過程が説明され得ると思はれる。此過程は全體として始まるのであり、其要素から始められるのでない。分類による觀念は顯著なる差異が注意を引く場合に於て、より廣きより漠然たる觀念からこしらへられるのである。最初の觀念は漠然たる何物かである。そして此から絶えざる分割によつて、實在の異なりたる形式に於ける更に更に定限せられた觀念が發達して來るのである。かくて求められた如

何なる段階に於ける觀念も、其等の許に得られる新しき経験を解釋するために使はれるのである。かくて知識發達の過程に於て分析と綜合とが相共に行はれる事になるのである。

第五節 觀念と言語

かゝる過程は、一方に於て各瞬間に於ける経験を成立せしめる全複合體の中の或一要素に注意が集中せられ得るための記號、或は他方に於て其觀念が得られるや其が意識の中に符號的に表はされ得るための記號、の體系がないとしたらば恐らくは起つて來るといふ事が不可能であるであらう。かゝる記號の體系が即ち言語である。だから個人の心に於ても或種類の言語といふ者がなかつたならば知識が發達する事がないのである。

第六節 言語と知識の交渉

知識の發達につきて我々が考察する場合言語の必要なる事が容易く了解せられるとしても、其必要は個人に於て然りとするばかりではなく、民族に於て特にさうであるとの意である。我

々は知識の發達といふ者は人々がお互に己の知識を融通し合ふ事によつてせられるといふ事を知た。しかしかゝる融通或は交渉は、實在に對する關係が一般的に受容せられ理解せられる記號の體系即ち共通なる言語が必要だといふ事を意味する。此事が更にかゝる記號が亦個人的思惟の用具でもあるといふ事を意味する。即ち交渉の手段としての言語は同時に個人的思惟の手段でもあるわけである。

第七節 聲音言語

思惟又は思想を交渉するためのあらゆる記號體系の中で言語は最も便利なる者であるといふのは其自在なる人爲的特質によつて他の思惟の記號が爲し得るよりも遙に一般的抽象的な意味を其が支持し得るからである。かくて知識が發達する場合言語が益々排他的に聲音による言語にならうとする傾きがある。野蠻人は己の思想を身振り言語によつて傳達し合ふ事が多い。知的に最もおくれてゐる野蠻人では聲音による言語が甚だしく貧弱であるがために暗黒中ではお互に思想を理解し合ふ事が出來ないといふ事がある。即ち言語の用をなすべき身振りが暗い

所では見る事が出来ない故である。かく身振りは思想の記號としては心的影象同様不利益をも持つてゐる者である。視覺的影象と同じく身振りは單に外的なる視覺的なる性質のみを表はす。そして此はしばしば最も重要な性質からかけ離れた者である事もある。身振りは其を考へる場合屢疑問を伴ふ。例へば兩手をばたばたさせる事が鳥の義にもなるし飛ぶ動作の義にもなる様なものである。全然或は大部分身振り言語による場合では知識の進歩が感官知覺の程度の者でさへあるとしても僅かしか之を爲す事が出来ないのである。だから如何なる程度に規定せられた意味をも表はし得る便利なる記號の體系が、思惟の發達に本質的なものである。聲音言語は此要求を満たすものである。のみならず容易すく表はされ得るといふ利益を有する。そして暗黒中に於ても明るみに於けると同様に傳達の方便として用ひられ得る。更に相離れたる人々の間に於ても現代電氣の應用が言語による利益を非常なる程度にまで受くる事が出来る様大いに改めてくれた。

●文字は勿論單に聲音言語の異りたる形式の者である。だが其は他の何物も演ずる事の出来ない役目を知識の發達に於てなしてゐる。文字は已による知識の傳達を無限なる範圍にまで擴張

する。そして或る特殊な個人の心が過去及び現在に於ける多くの人々の心と接觸する事が出来る様にしてくれる。個人の知識が一方民族の知識を構成し他方民族によつて訂正せられて行くといふ事は主として文字言語を手段として用ふる事によるのである。勿論此訂正といふのは必要である。といふのは、經驗が經驗によつて説明せられそして或個人の經驗が他人の其と異なる事があるのであるから、同一實在の同一部分についても種々なる説明が異りたる人々によつて與へ得られるといふ事になるからである。各人の解釋が全然已れの狭き範圍の經驗にのみよるとしたならば、其は實際驚くべき範圍の場合がある事にならう。勿論かゝる矛盾せる説明の内唯一のもののみが眞であるわけである。今日でも我々はかゝる多様な説明を見てゐる。意見の相違といふのは即ち其である。だが我々は我々の觀念を無數の他の人々の經驗によつて試し見る事が出来る場合には我々は最後に眞理に到達する事が結局出来得るといふわけである。かゝる試みは生涯を通じて文字と聲音言語とによつて行はれてゐるのである。

第八節 言語と學習

子供が母の言語を學ぶ場合獲る言葉といふのは觀念の最初の記號たるものからせられる。其場合其等は實在の或部分に關係した者である。彼の觀念といふのは勿論始めは極めて不完全な者である。だが實在に關係してゐる點では彼も他の人々も同様であるといふ事實が教授を可能ならしめるのである。例へて見ると、或人が一つの花を見て而も其名を知つてゐるとしても其花に關しては殆んど自分は無知であると自覺したとする。それでも彼は其花につきて十分なる正確なる知識を持つてゐて其故に自分のとは大いに異つた知識の所有者たる他の人からして教へを受ける事が出来るであらう。而も此事は、兩人の觀念は異つてゐるとしても尙其等が實在に對する關係が同一なるが故になされるのである。そして此の關係の同一てふ事は名稱によつて印されてゐる。だから其名を言ふといふ事は、子供が、其實際の花が表はすと同じ様な明瞭さを以てする表示について、より十分なる知識を求めてゐるのだといふ事を示すものである。だがかゝる教授が、教授者が子供にとつて明かである言葉——即ち子供の心に一定の觀念を生ぜしむるが如き言葉——を使用する場合にのみなされ得るのである。彼が最初持つてゐた花の觀念よりもつと十分なもつと正確な花の觀念を作る様に導かれるといふのはかゝる觀念を結び付ける事によつてされるのである。

其場合同時に、子供が自分が今まで経験しなかつた實在の部分につきての觀念をも造るといふ事になる。「我々は水銀について子供に言ふとする。我々が其が其光澤と光線を反射する仕方が白蠟と似てゐるといふであらう。又其が鉛よりも重いといふ事、其が水の様に液體であるから我々が其を一の桶から他の桶に注ぐ事が出来るといふ事をも言ふであらう。尙我々は更に正確にかゝる陳述を表出して其等を更に修正する事も出来得やう。所で我々は、其水銀に關して言はれた其等の言語は子供にふさはしい者であるとしなければならぬ。もしも其が妥當な者でなかつたならば其陳述が非常なる誤謬を招ぐであらうから。最後に、もし其子供が綜合力を十分持つてゐるとしたならば、我々が彼に得させやうとする新觀念に以上述べられた特質を綜合する事を敢てするであらう。かくて水銀といふ語は彼にとつて意味を有するといふ事になるのである」(モルガン)

我々が我々自身経験しない所の實在の部分に關して他人の言語により間接的に知識を得るといふのはすべてかかる言葉と學習とがあるによつてせられるのである。だがかゝる間接的知識

といふのは我々自身の經驗から起る直接なる實在知識に結局依存するといふ事は明である。そしてかゝる直接知のみが間接知を交渉せしむる言語に對して意味を與へる事が出来るのである。子供が幼時に於て己の直接經驗の周到なる吟味並に分析によつて得る觀念を出来るだけ多からしめ十分ならしめ且正確ならしむるのみならず其等を正しく言語と連結せしめねばならぬといふ事が、重要となつて來るのは即ち此事の爲である。此が亦言語の要求といふ事がなかつたならばあらゆる心的仕事が可能となるといふ所以でもある。だから教育者の主要なる任務の一は生徒に言語を開發せしめてやるといふ所に存するのである。

第九節 聲音言語及文字言語

知識並に思想の交渉といふ事は別々なる心に共通せる觀念の存在する事に依存して行れる。此共通せる觀念といふ語では其が同一實在に關係せる者でありそして本質的に共に同一意味を附與する者であるべき事を意味する。異りたる人々の觀念が、ちがつた經驗から其等觀念が生ぜしめられるのであるから、或る程度以上に嚴密に附合する事がむづかしい。かくて讀者又は

聽者の觀念が書いた人又は言つた人の觀念と著ちるしく異なる者であるならば非常なる誤解が生ずるであらうといふ事が明かである。言葉による思想交換ならば質問する事によつて此を避け得る。——如何なる點でいづれの方の解釋が疑問らしく見えやうとも。しかし書いた人と讀む人とはお互に大いに不十分なはめになる事がある。一方讀者が著書の解釋に誤りたる先入觀念を持ち來らす事もあらう。或は彼は不注意に又大急ぎで其を讀むといふ事もあらう。いづれにしても誤られたる意味が著者に歸せしめられる。そして言葉の交換による訂正といふ事は見られない。プラトールがずつと以前次の言に云へるが如くである。「言葉は其が書き表はされた場合、其を理解する人や理解せぬ人並に共に對し誰に答を申すべきであり誰には答を申すに及ばぬといふ事を知らない人、等の間を轉々して歩く。そして其場合虐待せらるる事あるとしても保護さるべき人を持たず又自身では保護も守護もする事が出来ぬ。」云々。他方に於ては著者自身不明瞭に表はすかも知れぬ。それで讀者が不注意又は觀念の缺乏に因るでなくとも著者がいはうとしてゐる事は一帯何であるかといふ事が如何にも疑はしきがために、著者の意味する所を把握する事が出来ないといふ事があり得る。質問が困難點の解決には導いてくれる。だがもしも

印刷せられた頁に問ふとしたならば其は常に一の變らざる解答を與へてくれるだけであらう。更に他方に於ては、印刷せられた者が何時でも質問を受くべく準備が出来てゐる點に於て、生ける教師がさうであるよりも一層甚しき大なる忍耐を以て學者の愚鈍と曲解とに堪えてゐるといふ事もある。

第十節 意味と文脈

誤解の責任は言葉が曖昧に語られた場合非常を増大せしめられる。曖昧といふ事がすべて言葉が幾分其文脈によつて定められた意義を有する事からして出て来る。觀念の發達を申す際既に示された如く、我々は事物の分離せる觀念から其を取扱ふ事を始めそしてそれらを結合するのではなくて、先づ漠たる全體としての觀念を得て其を分析して見るといふ順序になつてゐる。所で言葉は觀念の符號である。それで我々は孤立せる語のではなく實際に言はれてゐる者としての言葉の起源を求めねばならぬ。實際言語の始まつた最初の段階の所では聲音言語でも文字言語でも其言語を分割するといふ事がなかつた。言葉の根原の原則が見出され説明される様に

なつたのは最も最近の話である。實に發生と發達とを此原則に負ふ所の言語ならば、其構成要素が文典に表はれ文典を組織する以前、生ける舌の者でなくなつてゐるのであるかも知れぬ。我々がABCと呼ぶ所の、構造に於ける最も根本なる者は、言語の發明と使用どが行はれた後數千年間は人の心と唇とに自明に存在した者ではなかつた。而も此あらゆる言語に肝要なる構成要素は始めから其處に存在してゐたものである。言語の知識は實在の他のすべての知識の如くに全體に始まつて次第に要素へと移つて行く者である。それ故言語のすべての部分は已が其中に存在する所の文脈の中に其眞の意義を求むべきである。例へば、論理學が教育に關係する事につきての私の考が全體として此本の中に表はされてゐる。しかし其全體の考へすら其特質を私の精神生活に於ける他の内容との關係に歸せらるべき者であるといつてよいと思ふ。其私の考を十分に自己包含的な全體と取つても、各章の完全なる意味が、其章に表はれた考と其本の全體に表はれてゐる考との關係に依存してゐるといふ事を含むは明である。同様に各節にのべられる内容が其完全なる意味をば其章の他の節と其節との關係の中に求むべきである。各文に表はれた意味は其文を含む節全體と關係せしめられて役をなすのである。文を以て我々はまと

まつた考に到達する。文が語から成るは事實である。それで我々が言ひ又は書く場合には文中の言葉が別々に表はれねばならぬ。しかしながら思想中には其文が一の觀念として存在してゐる。我々は「地面が雪でおほはれてゐる」と書くか言ふかする事が出来る。しかし其事は經驗の單一なる分割せざる一事實を表はす。我々は單語から組織せられる者としての言語の文法的取扱及辭書の中に定められてゐる單語の取扱に慣らされてゐるから、ホプハウスが言つたかの孤々の言語は言語の單なる生命なき斷片であるといふ事を觀過しやうとする傾きがある。我々は或單語例へば「火事」といふ事を聞くと、其を省略された一文章として受取るか——即ち或通告を示すつもりの方として受取るか——或は何を傳へやうとして其人がかくいふかといふ事について全く困亂の状態につり込まれてしまふかである。一單語「アブラハム？」といふ質問で授業を始めて、自分の第六學級全體を茫然たらしめた有名なる校長の事が思ひ出される。此様な考察は言語は文脈中に其語の意味を最も多く負ふ所があるといふ事を明ならしめる。例へば我々は bright day 又は bright boy と云ふ場合此 bright と云ふ語の意味は、此二つの場合に於ては決して同一ではないのである。だから單語の意義は文章の意義と關係があるのであり、

文の意義は已が含まれる文脈の意義と關係があるのである。孤立せる文といふのは孤立せる語の如くは實際の思想に起らない。——其等は論理學又は文典の教科書中には説明の都合上別々に取扱はれねばならぬのであるけれども。しかし我々が「The fire is out」といふ文を以てする際に其が私の書齋に關係しての事であるか或は倉庫の列んでゐる個所に關しての事であるかによつて大いに異つた意味を持つといふ事をば直ちに了解する事が出来る。同じ事が何所にでも通る。文といふものは——多くの文典では如何様に主張するにせよ——完全なる思想を表はす者ではない。單に現實に進轉してゐる思想過程の最小部分的の要素を表はすのみである。

だから文もしくは語を其内に含む所の正しき意味といふ者は思想の一般的話題によつて決定せられて來るのである。此が即ち或る言語が二つ或は其以上の意味を有するといふ事實——例へば a page、といふ語は一の男の子であり又紙一枚の義であるが如く——によつて混亂が生ぜしめられない所以である。其がしやれ事の存在を可能ならしめるとしても、何等の疑問もかゝる記號を用ふる際起つて來ないのである。實際は其言葉は別々の觀念のために存するのであるから、別々の言語である——同じ形式に表はれるとしても全く別々の者であるべきである。我々

が講義又は本を読むのを聞く場合には各部分の意義は多く前にのべられた個所の意義を受けてゐる者なるを知る。實に前の個所が把束せられるでなかつたならば後の個所を了解する事が不可能である場合が度々ある。更に其意味が次に來るべき者を豫期する事によつて補はれるといふ事も屢々ある。それで我々は其自身思想の全組織の要素であるべき文の要素として、語を考へる場合、其語の意味を完全に推知する事が出來るといふ事を了解するのである。

だからすべての言葉が、實際の思想の表出に用ひられる者としては、其中に自分が含まるべき文脈の如何によつて異りたる或特殊なる意味を有するのである。即ち思想の系列に依つて其語が表出にあづかるといふわけになる。而もかゝる特殊なる意味が一般的方面をも有する。すべての語に何時でも表はれ且多くの場合に於ける意味の結合の役目をなすべき一般的意味といふ者がある。そして此一般的意味が明に陳べられた場合我々は其を其言葉の定義と呼ぶのである。定義の性質につきては後章に述べられる。此では、我々が明に或言葉の一般的意味を把束した場合でさへも其言葉を其一般的意味に於てのみ用ひて居ないといふ事を指摘すれば足りる。子供といふ一般概念を具體的に表はす者が實に特殊なる或る男の兒又は女兒であるといふ事の外

には、其子供といふ一般概念に相當る子供一般といふが如き者は存在しないのであるから、我々が實際の思惟の進行に於て子供といふ語を使用する場合は何時でも其語に應ずる一般概念が或特殊なる思想の内容によつて補はれるのである。だから一般的意味に關する我々の知識が、實際の使用に於てはすべての言葉が文脈によつて意味が補はれてゐるのだといふ事實を改める事にはならない。一般的意味といふのは一種の核であつて其周りに特殊なる意味が附けらるべき者である。しかしかゝる特殊なる意味の或物は常に一般的意味に表はれてゐるといふ事もあ

る。

一般的意味が確定せるのみならず其が特に顯著なる科學的名辭でさへ、尙かすかなる特殊の意味を有する。酸素といふ語は全く固定した意味を持つてゐる。しかし我々が酸素について考へる場合に或る特殊な聯想を伴ふ。——例へば水素と化合して水を構成するといふが如き——かくて全體的思想が實際の文章に於ては酸素といふ語の正しき意味を規定する事になるのである。だが科學上の名辭は通常の言語よりは意味が多義なる事が遙に少いのである。幸にも科學上の言葉は美しくはないので普通の談論の要素になる心配はあまりなかつた。意味の

正確が減ずる事は大きいなる損失であるが故に敢て幸にといふのである。だが傾向が自ら他の性質の者にならうとしてゐる。所で此多様といふ事もすべての語の意義を示すものであるといふ事が注意されなければならぬ。"in"といふが如き言葉でも "I am in trouble" に於ける場合と "I am in London" に於ける場合とでは其意味が異つて来る。同様に簡単な言葉 "am" の如きも接續的にも使はれるし反意的にも使はれる。それで如何なる言葉でも或觀念を表はす場合には常に其觀念の要素になるのであり、又表はさるべき觀念によつて補足せられた所の意義を持つてゐるといふ事になるのである。

第十一節 言語の曖昧

此意味の多様といふ所に大なる利益がある。といふのは、比較的限られたる言方で以て非常に多くの様式の意味が表はされ得るといふ事になるからである。英國の農夫はあらゆる自分の思想を數百の言葉で表はす。又シエクスピアでさへも二萬語以上は用ひなかつたといはれてゐる。而も其二萬語が何たる尊き思想及感情を言ひ表はした事であらう！。しかし一方に於て意

味の多様といふ事は他の多く事物と同じく、不利益をも持つ事になる。——其結果として言語の責務が既述せる如く、曖昧になるといふ事である。さて曖昧といふ事は實在との關係が其實不定であるとの義である。かゝる不定は、特殊なる言葉が表すべき意識の不正確といふ事に歸せられる事もあらう。或は文の誤れる組織に歸せられる事もあらう。個々の言葉の場合では疑問が其一般的意味に影響し得る。といふのは場合の如何によつては一般的意味も變り得るのであるから。——特殊的なる一意が他のすべてを除けて代りとなる事も屢々あるし又或新なる特殊の義がつけ加はつたりなどする事もあるから。此くの如き變化は、文献が書かれ又印刷されて存在する事のために大いに防げられるのであるが、其でも使用せられつゝある言語にはどの物にも不斷に表はれてゐる事なのである。如何なる時代に於てどれだけ長くかゝる變化が續く者が疑問であり得る。かゝる疑問は語源學によつても又前の用法との關係をしらべる事によつても確定せられる事が出来ない。ボサンケット博士が言つてゐる。「言語は其が意味するために使はれる其者を意味する。其が會て意味した所の者を意味するのではない。」と。かゝる困難は時々思想又は知識の或る特殊なる部面にかゝれたもとの意味によつて増大せら

れるといふ事がある。モルガンがよき例をあげてゐる。「The publication」といふ語は法庭の使用を除くならば次第々々に其意味が變つて來てゐる。其は他人との交渉といふ事のために、其交渉の様式並に其受容者の數の如何に關せず、用ひられるのであつた。所が次第に、印刷といふ事が其の publication の最も容易なる又最も普通なる様式となつたのであるから其語が現今の意味を持つ事になつた。今日或男が自分の旅行記を *publish* するといふ場合には、其男が旅行記を書いてそして其を印刷するといふ事を意味してゐるのである。悪口を含む手紙を書いて其を其人に讀ませやうとして送つてやる事は誹毀罪を *publishing* してゐるのだといふ事を知らないで其を平氣でやつたがために或法律にふれてゐる多くの人々がある。といふ事を私は異様に思ふ。換言すれば彼等が印刷する事をしなかつたのであるから其 *publishing* の結果に何等の危険がないと思ひ込むでゐるのが不審でならない。」云々。

しかしながら個々の言葉から曖昧が生ずる場合には種々なる意味の内では何れが採らるべきであるかを考へて見る事は當然の仕方であるべきである。かゝる曖昧といふ事の實例は特に人間の生活に關係せる學問には普通に見られる事である。其學問では學術的な言葉を持つてゐると

いふ事が自ら不足勝ちになつてゐる。だから意味の上に非常なる曲解を伴ひつゝも日常の言語で其學問を叙述するといふ事になつてゐる。かくて意味の誤解の戸が廣く開かれてゐる。或著者が例へば金銭價值動機等の如き語を或意味に使ふとする。其場合己の意志を明に表はすといふ事には注意を要するのである。しかし讀者の方では著者の意味の限定を失念するかも知らぬ。そして外の意味に取つてしまつて著者の意を誤解するかも知らぬ。實際異りたる意味を數種含む言葉を使用する事は著者自身にとつても陥穽である。著者が、或る言葉が或他の意味に使はれる場合始めて或主張なり推論なりが正しいとされるにも拘らず、其言葉を或別の意味に使用する場合には、其責を負ふべきである。

例へば金銭が金銭市場で缺乏と呼ばれた場合には其語の意味が資本投資に於ける缺乏 (lack) の義である。此事から金銀貨の鑄造が増されなければならぬと推論する事が、他の意味に於ける金銭をかゝる鑄造の場合に於ける意味に限定する事からして誤り導かれるのである。即ち前後の場合に於ける金銭の缺乏といふ意味は各決して同一でない。そして兩者の間には何等の必然的關係もない事なのである。Government と云ふ語も亦曖昧な者である。Government に反抗

する事が合法的か否かと問はれると假定しやう。其答が Government といふ語が國家のうちに定められた法律の組織を意味するのが或は其等の法律を成就すべき責任のある人々の團體を意味するのによつて規定せられるといふ事になる。後の意味に於ける Government が前の意味に於ける Government を顛覆してゐるといふ事が起り得る。其場合に於ては、或人が如何なる態度で行動するにしても、其語の二義中の一に於て彼は Government に反抗してゐるといふ事になる。そして一方の見方からして忠義であるべき事が他の意味よりすれば不忠であるといふ事になつてゐるのである。更に、Nature といふ語も甚だ漠然とした者である。「教育が自然 (Nature) に従はねばならぬ」といふが如き注意を引き起し易い句の中に用ひられた場合には特にさうである。此立言が異りたる著者によつては甚だ異りたる意味を有する事になつてゐる。コメニウスでは、教育上の手段が自然界の現象を多少分析して見て其順序に則つて行はれなければならぬといふ事を意味する。例へば「太陽が或單一な事物例へば一匹の動物又は一本の木

の如き者に向はない、しかし直ちに全體に光を與へ且暖める。——此事實に則つて教師が學校又は學級に於て仕事をせねばならぬ。」といふ。ルソーは此句を眞に流行語たらしめた抑の初め

の人である。彼並に彼の學徒では此句が、教師が主として子供が自己の失天的衝動に従ふ場合を考察すべきである、といふ事を意味する。完全なる人間は文明の曙が人格を腐敗せしめた以前の、立派なる野蠻人の中にのみ之を發見し得べきであつた。と彼はいふ。此と同じ思想が、子供の過失は其等が自然的 (Natural) であるの故を以て、とがめてはならぬとして屢々與へられた宥恕の、根底をなしてゐるのである。他方に於てはプラトン並に多くの近代の思想家が、人間の眞の本性 (Nature) といふ者は理想の許の完全者、であるから文明が其に齎す進歩ははかどらぬ骨の折れる努力である、としてゐる。彼等は眞の人間の本性をば人類發達の終局に求めるのであり其始めに求めるのでない。彼等では「教育が自然に従へ」といふ事は、子供を其子供の能力が従ひ得る限りかゝる發達の道程によつて導いて行け、との事を意味するのである。或一句につきかゝる反對なる説明をなす事が甚だ異りたる若干の教育組織を生ずる事になるといふわけは明である。

代名詞以上更に曖昧の原因をなす者はない。何故なれば此語の意味は殆んど全部文脈の如何によつて決せられてゐるからである。如何に多くの事例でも、最も善き著者からさへも擇り出

し得る。例へばステイールが言つてゐる。

「人間が自分の心の状態を考へて見た場合次の事を氣付くであらう。其は、缺點に對する最上の防禦手段は、其に反對する (Against it) 如何に大なる罪科からも、自分自身の精神の最も尊き部分を純潔に保つ、といふ事である」と。此場合其 (it) といふ語が何を受けるかが決して明になつてゐないのである。

或日刊大新聞がロンドン銀行から莫大の金を持ち去つた盜賊を發見しやうとする企について書いてゐるが其中に、次の言を申してゐる。「此銀行が十分に見張りせられてゐる。特に役人が彼等が見られない場所からすべての取引を見守るために、雇はれてゐる。」と。もしも此場合彼等といふ語が何を受けるかを文法的規則に従つて決めるとしたならばかの役人を配つた監督者が甚だ非常識な事をしたといふことになつてしまふ。しかしながら多分記者は彼自身が書いた通りの事を意味してゐるのではないと思ふ。

獨り代名詞並に名詞のみならず何れの品詞も曖昧といふ事については責任がある。スヰフトがルーテルの宗教改革 (The Reformation of Luther) と云つてゐるがこの *of* は恐らくは *by* と

いふ語と同義であらうと思ふ。見物者 (the Spectator) の中に *"I have long since learned to like no thing but what you do,"* といふ句があるが此句の最後の文句の不明瞭なるは明である。齒科醫が廣告した *"Teeth extracted with great pains,"* といふ文句が表出に於て漠然としてゐるのみならず恐らくは無意識的にした事であらうけれども——滑稽な感じを起さしめる。

曖昧といふ事の最も主要なる原因は *"all"* とか *"some"* とかといふ語が、集合的にも個別的にも使はれ得るといふ事である。*"I can move all those books,"* といふ事が、もしも其本が連続的に移されるのであれば正しいといふ事になつても其等の本が同時に移されるとしたならば誤となる場合がある。放蕩者が *"I can afford this or that or the other,"* といふ場合債權者の歎願によつて其等を一所に結末をつけるとの斷案にもする事が出来る。他方吝嗇家が自分の援助を求めて來るすべての社會的に有用な組織に對して援助方を署名する事が出來ぬとの理由の許に、何れの者に對しても署名する事を拒む事を敢てする傾きを持つてゐる。學校が、此種の曖昧に歸せらるべき誤れる推論の害を見る事に對しては、特に責任がある。多くの卓越せる人々が或特殊なる問題の研究に當つて、あらゆる教育的病弊に對する最上の治療を経験する。そしてすべての學

校の課程に於て其問題が包含せられて居なければならぬといふ事を主張する。不幸にも醫者に相當すべき責任者が各異りたる鍼醫者の治療を施すから、其治療の幾部分をば包含するだけの時と勢力とが求められ得るとしても、尙全部を含む試みを敢てしやうとするならば災厄に導くのみといふ事になつてゐる。改革者が場所が自分自身の氣に入りの問題のために見出さるべきであると主張するとしても、教育上の立法者が全體の代りに部分的なる問題のみを注意してあらゆる事情を解決して行かうとする傾きが強くなつてゐる。

意味の誤解又は疑問といふ事は個々の言葉の意味につきての疑ひから起る以上に、巧みに書かれた文からさへ起る事が最も多い。文の意味が語の意味の普通の原因となる。其は我々が既に述べた少しばかりの例によつて明である如く、又語の意味の變化といふ事が主として文脈に關係して生じて來るといふ事實からして豫測せられる如くである。英語の如く分析的なる言語に於てはラテン語の如く総合的なる言語に於ける以上に語の順序によつて意味が生じて來る事が最も多いのである。曖昧といふ事はしばしば語又は句の排列に對する注意の行き届かぬ事から起る事が多い。此についての事例は亦最も多く、最良の著書の中からさへも見出され得る。

ボープがオデッセーの翻譯の中に "And thus the son the fervent sire addressed," と云つてゐるが此はスペンサーの詩ゲラートの中行 "The noble hound the wolf hath slain" と同じく曖昧な者である。タトラーの中にステイルが言ふ。"He hat by some strange magic arrived at the value of half a plum, as the citizens call an hundre I thousand pounds," と。此はいはれる量が當時の言方に於て 'a plum' であるのか又は 'half a plum' であるか判断に苦しむ者として我々に殘されてゐる。曖昧な構造の多くは無意識的にはあるが滑稽な物となつてゐる。恐らくは南部の或大都曾に住んでゐる活潑なる商人が或掲示を窓に掲げて見る人をして喜ばしめた、あの廣告と同じ様な珍妙な例が容易に見出され得るであらう。其廣告には大字で力の入る形式で次の句が掲げられてある。

"Why go elsewhere to be cheated ? Come in here !"

現代の著書特に日々の刊行物が急速にせられるといふ事が、かゝる朴撰なる文が續々公刊物に表はれるといふ事の原因となる。急速なる事からして自然的に出て來る結果は、思想を表現するのに不注意が廣く行はれるといふ事である。かくて我々が著者の意味を把束するためには

再三読み返す事をせねばならぬ。英國人の多數が自分達が意味する所の事を言つてゐるのか或は言つてゐる所の事を意味してゐるのかによつて、疑問が生じて來るといふ状態になつてゐる。此事は實際遺憾とすべき事である。思想と言語との密なる連結が考へられた場合に、表出の曖昧といふ事は實際思想の上に多少反響するといふ事が明になつて來やう。實に我々が考察し來つた様な曖昧は、何時でも我々に起る多くの謬論或は誤りたる説明並に推論の、發足の根底になつてゐるのだといふ事が、次第々に明になつて來てゐる。教育が意味の表出を明にし且正しくせんがために生徒を訓練してゐる次第であるが實は更に少數な又更に有巧な仕方によつて此事をばなす事が出来るのである。

第四章 知識と論理學

第一節 論理學の性質

知識は既述せる如く眞である所の——即ち實在と一致する所の——人間の信仰のみを含み得る者である。知識に於ては信仰と事實とが調和してゐる。しかしかくいふ事は、もしも我々が眞正の知識と假相の知識とを區別する事が出来なかつたならば意味のない事になつてしまふであらう。「我々が知る」といふ事は、其故に、我々が知る所の者を知る事が出来る、といふ事を包含する。換言すれば其知識は其自身知識の對象となる事が出来るのである。そして此事は知識が實在の一部分なるが故に可能なのである。知識はあらゆる知識の對象たる一大宇宙又は全體としての實在の重要な一要素である。しかしもしも知識と信仰とを區別する事が出来るとしたならば、あらゆる知識には見られ得べく而も單なる信仰には決して見られ得ざる或一般的條件がなければならぬ筈である。かかる條件の研究が論理學の領域なのである。

更に我々は知識は自身絶えざる生長並に發達の状態にある者だといふ事を知つた。又人類の知識は個人の産出であり又個人の知識の集合でもある事を研究した。其故に知識の本質を研究しやうとするならば、あるがまゝの知識全體の組織を見るのみではいけない。個人と民族との兩方面に於ける其生長並に發達の條件をも亦研究するといふ事が必要である。かの植物學が單に植物の構造を研究するのみならず其發達をも研究するが如く、又地質學が地殼の性質を研究するのみならず其地殼を今日の状態に到らしめた過程をも研究するが如く、丁度論理學も知識の組織のみならず其起源發達をも研究する科學であるわけである。

第二節 判断の性質

すべての知識並にすべての信仰は斷定即ち主張の形式に於て存在する。其斷案は單に精神的のものであり得る。そして十分なる明なる言葉で言ひ表はされなくてもよいのである。だが經驗を説明しやうとするあらゆる試みは或種類の斷案か斷定かである。即ちそれは前章に示せるが如く或觀念を實在と關係づける事であり、そしてかゝる關係は正しく斷定又は斷案といふ語

で意味される所の者であるからである。だから斷定といふのは實在の精神的構造を表はす所の觀念或は組織の異りたる面に相應する種々なる範圍の者であるといふ事になる。宇宙を組織的全體として説明するあらゆる可能的斷定の中の最も廣汎なる者より、「雨降る」とか「私が齒が痛い」とかの様な單純な現在の經驗を表はす説明に至るまで其段階は無數である。しかし範圍の相違が精神的活動の本質的な特質を生ずるのではない。

第三節 判断と論理學

さてあらゆる主張につきて吟味さるべき根本的疑問は次の事柄である。何を其は意味するか？ 如何なる理由によつて其が基礎づけられてゐるか？ 其は眞理であるか？と。此等の質疑に其れ其れ與へらるべき解答の如何によつて、與へられたる斷定が知識の一部として許さるべきか否かが決定せられるのである。

しかしながら論理學の關係する所は個々の特殊なる斷定の意味並に眞實性に存するのではない、斷定一般の妥當性の條件に存するのである。其條件が或特殊なる場合に於て任務を果すか

否かの研究は、其斷定に表はれた特殊なる主辭につきて研究する其科學の部間に殘されなければならぬ。だから論理學が研究するのは斷定一般に關してであり特殊科學が研究するのは特殊斷定に關してである。

第四節 思惟の抽象的性質

此が論理學は甚だ抽象的な科學であるといふ事を明かならしめる。すべての科學が實は抽象的である。といふのは如何なる特殊科學も或特別なる見地から見た實在の組織に外ならぬから。人間の心が實在と交渉するといふのは全く、或場合には或見地から、他の場合には他の見地から實在に接近する事によつてのみである。ホプハワズ言ふ「心が其全力を以てしても『割目ある壁にある花』の全體さへをも把束する事が出来ない。心が始めには此點から次にはあの點から——即ち或は美しい者として或はウーズウアースの短詩の示唆として、又壁の組織に邪魔になるものとして、或は其は主として炭素酸素水素窒素が或一定の割合を以て結合した化合物として——其花を見るのである。そしていづれの點に我々が向はうとするにしても我々が他の

方面をば顧みないでゐるといふ事が極めて明である。短詩の考が他の考へによつては狂はせられてしまふ。だが尙いづれの方面の事柄も多少其花に關係してゐるのである。眞實なる全體はそれ等すべての方面或は其以上の事柄を含むのである。かくて我々は何物かを完全に把束する時には其物の他の大部分を取殘さねばならぬといふ、思考に關する第一の教訓を知つた事になる。我々は、心が二十以上穀粒を不注意にすべりやる事がなかつたならば一つの眞理の穀粒を淘汰する事が出来ないのである、といふ事を許容せねばならぬ」云々。

だから實在の最小なる部分でさへも之を完全に知らうとするならば、我々は其を一般觀念の多くの者の許に必然的に考へねばならぬといふ事になる。而も其各觀念は更に自ら亦無數の特殊なる事實を包含してゐるのである。かくて何れの一般觀念も無數の個物を同時に結合する關係の表出に外ならぬ。一般觀念は個々の事物の特異性の中に存する普遍的なる同一性である。各一般觀念は更に他の一般觀念と實在に關する類似せる點で關係せしめられる。かくて科學と呼ぶ所の知識の組織的體系が出来上るのである。それでいづれの事實でも、科學が或一點から其事實を見るのみであるから、其が多くの科學の立場から觀られ得るといふ事が明である。此

事柄が即ち科學が抽象的であつて事實其物が具體的であるといはれる所以である。具體的といふのは單に若干の一般性質並に關係の合同した者を意味する。抽象的といふのは其合同の中から或一方面のみを選び他を拒斥する事を意味するのである。

第五節 形式と質料

右の區別は形式と質料との間の相違と密に結合されてゐる。形式といふ事の最も簡單なる例は物質的對象の形狀である。肖像についていふならば其を構成する大理石青銅乃至其他の材料等は質料であるといふ事になる。それで形式といふのは人間の心の創造であるといふ事が直ちに了解せられる。其形式こそは其肖像に對して藝術的價値を與へる所の者であり、又單なる石塊又は金屬からして全然其肖像を區別せしむる所以である。しかし以上は單に第一義的解釋にすぎぬ。尙思索を進めるに同じ區別が更に適用され得るといふ事がわかつて來やう。「形式がなければ質料がない。ナイフの質料は鋼鐵である。其形式は刀身の形狀である。だが其鋼鐵の性質は其部分の或特質と整齊とに依存すると見なくてはならぬ。此がペイコンが常に言つた様に亦

鋼鐵の形式である。だが全く相對的にいふならば其特質は第一形式といつてもよいと思ふ。鋼鐵は其自身の形式を有する。しかしナイフは已れの形式を有する。そして質料としての鋼鐵はナイフの形式の外に多くの他の形式をとり得るのである。大理石は其自身の形式を有する。大理石として化學的並に物理的に定まれる性質を有する。しかし肖像となつては大理石は質料である。其場合形式は彫刻者によつて與へられた形狀である。(ボサンケット)同様に我々は數學的公式を形式といひ得べく、其許に解決さるべき特殊なる事例は質料である。しかし形式がなければ質料がないと同じ様に質料がなければ形式もあり得ないのである。質料より全然離れた形式といふのはない。黄金で以て表はされ得る多くの形式は粘土砂又は水には求められ得ないといふ事がある。種々なる材料によつて取られる形式といふのは大部分其材料自身の性質によつて決定せられる。そして其性質が表はされ得る一の方法である。

第六節 抽象的形式的なる論理學

それで實在のいづれの部分の形式も其形式が例證する一般抽象的性質並に關係から成立する

者である。そして各科學が其性質及關係の或一の特殊なる形式を取扱ふのである。或は性質並に關係の種類に關係するのである。そして其等の性質並に關係がより一般的となつた場合其等の科學がより高き形式の者となつたわけになるのである。だから數學は最も抽象的形式的科學の一であるといふ事になる。即ち其は量を持ち得るすべての事物の一つの方面に關係するからである。だが論理學は更に形式的である。あらゆる知識の形式に關係する者であるから。知識でない者から知識を區別する所の最も一般的な條件を取扱ふ者であるから。各科學が實在の一方面を除く外あらゆる方面を度外視するが如く、論理學は單に知識として其に屬する方面を除く外實際の知識のあらゆる方面を度外視する。知られる要點に無關係なる實在方面を度外視する。其は知識の結果に關するものならず其結果を結局生すべき輪廓的方式を主に論ずる者である。

かくて論理學は感覺經驗の外的世界に於るよりむしろ思惟の世界に於て其論題を發見せねばならぬ。其論題は或意味では新しい者ではない。といふのは知識を研究するに當つて我々は、他の科學が取扱つてゐた同じ材料に必然的に關係して行くからである。他の科學では其等の對

象を其等があるがまゝに、又相互に關係してゐるのを其まゝに取扱ふが論理學では其等を如何にして我々が知るかといふ事の例として取扱ふのである。即ち我々自身の心に對する或關係の許に取ふ。此が兩者の差異である。此點では論理學が心理學と似てゐる。しかし論理學では重みが知識の方にあり心理學では心の方にある。換言すれば論理學は思考の妥當性に關係するが心理學が單に思考が起る様子のみに關係する者である。

第七節 論理學の職能

しかし論理學が思考の妥當性に付て研究するが、如何にして推理すべきかを教へるのが其職能ではない。「人々は辨証法に關する法則を一つも知らなくとも長い間推理を續けて來た。——論理の法則はあらゆる推論に働いて來た。しかも推論者がアリストートルが其推理過程を解剖するまでは其法則の影響については全く無關心であつた。(フェリエール)現今人々は推論を行つてゐる。而も論理學を決して研究した事のない人が屢々完全にやり遂げてゐる。論理學は別言すれだ思考に對して法則を規定するのではない。論理學は其自身如何なる研究方法が眞理に

導くであらうかを決定するのではない。中世に於ては論理學は其様な事をやる者とされてゐた。其結果其時代には人々が論理學の指導にあづかつても知識がほとんど何等の進歩をしなないといふ事になつたのである。今日の論理學者は更に考へ深い。彼等は自分達の領域は知識の増大を持ち來らすすべての方法を妥當なる者として受容する事、其方法を分析する事、而して何が方法に於て本質的であり何が偶然的であるかを發見する事であると考へてゐる。未來を支配しやうとの要求は彼等は決してなさない。何故ならば植物學や地質學の如き科學が未來の全範圍にわたつて取るであらう所の形相に關してよりは發達が今日にまで及んで來た形相に關しては遙に大いなる確實を以て云ひ得るが如く、論理學に於ても左様な事實があるからである。論理學者は過去に於て知識に迄到達した過程につきては分析する事が出来る。そして現在の知識を導き出してゐる。しかしながら彼等は其過程が知識に到達し得る唯一の仕方であるといつて思考活動を制限する事をやつてはならないのである。

第八節 論理學の價值

それで論理學の目的は妥當なる思考の法則と特質とを明瞭ならしめるといふ事である。思考といふのは即ち知識を得る所の働である。そしてこゝに論理學の價值が存する。論理學を學ばない人は一般に自身の心に自らの推理を正確に決定すべき條件を明にしやうとはしない。多くの人は「推理する。しかし自分の推理の根據については甚だ貧弱な事をしかのべる事は出來ない。彼等は善く推論する。そして其場合洞察のきく氣轉のきく巧妙な才智の人であるとしても而も事物の論理的關係を理解する所の人でもなく即ち推理者とはいはれ得ない。かゝる人の實際的特徴は推理の繼起の不整齊であるといふ事である。其人は顯者なる經驗を有する場合又は或自然的賜物にありつた場合にはよく推理する。しかし其等の者から離れると腕くのである。論理的な心はむしろのろい、しかし確實である。」(ホプハウス)論理學の研究は論理的精神の開拓を助ける。しかし其發達を害する様な事はないと思ふ。正確なる思考が行はれる法則を明瞭ならしめる事によつて論理學が間接に正確なる思考の產出を助けるのである。それは其等の法則が指針として意識的に受容され得るのであるからである。

第五章 判断の性質

第一節 判断と命題

我々は或知識なり信仰なりが兎に角断定といふ形式で存在する者なる事を知つた。又いづれの断定につきても我々は三つの根本的疑問即ち其意味其眞偽性及其根據について尋ねねばならぬといふ事も知つた。我々は今や此等疑問の第一の者を取扱はねばならぬ。而も其を論理學特有の一般的仕方で行うと思ふ。我々は斯くの如き判断の働きに含まれる者は何であるかを研究せねばならぬ。其結果何が、取扱ふ所の主辭の如何に拘らず、断定に包含せられるかを吟味せねばならぬ。此研究に入ると、其は精神活動としての判断であつて、命題即ち我々が最初關係せしめらるべき表出としての言葉の形式、ではないといふ事がわかる。我々は判断が言語的に表はれた場合のみ其を考察する事が出来る。しかしかゝる表出は屢不完全である。だから其場合には我々が其言語の背後に眞の判断を求めなければならぬ。そして其が見出された上は我々

が、其判断の眞の意味を、更に明瞭に言ひ表はせるとせられ他の形式の言葉で其を表はす自由を有するといふ事になる。論理學は實にかかる表出が思惟に適應すべき者なる事を假定してゐる。勿論我々は他人の判断をば其が我々に示される命題を通してのみ知るわけである。しかし我々は屢言語としての命題が其が表はさうとする判断と嚴密に一致しない、といふ事を知り得る。それで我々は他人の思想の言語的表出をば我々の他の經驗と同じく解釋せねばならぬのである。我々の解釋が時々誤るといふ事は疑ひない、其場合我々の心に生起せしめられた断定は其命題を我々に與へた人達のと異つた者になる。そして我々は誤解に陥るといふ事になるわけである。

與へられた命題が如何なる判断を交付するかが決まると、我々はそれを受容するか拒斥するか又は其につき疑を持つかしなければならぬ。疑ふ場合は我々は其事項について全く判断してゐないのだといふ事になる。しかし我々に與へられた命題を受容するか或は拒斥する場合には我々が自身判断作用を爲すわけである。受容するとは我々に示された其判断を我々自身の者として採用する事である。拒斥すとは示された判断を拒斥する結果必然的に其に矛盾する判断を

受容する事を意味する。例へば我々は戦争が時には必要であるとの判断を拒斥するとしたならば、我々は當の其拒斥によつて心の中で、戦争は必要でないとの判断を肯定してゐる事になるのである。

第二節 判断と眞理

此事が我々に精神活動としての判断の或本質的特性を知らしめる。判断は常に眞であるべきを要求してゐるのである。誤謬であると信ずる所の事を判断する事は何人にとつても不可能である。或判断は勿論眞でない事が實際にある。しかし其判断を生ぜしめた瞬間は其が其判断者にとつて誤りであるとして影するわけではない。だから一の判断が眞理であるか又は誤つてゐる者であるかである。しかし其は偽はつてゐる者なる事が出来ない。命題は勿論偽言であり得る。而も其が眞理である時でさへも偽言になり得る。何故ならば其命題を言ふ人が其を誤りであると信じてゐる場合には其人にとつては其命題は偽はつた言辭といふ事になるからである。しかし此事は倫理的・心理的考察に屬すべき者で論理的立場の者でない。我々の關係してゐる點

は論理上の事柄である。或立言をなす人が眞實に其を信じてゐるか否かの問題ではなくて、其立言が實際に眞であるか誤りであるかの問題に關係してゐるのである。意志の問題は論理學には興味を生じない。が事實上眞なりや誤謬なりやの問題が其中心となる。そして此事がすべての判断と命題とに適用さるべき問題なのである。

此眞理なる事を要求してゐるといふ事がすべての文章が命題でないといふ事を明ならしめる。文章は命令・願望文又は疑問を表はし得る。しかし或事を命令し又は願望する事は必ずしも其を眞ならしめる即ち實現せしめるわけの者でない。しかしかゝる命令又は願望は確たる事實の世界に實在的に其成就が實現される事にはならぬ事があるとしても、心の中には全く眞實の者として存在するのである。だから命令又は願望は其を希ふ人の願望に關する判断の間接的表明と見られ得る。例へば「お出でなさいジョンさん」といふ事は「私の希望はジョンが此所に來るといふ事である。」といふ判断の間接的表明である。又疑問は判断ではない。其は實に、其疑問中の事實につき或特殊なる判断をなさうとする力の缺けてゐるといふ事を示す者である。しかし間接には其疑問者の精神状態としての判断を表はす者と見られ得る。即ち自分が其につ

きては無知であるから其點について教はりたいたい、との判断を表はす者である。

次に判断は眞理なるか誤謬なるかの外はない。我々は時々「事實以上に眞なる者は他にない」といふ事を申す。しかし其事實といふ事が單なる外界世界の出来事を意味するわけの者でない。其は知られる者としての出来事を意味する。即ち判断としての出来事である。單に出来事といふのは、あるだけの者である。眞理か誤謬かとの事は判断についての話なのである。

第三節 判断と經驗

我々が判断する場合には其故に、其が自分の創造によると他人の判断を受容してゐるのとの如何に拘らず、其者を眞なりと信じて主張してゐるのである。かかる主張は不合理ではない。其は我々に十分なる根據と見える者を其背後に有してゐる。即ち如何なる合理的なる心にも同じ判断を生ぜしむる所の基礎を有してゐる。かかる基礎が何時眞に完全な者になるかといふ問題は後章にのべられる。今は合理的なる心には何等かの基礎がなければ判断といふ事が不可能であるといふ事を示すに止めやう。

判断の根據が判断と關係するには必然的に理解せられた者としての其でなければならぬ。判断が眞理であるといふ事は其は實在を代表するといふ事である。しかし前述せる如く實在は人間にとつて人間が其を意識する限りに於てのみ存在するのである。即ち人間が實在を判断の形式に於てのみ解釋するのである。だから個々の判断はいづれも一の試みである。其場合妥當であると信ぜられた試みである。即ち其は精神的に實在を造り上げやうとする者であり換言すれば眞實の存在に對應する一の組織を我々の心の中に造り上げるといふ試みである。かゝる試みはすべて或經驗によつて招致せられる。といふのは實在が知られるといふのは經驗を通してのみのであるからである。個々の經驗が其が知識の系統中の者となる場合には先づ以て解釋せられ明瞭にされなければならぬ。この解釋が其經驗と、他の經驗——其が自分の者なると他人の者なるとに論なく——から導かれた既存の知識系統とを調和せしめる。

しかし我々の知識系統は觀念の形に於て存在する。經驗の解釋といふのは、だから其を觀念の許に持ち來らす事である。即ち其經驗を觀念から成る一般法則或は性質の一事例として見る事である。しかし觀念が其自身實在の一部分であり或は其觀念が或仕方で眞實に表明しやうと

する所の實在から導かれるといふ事を忘却してはならぬ。觀念は經驗の外に實在から獨立に心によつて造られる者ではない。其内容は實在の中に見出される。しかし思惟によつて求められ、視覚聽覺等の如き感覺の働きによつて求められるのでない。經驗は我々の精神生活の全體である。そして感覺印象自身及び感覺を通して求めらるべき所の説明を包含する。此事に思ひ及びぶならばすべて知識は經驗であるといふ事が出来るのであらう。しかしもしも經驗といふ事を感覺印象に限るといふ一般に普及せる誤りに陥るとしたならば、以上の言方が不合理であるといふ事になる。といふのは感覺印象は全く知識ではなくて、知識が造り上げられる單たる材料にすぎぬからである。

第四節 判断は分析綜合の二作用である

故に判断に於ては個々の經驗を前の經驗から得た觀念と關係せしめる事によつて其を解釋してゐるといふ事になる。しかし解釋しやうとする其個々の經驗は其場合に於ける我々の經驗の全體ではない。其全體から注意によつて選ばれた或要素である。もしも「此室が暖か過ぎる」とい

つたとしたならば其は言者が注意を周圍の空間と其周圍の一事情とに向けてゐるのである。そして其外の事をば等閑に附してゐるわけである。其室には注意された温度の外に他の事情も附屬してゐる。しかし言者が或る感情又は目的のために温度にのみ注意したのである。判断といふのは其故に全體から或要素を抽出する又は分析する働きで又其全體の他の事情を閑却する事だといふ事になる。換言すれば實際の判断は或物についてなされ得べき多くの判断の中の單なる一つにすぎないのである。温度といふのは取扱はるべき種々の觀念の中の一つである。かくて判断は單に經驗の部分的説明だといふ事になる。我々は實在を部分々々による外之を支配する事が出来ないのである。

判断は、更に以外の意味に於て分析の働きである。あまりに熱すぎる温度は其自身注意を餘義なくされる一の經驗である。室の温度が注意された場合其は室の温度といふ觀念と温度の性質としての高き温かさといふ觀念との二つになる。感覺によつて經驗される者は實際の其室の温度である。其結果大層暖いといふ觀念にそれを包含せしめて説明が行はれるといふ事になる他の場合でも斯くの如くである。我々が鳥が飛ぶのを見るであらう。其鳥と飛んでゐる事とは

同一の經驗である。其經驗を表はす判断は思想の單一なる働きである。しかし其判断は鳥と飛行との二つの要素に其經驗を分析する働きでもある。そして其は飛行が鳥について眞實であるといふ事を主張する働きである。

しかし此は單に眞理の一面である。断定が一つの經驗を二つの部分に分析する際其二つは其自身意味を有する。そして其二つの意味は同じ者ではない。我々は鳥を飛ぶ動作の外種々なる動作に於て考ふる事が出来る。又我々が飛ぶといふ事をば鳥の外に風や矢の運動並に其鳥にあらざる他の鳥の運動として考ふる事が出来る。判断は分析即ち部分に分つ働きであると同時に綜合即ち建設の働きである。鳥並に飛行とふ二つの一般觀念は相共に考へられお互に關係せられるのである。

判断は其故にすべて綜合分析の兩作用である。判断が命題の形式に於てのみ吟味され得るといふ事實は其作用の分析的方面を閉過する原因になる傾きがある。何故なれば命題は言語から成立する者であり、其言語は命題中に引離された要素として存し、そして此等の言葉は相續いて表出せられ又受容せられるからである。それで判断を單に綜合的の者と見る傾きを生ずるのである。

ある。即ち鳥が飛ぶといふ命題では鳥といふ語が飛ぶといふ語の前に話され又聞かれる。そして此陳述を聞く人は此等二つの觀念を結びつけて其意味を求めねばならぬ。であるから綜合的といふ事が半斷の全部であると思はれ易いのである。しかしさういふわけの者でない。知覺作用の分析による判断が他人に傳へられた場合には、先づ全體が把束せられた場合にのみ其人にとつて判断となる。即ち各要素が其時には分離せられず全體の中に連結せられたる者として見られてゐる。そして其全體の分析の結果として其判断が心に表はれるといふ事になるのである。命題即ち言語的陳述が單に判断の手段であるといふ事が常に思はれなければならぬ。又判断に於ては其二つの本質的部分が分離しては居るが文章中に於て言葉として分離して居るが如くに分離せられる者でないといふ事も考へられなければならぬ。

第五節 主辭と賓辭

兎に角判断には二つの要素があるが其は即ち主辭賓辭と呼ばれてゐる。文典に於ても此二の名辭が用ひられる。しかし文法的主辭(Subject)は常に論理的主辭ではない。論理的主辭といふの

は其者からして思考が導かれる所の説明される經驗の部分の意味する。そして論理的賓辭といふのは其經驗を更に明ならしむる所のより進められた思想上の運動を意味する。單稱的判断に於ては何れが論理的賓辭であるかを確實にいふ事が屢々不可能である。「此が蘭である。」といふ文章をとつて見やう。此が若干の植物の中何れが蘭であるかとの問への答である事もあらう。其場合には主辭が蘭である事になる。そして賓辭が特殊なる花の指示である。此指示が言語的には此といふ言葉で代表されてゐる。しかし他方に於て其文章は「此花が何であるか？」との問の答でも有り得る。其場合には此といふ名辭が主辭である。といふのは其が思惟の出發點であるからである。蘭といふのが賓辭になる。即ち其思惟を充實する者であるから。又論理的賓辭の限定は既に知られてゐる所の者に依存する。もしも諸君が「彼が明日九時四十五分の汽車でキングスクロスからヨークシャイヤーに行かうとしてゐる」と言ふとする。其場合諸君が彼といふ語を文法的主辭として殘の賓辭であるべき部分から引き離すであらう。しかし思想上に於ける實際の經過は以前に知つてゐる者から其判断が表明する所の者へ向つてゐるのである。此見地に立つのであつたならば其判断を如何なる點から分割してもかまはないのである。そし

て又もしも其經過の性質を表はさうとするならば即ち其陳述が完全にせられるといふ利益のため分割して見ねばならぬ。さうすると、彼、行かうとしてゐる、ヨークシャイヤー、九時四十五分の汽車、キングスクロス等は我々が以前に知つてゐた所の者へ實際上附加せらるべき者即ち實際上の賓辭といふ者になる事にもなつて来る。(ホプハウス)此事が主辭賓辭の實際の決定はいづれの場合に於ても心理的であるといふ事を知らしめる。論理的主辭並に賓辭といふ者がある。しかし其等は固定したる要素ではない。判断の内容は内的に結合せられた要素の複合體である。要素の内いづれも他に對して或は主辭たり或は賓辭たり得るのである。それで文法的主辭即ち説明語に對する主語が、如何なる命題に於ても、或程度までの吟味を経るでなかつたならば論理的主辭となる事が出来ない、といふ事が明になつて來やう。しかしやはり言語は思想を出來るだけ正確に表はさねばならぬから判断は命題によつて最も完全に表はされる事はなる。そしてボサンケットが「文法的主辭が論理的主辭に相當るや否やは我々が言はうとした所の事柄を言つてゐるのか否かといふ事になるだけの話だと考へる」と言つた事柄が大いに適中した言葉になるのである。

第六節 繫辭

命題の要素としては尙吟味すべき一要素がある。論理學は命題によつて判断を表はさうとし、そして其命題に於ては主辭と賓辭とがなり。又はならずといふ動詞によつて或は結合せられ或は分離せられる。此斷定の表出に於ける附加的要素は繫辭と呼ばれる。所で繫辭といふ語は二つの獨立なる觀念を結合するといふ考へを暗示する。だから斷定の分析的方面が等閑に附せられ勝ちになる。それでスポンボーン氏が彼の「Picture Logic」に於て主辭と賓辭とを二つの客車に比し繫辭を其等を結合する鎖に比してゐる様な事も起つて来る。しかしボサネットも言つてゐる様に其様な考方をしてはならぬ。實は繫辭は斷定に於ては全く獨立せる要素にはならない。其命題に於ての機能は其判断作用が實際に起つたといふ事を示すだけである。

繫辭は判断の記號である。其は二つの獨立せる要素を單に結びつける者ではない。其は主辭に、主辭と以前から連絡のなかつた新觀念を、附加する事をしない。却て主辭と賓辭とが一の全體に於て連絡せる要素であり判断作用が其全一體を分析する、といふ事を宣言するものである。

であるから其れはすべての判断の兩面である分析と綜合との記號であるといふ事になる。

第七節 判断に於ける分析と綜合との相對的卓出

すべて判断は分析と同時に綜合を含むが其二つの内いづれかが顯著になつてゐるのが普通である。其は次の事柄による。即ち思惟が全體から始まつてゐてそして其中に含まれる部分間の關係を明ならしめてゐるか、又は、思惟が、區別された部分から始まつて其等部分を結合せしめやうとつとめそして綜合が更に明にせられ全體が構成せられるのであるかといふ事に依存する。例へば八は五と三と加ははつた者だといふ判断では分析が顯著になつてゐる。又五と三とを足すと八になるといふ判断では綜合が勝つてゐる。事柄は以上二つの場合同じであるが其に近づく方法が異なつてゐる。そして實質は我々が云々する仕方の如何によつて影響されてゐない。しかし此問題はかゝる程度の議論では十分に盡されない。それで私が主張しやうする要點を次の一點に限る事にしやう。其は、如何なる場合でも全體並に其を構成する部分が判断に昇

るから、そして其等が區別せられるが判断作用に於ては分れてゐるのでないから、結局判断はすべて総合と分析とである、といふ事である。

第八節 概 括

此章に於て研究した結果を概括すると次の如くなるであらう。

判断は肯定と否定とより成る。其は眞理であるか誤謬であるかである。しかし其本性からして眞なるべき事を要求してゐる。眞理といふのは經驗に與へられた、實在の正しき解釋である。判断は單純なる思惟活動である。そして分析と総合との二つであるが其の中の一つが顯著になつてゐる。繫辭は分離せる觀念を結合する者ではなくて主辭と賓辭とが與へられた全一體中に關係せしめられた要素として區別せらるべき記號である。主辭賓辭の區分は固定せる者ではない。そして判断に於ける實際の思惟活動に關係せられて決せられる。命題は判断の言語的表明として出来るだけ正確な者であらねばならぬ。云々。

第六章 判断の型式

第一節 判断の主要なる型式

判断が表はされる言語的表現形式を完全に數へ上げる事は明に不可能である。たとへ其が可能であるとしても論理的よりは修辭的興味を伴ふ者であらう。しかし判断の主要なる型式を列擧する事は極めて簡單な事である。又前章にも述べられた如く論理學が知識の學說として最初に關係するのは判断である。論理學が命題を單に判断の表明として取扱ふ。それで日常の談話に於ける多様な陳述形式を少數の典型的形式に減限するといふ事をやつてゐる。其形式が判断の様式に於ける本質的差異をすべて表明し得る限りに於て減限しやうとするのである。

先の章で知られた如く知識の組織には三つの段階がある。——事物の知覺による者、普遍的關係の洞察を旨とする者、組織の概念による者である。勿論個人的なる我々各自に於ても人類全體に於ても、知識の全體の中に各段階に屬すべき事例を見出す事が出来る。或範圍の知識は

最後の段階に屬する。或者は第二の段階に、或者は唯最初の段階にぞくするにすぎぬ。各段階に應じて判断の典型的形式が存する。先づ定言的判断即ち事實の判断といふのがある。「此インキが黒い」「此人達はすべて試験に合格した」といふが如き者である。次に假言的判断といふのがある。一般的關係もしくは法則の典型的形式に當る。「もしも水が華氏三十二度の溫度に冷却せられると(一氣壓の許に)其が氷結する」といふが如き者である。第三に選言的判断といふのがある。組織といふ事の典型的判断である。「三角形は等邊か二等邊か不等邊かである。」「といふが如き者である。かくいふと其等が其形式によつてお互に嚴に差別せられてゐるが如くである。しかし典型的には此三つが數へ上げられるが實際上知識は或段階の者から他へ急に飛躍するといふ事がなくて次第々々に他へ發達して行く者であるから、知識表出の判断も徐々に他の段階の者へと移つて行くのである。特に定言的並に假言的判断に於てさうである。それは個々の事物につき正しき知識を與へる實在の分析が同時に事物間の關係を知らしめるといふ事實が期待され得るからである。更に肯定否定といふ重要な區別の意義並に範圍といふが如き事も研究されなければならぬ事になる。

第二節 判断の發達

次に此等の判断形式が最も簡單な者から發達して來る次第をたどつて見ねばならぬ。そして其等相互の關係を示す事が必要になつて來る。先づ肯定判断に於ける此發達を見、次に否定判断の意義を考察するといふ事にしやう。定言判断の簡單な者は、非人稱的判断であり其は現在の經驗の殆んど分析し得ざる様な一般性質を表はす。其等は漠然たる一團の感情から起つて來る。そして分析が其一般的性質を決する限りに於て行はれるだけである。其は子供等がいふ「きれいだ」「それはいけない」といふが如き者である。かかる者では論理的主辭が現在經驗の分割せられざる一團である。そして賓辭が其判断の全體の意味である。我々が日常「雨が降つてゐる」「霧深い」などといふ。此亦非人稱的判断である。かかる判断に甚だ關係のある者に指示的判断といふべきものがある。尤も其は適切な名稱ではないが説明に於て或實在の要素を示すからさういつてよいと思ふ。この場合はしばしば言語による構成が全く行はれない。指示的判断は最も單純なる認識活動に包含せられる。かかる判断が言葉に明に述べられた場合には、其論

理的主辭は概ね「これは」それは「ここは」といふが如き證明的な言葉で示される。「これは蘭である」「ここが倫敦である」といふが如き者である。

分析が尙一步進められた場合に思考の新しい運動が上に述べた如き判断の結果から出て來る。此場合には其結果が主辭の位置を占める。そして新判断は例へば「此本は非常に面白い」といふが如き者である。そして此は明に「此は本である」といふ判断を假定してゐるのである。

更に複雑な方面へ分析が進められた場合個別的關係判断ともいひ得べき者が求められる。「ブライトンはロンドンの南に當る」「此本は其本より重い」といふが如き者である。此場合經驗の分析が一層深められる。そして二つの名辭並に其等の間の關係を我々に與へる。

以上我々が考察した判断は現在の知覺事實に主として關係したのであつたが、主辭が賓辭であると主張される場合には彼等は必然的に現在知覺から離れて前の經驗から導かれた觀念を誘ひ出して來る。以上の二つの事例につきて見るも、この本、ロンドン、ブライトン等が持續せる存在を有せるものとして考へられるが故に、かゝる主辭は現在を起えた關係を有する事にもなるのである。

判断が「ケーザルがゴールを征服した」といふ者の如く歴史的性質を有すると言はれ得べき場合にはかゝる關係が更に顯著になる、といふ事は一層明瞭である。此場合ケーザルといふ固有名詞は或一人の人を代表しそして其人は多方面の活動をしたのであり、其活動は或個人のものであつたといふ故を以て生命と呼ばれる一の全體に統合せしめられてゐる。それで人格といふ者は普遍的の者である。即ちかゝる活動のすべての者に共通なる因子である。そして其等活動はかゝる普遍なる性質が多様となる所の異りたる表現である。かゝる判断は個別的普遍的兩方面を有するといふ事になる。其は事實につきての純粹なる定言的判断と知識の第二の段階をなす普遍的關係又は法則につきての判断との過渡に當る一種の判断である。之を歴史的個別判断と名づけやう。

所で思考の目的は普遍的判断に到達するといふ事である。此方面に於ての第一歩は、現在の經驗が記憶されたる多くの過去の經驗と一致するといふ事が知られた場合にふみ出される。かくて枚舉的斷定といふのが生れて來る。即ち「此五年間私の休日はずボンシャイヤで過ごされた」といふが如き者である。かゝる判断では過去の經驗と現在の經驗との綜合が行はれる。

記憶せられる経験がすべて同様である場合には我々は其等をすべてといふ語で總括する事が出来る。「試験に合格しやうとするすべての私の計劃は成功した」といふが如きである。

しかし記憶による建設は、其記憶を全人類の記憶を含むが如き最も廣き意味に解する場合に於てさへも、我々に記憶以上の結果を齎す者ではない。其は我々をして経験を越えた主張をなさしむる事は決して出来ない。それでは「すべて牛は草を食べる」といふが如き眞實なる普遍的斷定に如何にして我々が到達するであらうか？我々の觀察からは其が他人の證明によつて補はれるとしても「或牛は草をたべる」といふ事以上に主張する權利が與へられない。何故なれば未だ生れない所の牛は觀察せられて居ないといふ事も自明であり、過去に於ける無数の牛については何事も言はれない事も明であり、又恐らくは現在に於て觀察にのぼらない多くの牛が存在するといふ事が確實であるからである。所で我々の判斷はかゝるすべての牛を包含するといふ事も同様に確實である。疑ひもなく経験の齊一が特に其経験が非常に廣められる場合には普遍的一致のための強き假定を我々に與へるのである。しかしかゝる假定は論理的妥當性を有しない。其は信仰を強める。しかし其信仰を知識に變ずる事はしない。オーストラリヤの發見

以前には「すべて鴿はこれまで知られてゐる者は白色である」といふ斷定は經驗に矛盾せず正しいとせられてゐた。しかし「すべては鴿は白い」といふ眞の普遍的斷定が主張せられてゐた者とするオーストラリヤの黒鴿の發見は其斷定が正しくなかつたといふ事を證明した事になる。

單なる觀察は其故に如何に其の範圍が擴大されやうとも眞の普遍的斷定に對して論理的證明を與へる事が出来ない。かゝる證明は常に推理上の事實にぞくする。そして感覺的經驗ではなく思考の作用にぞくする。幾何學の初歩の知識を有する者は、自分が半圓の中に其直徑を底として三角形を描いた場合に圓周にふれてゐる一角が直角である事を發見したとする。其場合其人は半圓の中に同様に描かれた三角形が圓周にふれてゐる角がすべて直角だといふ事を主張する理由を持つてゐない事は確である。かゝる考は或は彼に起るかも知れぬ。そして種々なる三角形を描いて見るならばそんな考へになるであらう。そして結局圓周の角がすべて直角だと知ることであらう。しかしながら一半圓の中にかゝる三角形を作る事は限りないから、又かゝる半圓其自身をも無數に描き得るのであるから、そして如何程の觀察も測定もかゝる三角形すべ

てを吟味する事が出来ないものであるから、「半圓の直徑を底とし圓周上に頂點を有する三角形の圓周にふれる所の角は直角である。」といふ斷定を證明する事が出来ないといふ事になる。かかる斷定を主張するに當つて其が眞理でなければならぬと彼が證明する事は既に知られたる三角形並に半圓の性質からして推論を試みる事によつてのみせられる。

以上の如き事實はいづれの場合にもあてはまる「すべてSはPである」といふ一般形式による普遍的斷定は、其斷定が説明する實在の性質に於ける或物がSとPとの結合を必然的の者たらしめる事によつてのみ眞理であるとされるのである。眞の普遍性といふのは必然性の結果である。かゝる内容の必然的連結は、一般斷定といふ者で、更によく表はされる。其者の一般形式は「Sは全くPである」といふのである。

しかし我々が斯る所まで到達した場合には單なる事實の斷定を超えてしまつてゐる。一般斷定は具體的であると同時に抽象的である。其斷定は、内容の普遍的結合を、實際に例示すべき事例と直接の關係なしに主張する時には其が抽象的である。しかし其がかかる事例を假定してゐる場合には具體的である。そして普遍的定言斷定「SはいづれもPである」といふ事を證明

する事になるのである。

かかる一般斷定の抽象的方面を發展せしめると假言的斷定に到達する。其一般形式は「もしもSがMであれば其はPである」といふのである。一般斷定は、SとPとの結合を必然的ならしめる所の其物によつて説明さるべき或者が實在にある、といふ事を包含する。假言的斷定が此結合條件を明ならしめる。我々は「水が華氏三十二度の溫度で氷結する」といふであらう。其場合我々は事實としての一般關係を言つてゐるのである。しかし此は「もしも水が華氏三十二度の溫度に下ると其が氷結する」といふ假言的斷定に依つてゐるのである。そして其場合には溫度といふ事が氷結の單なる偶然的條件ではなくて其を生起せしめる本質的條件であるといふ事にせられる。従つて其條件の陳述が完全であるか否かとの吟味が更に必要になつて来る。それで此場合の事實につき更に分析を進めると其條件が完全でないといふ事がわかつて来る。そして「平常の氣壓に於ては」といふ事を並立的條件として加へねばならぬといふ事が知られる。かくて、

普遍關係を表はす判斷が定言的に言はれるか又は假言的に述べられるかは、其判斷が述べら

れる目的によつて決定せられる便宜的の事項になる事が多い。いづれが判断の眞の性質を表はすかは單なる言語的表明からは決定せられる事が出来ない。實際本質上假言的であるべき断定が定言的命題形式に表はされる事が屢々ある。例へば「家宅侵入者が檢舉せられる」といふ如き者である。此は家宅侵入者が一人もない爲、事實となつて表はれる事が決してない場合でさへも、眞理として存在するであらう。といふのは此断定の眞の意義は「もしも誰かが家宅侵入をやると其本人は檢舉せられるであらう」といふのであるから。そして此断定が部分的に説明する根底の意義は家宅侵入者の檢舉を可能ならしめる所の法律並に法庭の組織にあるといふ事になる。

純然たる定言的断定に於ては其の實存に對する關係が直接である。そして其は具體的なる經驗事實を取扱ふ。一般断定では實在に對する關係が間接である。其断定では主張されたる連結を示す事例が存在するといふ事が、肯定せられるといふよりはむしろ包含せられてゐるといつた方がよからう。假言的断定ではかかる具體的關係が消失してしまふ。そして其は純粹に抽象的であり、それが主張する關係が眞實に意識的に事例として示され得るや否やといふ事には無關

係である。例へば、隋性の法則といふ者は「もしも防害になる者がすべて取除かれたとしたならば、或運動が起されると其が永久につづく」といふ事を主張する。かかる防害を與へる條件例へば摩擦の如き者が全然取除かれる事が不可能であるから、現實の意識的經驗世界には永久的な運動といふ者は決して生ぜしめられる事が出来ない、といふ事實は、此法則の眞理なる事を破る者ではない。であるから假言的断定は其言葉の通常の意義に於ける事實を直接にいふ者ではない。間接に其事實を意味する事になるのである。「かかる判断の根底に「實在はかくかくの事情の許にはかくかくの結果を表はすといふ性質を持つてゐる」といふ定言的形式の判断が包含せられる。そしてこの包含せられたる主張が眞正だといふ事になると假言的判断も正しいのである。しかし其表言事實が眞でないのみならず或は不可能の場合もあるかも知れぬが。顯微鏡の對物レンズが焦點距離百分の一時で使はれるとしたならば、其がAの對眼レンズと共にする擴大力といふ者が非常なる徑の者になるのであらう。」此事が單なる計算上の事實である。そして疑もなく光學的影像に關しての屈折の結果に依つて、眞であるといふ事になる。しかし私はかかる對物レンズが造られる事も使はれる事も出來るとは思はない。(「ボサンケット」更に

別の見方によるも假言的判斷は甚だ抽象的である。かかる斷定はいづれも實在が表はす一方面にのみ關係する。それで一の全體としての具體的事實を表はすがためにはかかる斷定が多數必要なのである。一般斷定が「すべて」といふ語のつく定言的斷定に其具體的表明が見られるが同様に假言的斷定も具體的條件的命題とでも言はれ得べき所の者によつて表出せられる事が出来るであらう。其者の一般的典型的表明形式は「SがMであるとした場合には何時でも其SはPである」とされ得るであらう。此では結合が例示せらるべき所の場合、との關係は更に更に直接になる。勿論此言方は其が實際に見出された事だとか或は見出され得る事だとかを必然的に含む者ではない。しかし「何時でも」といふ語を使ふ事がかかる場合が存在するといふ事が知られざる場合には誤解を生ずるといふ事になる。

普遍的定言的命題に其具體的表現をなす所の一般斷定も假言的斷定も共に可逆的である場合に其等の最も完全なる形式が見られるのである。即ちそれは賓辭が常に主辭に伴ふのみならず其主辭がなければ賓辭も見出され得る事がないといふ事である。かかる場合には「すべてのPがSである」もしくはSがPであるならば其はMである」といふ斷定も共に皆眞である事になる。

しかし特別な根據がなければ我々がかかる斷定を決定する事が出来ない。すべての直角三角形が半圓に内接せしめられ得るといふ事は、直徑を其底として半圓に内接せしめられた三角形がすべて直角三角形であるといふ事と同様に眞理である。同様にユークリッドの第一卷の第四十八命題は其第四十七命題と相互に可逆的である。しかしいづれの場合に於てもかかる可逆性は別々に定立されなければならぬ。其は普通の斷定には包含せられない。

假言的斷定は條件たるMを明かならしめる事によつてSとPとの關係を説明するものである。しかし説明の探求に於て何處に休息所を見出すべきか？と我々は尋ねる事が出来る。もしもSとPとの關係がMによつて制約せられるとしたならば我々は同じくSとMとの關係の根據は何であるか？と尋ね得るであらう。我々が單なる記號を固守する限りかかる追求には終止點が見出され得ない。しかし我々が或斷定が取扱ふ事實其者を考へた場合には、一時的性質の者であるとしても兎に角に休息所を見出す事が出来る。第二章に示した如く結局説明といふ者は全體としての宇宙が徹底的に知られた場合にのみ完了せられ得るのである。しかしながら實際には我々は現在の目的のために十分なる説明を見出してゐる。其事は、我々が宇宙を便宜上若干の

小組織に區分するが其小組織内の一に於て、或事實又は或法則の位置を明に認識してなすのである。かかる組織の内容を表明する事が選言的判斷の機能である。其者の一般的形式は「SはPかQか……Zである」といふのである。此場合選擇すべき賓辭の數は其判斷が取扱ふ所の事實によつて決まるのである。甚だ簡單なる場合を除いてはかかる斷定の具體的事例をあげる事は明に不可能である。我々は「ロンドン大學の學位授與は工科か理科か法科か醫科か音楽科かのいづれかに於てせられる」と言ひ得るであらう。そしてもし其大學の分科を枚舉する事が完全であるとするならば此命題は今問題としてゐる事柄を表はす者である。同じ様に我々は「すべて數は素數であるか又は因數に分解せられべきかである」と主張するとせば其場合には數學的の組織を表はす者である。かかる斷定は明に拒中律に依つてゐる。それは即ち我々が今迄考へて來た斷定が同一律に依つてゐる表明であるが如くである。

完全なる選言的判斷に於ては一つの系統が完全に正確に表明される。かかる場合選言肢全部で其組織全體を網羅し、そして選言肢がお互には排他的である。此斷定はかかる選言肢の中から或特殊なる者が必然的に選擇さるべき者なる事を包含する。そしてかかる必然性に於てかの

假言的判斷によつて述べられた條件の完全といふ事の基礎が見出されるのである。何故ならば「SはPかQかである」といふ斷定で完全に表はされる組織に於ては「もしもSがPでなかつたならば其はQである」といふ事及び「SがPであるならば其はQでない」といふ事が明であるからである。そして此等の命題は亦「もしもSがQでなかつたならば其はPである」といふ事と「もしもSがQであるならば其はPでない」といふ事を包含する。其故に選言斷定は假言斷定を含む者である。且其は同時に定言的性質をも含む。其わけはSは同時にP又はQたり得る特別の事情がなくとも、二つの内どちらか一方の者であり而も其一方のみであるといふ事になるのである。尙PとQとが其等自身、兩者を含むより廣き或賓辭の部分であるといふ事になり其賓辭の範圍をば其等自身があげ盡す事になるからである。此のより廣き賓辭といふのは其判斷が關係せられて造り出される所の思考の題目によつて決定せられる。例へば、もしもPQ……Zが色の名であるとする、其場合より廣き賓辭は色といふ事である。そしてPQ等は其色の種差である。此廣き賓辭が主辭に歸せしめられる事は、其選言判斷が表はす實在組織の一般的性質を示す者である。

しかし組織につきての知識は多くの場合不完全である。そして選言的形式に表はされた多くの判断は、多くの一般断定と假言断定とが其等が可逆的でない場合には正確なる思想の標準としては缺點があるが如くに、上に述べられたすべての條件を満たす者ではない。選言的判断が不完全な事は、選言肢があり得べき全部をあげ盡さない時か或は其選言肢が相互に排他的でない場合である。前の場合には我々は全く眞實なる選言的判断を持たないのである。代りに漠然たる未決定的定言判断を持つてゐる事になる。何故ならば選言の眞の本質は或選擇肢の否定から他の者の肯定にと向はんとする事であり、即ち一つの外あらゆる選言肢を順序に否定して其取残された者の眞實の知識に確實に到達する事であるからである。後の場合も亦組織に關する知識に欠陥ある事を示す。そして實に選言的形式が現實生活に於ては組織的知識と同様疑問をも表出するに使はれるといふ事を示す。我々が始めに使つた事例「ロンドン大學の卒業（又は學位授與）は工科か理科か法科か醫科か音楽科の共である」はかゝる具體的断定にも相當る。所で我々は、或一人の人で一分科以上の卒業をなしてゐる事もあるのを知つてゐる。此立場から此断定に於ける選言肢が相互に排他的になつてゐないと主張する事も出来るであらう。し

かし此断定の論理的主辭は卒業といふ事ではなく、學位の授與に關する意味に於ける此大學の組織である。斯様に考へると、一分科大學に於ける卒業が或特殊なる行動の者としては他のすべての分科大學の卒業と排他的になつてゐるといふ事が直ちに知られやう。もしも或個人が一つ以上の分科大學を出てゐるとしたならば其は時間的に見ても其に相當するだけの機會があるべきに相違ない。そして其機會は相互には排他的になつてゐるのである。他の眞なる選言的断定に於ても此様な事が見られる。選言肢が異なる限り其等は相互に排他的でなければならぬ。しかし上述の事例にも見られたが如く、此排他性は文法的主辭が同時に論理的主辭でないとしたならば其文法的主辭に對する選言肢の關係には適用され得ないのである。其故に我々はかかる排他性は單なる命題の形式から來るのだと決めてはならない。換言すれば、我々は、與へられたる選言的断定が、もしもPとQとが或事實Sの中に共存する事が出来ないといふ事を明にするでなかつたならば、其を「もしもSがPであれば其はQではない」「もしもSがQであれば其はPでない」などといふ假言的断定を含む者と認めてはならぬといふ事になる。

第三節 否定

以上我々は、普遍的主張が經驗事實と一致する場合に議論を限つたのであつた。しかし今や常に其様な場合であるとは限らないといふ事を知つた。我々は先づ一般的であると考へられた多くの陳述への例外を吟味すべきである。かくて否定並びに否定の範圍の制限といふ事が表はれて來る。我々は共に眞である事が出來ない二つの断定が同一主辭につきて造られた場合には何時でも否定する能力を持つ事になる。といふのは其實辭が相共に兩立しない者であるから。丁度相當する面白き一事例がある『ドイツ皇后がロンドンを訪問する或特別な場合には、其皇后の服裝を報告する事が新聞通信員のなすべき義務であつた。其時グローブが種々なる記者によつて與へられた服裝の記事をあつめたが其は次の通りになつてゐた。即ち、タイムスは皇后は金色の錦を着てゐたと書いてゐる。所が日刊ニュースは彼女は華美な白色の絹服を召してゐられたといつてゐる。しかしスタンダードは別の見解を取りていふ「皇后は淡い紅紫色といつたら上品な言方であると思はれる如き服をきられた」といふ。他方に於て日刊クロニツクルは他

のいづれとも一致し難き言ひ方で以て「我々には其は全く海綠色に見えた。而も時々クリームや象牙色の光澤が表はれた」といふ。グローブが眞面目に「何を皇后が着て居られたであらう？」といふかるのも不思議ではない（ルーバー）各断定はここでは眞に他のすべてを否定すべきである。何故ならば其等の内の一つだけが眞理であり得るからである。しかし實は此等断定の各の言方には何等否定すべき事が見られない。我々は「SがPでない」といふ判断の如きもつと明白なる否定を求めやう。

しかしかかる明なる形式に限られる者の考察は否定の本質並に思考上に於ける其任務について甚だ誤りたる概念を我々に與へ勝ちの者である。形式に於ては否定断定が明に否定になつてゐる。そしてPが如何なる系統の賓辭にも限られてゐない事になつてゐる。其形式は、「皇后の服裝は緑でない」といふと全く同様に「徳は緑でない」といふが如き陳述をも含み得るであらう。しかし以上の二つに於ては前者のみが合理的意味を持つものなるは明である。後者は全然思惟活動にふさはしい者ではない。換言すれば其は眞の判断を代表してゐないのである。既述せる如く、すべて断走は其が起つて來る所の文脈によつて明にせられる推理の或制限の許に、

表はれて来る者である。其はすべて断定は或組織の中に表はされるといつても同じ事である。もしも賓辭は縁であるならば其組織は色でなくてはならぬ、そして空間を占める者のみが色を有し得る。何故ならば其等のみが見られ得るから。かくて空間を占める或事物の特殊なる色のみが合理的に否定せられ得るのである。

更に、かく組織に制限する事で、我々の判断の妥當性、と或基礎がなければ如何なる判断もなされ得ないといふ事とが示される事になる。其故に否定は或基礎の許にせられなければならぬ。しかし單なる否定は無知といふ事をのみ表はすにすぎない。そして知識は無知からは建設せられる事が出来ないのである。かくて否定も常に積極的基礎の上に立つてゐるのである。そして其基礎は提出されたる賓辭と兩立せざる所の判断が取扱ふ實在の或物の現出である。我々は多少確實にSがQである事及QがPと同一主辭に於て共存する事が出来ない事を知つた場合にのみSがPでない合理的に主張する事が出来る。實はQに關する理解が明瞭でなくともよい。我々は單に、もしもSがPであるべきであつたならば其Qを賓辭とする判断は其自身消失するであらうといふ事を確實に感ずるだけで宜しいのである。しかし我々は、もしもSの中にPを拒

斥する或物が存すると信ずるのでなかつたならば斯く感ずる事は出来ない。そして其或物といふのが即ち我々が記號的に述べるQであるのである。

それですべて否定は明瞭なる選言的判断に依るのであり且肯定と否定とは相互に他を暗示するといふ事になつて来る。すべて否定は或肯定の許に基づけられる。すべての肯定は其判断が限定せられる組織中に於てはあらゆる選言的にして自己と兩立し難き他の賓辭を否定するのである。肯定的又は否定的形式の使用はいづれの方面が思想に於て重要であるかを示すものである。そして此事が概ね其判断が造られる目的によつて決定せられるのである。

第四節 定言的判断に於ける質と量

右考察は同時に、知識の建設に於ける否定の眞の機能は、我々の肯定は或範圍に限られるといふ其制限を示す所にある、といふ事を知らしめる。「すべてSはPである」といふ普遍的定言的断定に反對する或例外が存在する事が證明せられたと假定して見やう。其場合「SはすべてがPでない」と事を是認せざるを得ぬであらう。しかしもとの眞理であると考へられた一般斷

定「Sは本来Pである」といふ者の上に根據を置いてゐる。今や「SはPたる必要がない」といふ事を是認しなければならぬ。しかもこの断定が十分眞なる根據の許に立つとしたならば、其は全く反證せられる事にはならない。單に其範圍を制限せられるだけに止まる事になる。そして我々は尙「SがPであり得る」といふ事が出来やう。或は特殊事實に更に直接に關係せしめて「或SはPである」といひ得やう。かゝる断定の特色はSへの關係が不定だといふ事である。同じ形式が分析せられざる經驗からも起つて来る。我々は單なる事件の一致が「すべてSがPである」といふ普遍的断定を作る事を正しいとするのではない。といふ事を知つた。しかし其場合「或SがPである」といふ特稱断定を作るならば其は正當な事である。其場合には或といふ語を、すべてといふ語が實際には眞たり得る可能性を有するとしても其事に關係なく使ひ得るのである。或といふ語は我々の知識が明に不完全である場合に意味を持つ。我々は少くともSがPである或場合を知る。しかし斯く表はされた實在の性質についての我々の知識は甚だ不完全ですべてSがPなるかどうかを言ふ事が不可能である。或といふ語を用ひる他の場合に於ては我々はすべてといふ語を排拒しやうとする。しかし此事が思考の脈路が其事を完全に

明にした場合であるべき事を假定した時のみの話である。試験成績一覽表を吟味する際或生徒が數學に於て失取してゐたのを見たとしやう。我々は直ちに或る生徒が非常に異つてゐる事を肯定する事が出来る。しかし更に結果をしらべて見た場合に此或るが實際はすべてといふ事に擴大せられる事になるかも知らぬといふ事が、考へ得べき事柄である。此發見は前の判断を誤りだとする事にはならない。單に不定な断定を確定的断定にしたままである。

それで我々は單に形式的にのみ考へて見る限り、即ち、或がすべてを拒斥する事を意味するといふ事の知識の文脈を有しない場合には、我々は其或が「少なくとも或場合にはさうだといふ事が確である。しかし我々の判断がどれだけ廣く適用せらるべきかは知らない」との意味を持つのである。文脈が、我々が「或生徒は不勉強で或生徒は勉強である」といふ場合の如く、其或がすべてでない知られてゐることを示す場合に於てすら、尙かゝる特稱判断の適用の範圍が常に不定である。其故に其は知識探求に於ける思惟の休息所となる事が出来ない。已自身の形式によつて更に研究を要求すべき性質を表はしてゐる。しかし普遍的判断は一般断定又は假言的断定に導き得るが如き内容の分析によつてのみ到達せられ得るのであるから、特稱断定

を普遍的断定に變形するために我々の研究が取るべき方法は、實在を更に更に正しく分拆する事である。此事がPに必然的なる條件Mの發見の結果せられる事もあらう。其時には「もしもSがMであれば其はPである」といふ假言判断か或は「Mである所のSはPである」といふ一般断定を得る事になる。而も此二つは同じ判断を表はすのにどちらかが採られなければならぬ形式なのである。

一般に知識の進歩が行はれるといふ事は、普遍的であると考へられた判断に對して例外を發見するかゝる若干の過程に於てせられる。又其結果實在を更に研究する事によつて其判断の更に正確なる決定を生む事によつてせられるのである。

是迄の議論は、定言的命題に於ける主要なる形式的區別、肯定否定といふ質に關する者か或は普遍的特殊的といふ量に關する者であつた。量の區別は其命題が、其主辭の名を有するあらゆる個物に明に適用されるか或は其適用は不定であるかによつて決定せられるのである。

第五節 假言的及選言的判断に於ける質と量

もしも我々が、同様な區別が假言的並に選言的判断にも適用され得る者であるかどうかと考へて見るならば、斯る性質は甚だ局部的だといふ事を發見するであらう。否定的形式は假言的判断には完全に適用せられる。何故ならば制約たるMはPと兩立せざるSと關係せられ得るであらうし斯くして「もしもSがMであるならば其はPでない」といふ形式に表はされ得る事になるからである。特稱断定を假言的形式に表はす事も可能である。即ち「もしSがMであるならば其はPである事もある」「もしもSがMであるならば其はPでない事がある」といふ様な形になる。しかし此等は其判断を眞に假言的にするものではない。だから誤解を生ずるのである。すべて特殊なる断定は直接に事實を主張する。其に對しては定言的形式が最も適當した者である。然るに、假言的判断に特有なる機能は制約と結果との必然的關係を表はすのである。かゝる關係が普遍的でなければならぬから、假言的形式が普遍的判断に對してのみ使はれなければならぬといふ事になるのである。

同じ様に選言的形式の機能も、組織につき知られた關係を表出するのにあるから、「BがPかQかである事がある」といふ形式の陳述が其中に選擇の本質を有する事が少ない。即ち其は

主に無知の表明になる。そして其根底たる判断が定言的である。更に、否定的選言判断を求め
る事が不可能である。もしも我々が「SはPかQかである」といふ選言判断を否定するとした
ならば「SはPでもQでもない」と言はなければならぬ。しかし其は選言的ではなくて定言的
である。一言にいふと或組織の否定は其に反對する組織の肯定を含む者ではないのである。

第七章 命題の形式的關係

第一節 命題の四ツの形式

前章に於ては判断の主要なる形式的種類は質及量に關する者である事を述べた。アリストテ
レス以來論理學に傳統的に言はれてゐるかの定言的判断の四つの形式の産出が、かゝる考察に
於て而も判断の内容を無視してせられたのである。といふのは命題は其の形式によつて、主辭
に示された實在の全範圍に關係するか或は其適用範圍が疑問として取殘されるからである。前
の場合では、「すべてSがPである」又は「SはいづれもPである」といふ肯定的形式に表は
される。後の場合は「或SはPである」といふ形で示される。否定判断では前者が「すべての
SはPでない」となり、後者が「或SがPでない」といふ形になる。

「SはすべてPでない」といふ形式は普遍的否定を示すには採用さるべきでないといふ事が

注意せられなければならぬ。何故なれば其は曖昧な言方であるから。其は其意義に於て普遍的なる場合には、存在するあらゆるSについてPたる事を否定する事にもなる。或は其は單にSのすべてがPであると肯定するのを否定する意味にもなり得る。そして此事がPが只一つのSに關係して否定されるとしても眞である事にならう。だから其は特稱なのである。例へば、我々は「光澤ある者はすべて金でない」といふ事を肯定するとして、其は光澤ある者の全部が金でないといふ意味ではなく只或光澤ある者が金でない事を意味する。其故に其命題は特稱であるといふ事になる。もしも特稱否定の中には非人稱的否定及指示的否定を含ましめ、又普遍否定の中には個別的關係否定及歴史的個別否定とを、——其等が主辭の全體に明確に關係する断定であるとの理由の許に——包含せしむるならば、すべての定言的断定は其四つの形式のいづれかに若干の完全さを以て表はされ得る事になる。

しかしかゝる事をなす際我々はかかる單稱的断定と普遍的の者との重要な區別を無視する事がある。加ふるに、「SはすべてPである」といふ形式が「子供等がすべて疲れた」といふが如き單なる計算の結果としての断定にも「すべて等邊三角形が等角である」といふが如き必

然的關係を表はす断定と同様に適用せられる。しかし此等命題の形式の間には或種の關係がある。それを主として我々が吟味して見やうと思ふ。命題の四つの形式が古來A E I Oといふ文字で示されてゐる。其は最初ラテン語の私が肯定するといふ文字 *Afirmo* と私が否定するといふ文字 *Nego* とから初めの二つの母音を取つて表はされる事になつたのである。其型式は次の如くである。

- A、全稱（普遍的）肯定……すべてのSはPである。
- E、全稱否定 すべてのSはPでない。
- I、特稱肯定 或SはPである。
- O、特稱否定 或SはPでない。

第二節 概念（命辭）の周延

我々は第三章に於てすべて名辭は意味即ち内包と外延即ち其が適用せられる範圍とを有する事を知つた。此二つが常に定言的断定に表はれる。しかし外延の方が主辭に顯著であり内包は

賓辭は於て一層顯著である。しかしすべての名辭は常に或實在に關係するものであるから主辭に於けると同様に賓辭の外延を考へる事も可能である。名辭が其外延全體につき確定せる立言がせられる場合には周延したといはれる。かくてA、E命題の主辭が周延せられてゐる。賓辭を吟味するに、肯定的命題に於ては其が不周延であるのが知られる。何故ならばすべてのS或は或Sに關係せしめらるべきPは明かにPの適用の全範圍を確定的に示す事にはならないから。即ちS以外の者が命題に於てPとなり得るからである。否定的形式に於ては、之に反してPはいづれの場合に於ても周延せられてゐるのが知られる。といふのは、すべてのSにせよ或SにせよPから排拒せられるには、其排拒がやはりPのあらゆる場合が挙げられた場合に行はれるといふ事になり、かくてPは明に全外延を包含する者でなければならぬからである。以上の結果を概括するに次の如くなる。

主辭	賓辭
A、周延	不周延
E、周延	周延

I、不周延	不周延
O、不周延	周延

第三節 換位法

以上に基づき換位と呼ばれる事が行はれる事になる。其は命題の主辭と賓辭との位置を交換する事である。此場合には不周延の名辭を周延せしめてはならぬ。何となれば斯くする事は明に原の命題の主張以外に出る事になるからである。かくてEとIとが簡単に換位し得る命題だといふ事がわかる。即ち此等各の兩名辭がそれぞれ同じ範圍の周延であるので換位しても同じ形を存するからである。「すべてSのPはでない」を「すべてのPはSでない」といつても、或は「或SはPである」を「或PがSである」といつても全く同じ事を言つてゐるのである。しかしかかる換位が論理的興味を齎す事が少い事柄である。O命題は全く換位が出来ないといふ事が明である。何故なれば「或SはPでない」を「或PはSでない」とする事はSを周延する事になり其故に最初の立場であつた或Sの範圍を超える事になるからである。

A命題はPが不周延として與へられてゐるからI命題としてのみ换位する事が出来る。之が即ち限量换位と呼ばれる者である。其故に此場合は比較的確定せる断定を、より曖昧な者にしてしまつてゐるのである。何故ならばSの周延性を失つてしまふ事になるから。「すべての猫は動物である」を换位して「或る動物は猫である」を得る。しかし之は「或る猫は動物である」との意味しか持たないのである。その場合には智識の表明から幾分無知である表明に移つたのである。それはボサンケットが「我々が知つてゐる所の者に疑をさしはさんだ様なものである」といつた通りである。意味の方に注意した場合、「すべての海綿は動物である」を「或動物が海綿である」とする様な事には、力の相違がある事は事實である。しかし其は論理的よりは心理的興味を有せる事柄である。兩断定の根底に存する判断は單一なる思考活動である。そして變る事なく残つてゐる。だから换位による新断定は不完全であるといふ事になる。かかる换位過程を推理と呼ぶ事は形式の變化がすべて思想の變化を示すが如くにせられる場合に於てのみ妥當なのである。そして此の場合には確にさうではない。「换位は論理的價值よりはむしろ修辭的價值を持つ者である。」(ホブハウス)

第四節 對當の様式

かかる四つの命題形式の中の一つの眞偽が、同じ事實を取扱ふ他の形式即ち同一の主辭賓辭を有する他の形式の眞偽と如何に交渉するかを次に研究しなければならぬ。其事が古來命題の對當による眞偽關係と呼ばれて來た。此對當といふのは單に形式の相違の比較を意味する。其相違が眞の對當即ち意味に於て兩立しない者を含むか否かは關係しない。此關係は永い間對當の方陣と呼ばれる次の様な圖で示されて來た。



此圖に示された一對の命題を吟味するに當つて最初、差等關係といふ者をとつて見やう。IとOとが各AとEに對して差等關係にあるといはれる。それで丁度上下になる様に圖に表はされる。我々は普遍的主張が部分的主張を含む事を直ちに了解する。かくてAを主張する事がIを主張する事でありEを主張する事がOを主張する事である。しかしA又はEを主張しない事はI又はOを主張しない事にはならない。性急な讚美歌作者が「すべての人は虚言者である」といふ事を肯定して正しくないといふ事實は、決して、より慎重深き主張たる「或人々が虚言者である」といふ事が眞實でないとの證明をも引受ける者ではない。他方に於て後の命題が前の命題を正しとするわけには行かない。我々は特殊な立場の許に立つて普遍的なる者を肯定する事が出来ないのである。しかし我々はもしも不定なる特稱を否定するとしたならば、其否定は更に明に而も更に強く其に應ずる普遍的なる者に適用せられるといふ事になる。

次に相反する命題をとつて見るならば、AとO及びEとIが各、矛盾關係にある一對である事を知る。矛盾の本質は、二つの矛盾せる命題に於ては一方が眞で他方が偽である事を常とする、といふ所にある。かくてAを主張する事は明にOを否定する事である。Aを否定する事は

明にOを主張する事である。又他面より考へてOを否定する事がAを主張する事でありOを主張する事はAを否定する事である。同様な關係がEとIとの間にも存する。かゝる事はすべて拒中律及矛盾律から直接に出て來る事實である。

AとEとの二つを考ふるに兩方とも眞なる事が出来ないが兩方とも偽である事が出来る。「虚言者が一人もない」といふ事は「すべての人が虚言者である」といふと同様に輕率な言方である。此二つは反對關係にあると言はれる。其は其等によつて表はされる主張は、お互に最も離れた者であり、兩者の間に中間の立言をゆるす者であるからである。

最後にIとOの二特稱斷定を考ふるに其等は相互に形式的には無關係なる事がわかる。二つながら眞であり得る。此事が或るといふ事が眞にSの外延の一部に限られた場合には常にさうである。即ち「或人は虚言者である」「或人は虚言者でない」といふ二つが同じ様に眞理である。しかし此斷定が二つながら、Sが眞に若干ある場合には偽である事が出来ないといふ事が明である。此は拒中律から直接に導かれる事である。此關係が小反對と呼ばれる。其は單に對當の方陣圖式の位置に基く命名である。

以上の結果を概括すると次の如くである。Aの真なる時はIの真E Oの偽が其中に含まれる。しかしAが偽である場合にはOの真のみが含まれる。同様な事がEについても言はれる。更にOが偽である場合はEの偽A Iの真が含まれる。しかしOが真である場合にはAの偽の外は含まれる事がない。同じ適用がIが真又は偽なる時にも存するのである。

要するに全稱的なる者の真又は特稱的なる者の偽は四つの内の他の三つの真又は偽を包含する。しかし全稱の偽又は特稱の真は各共と矛盾關係にある者の真偽を包含するのみである。

第八章 知識の方法

第一節 眞理と證明

第五、六章に於て、種々なる發達の段階に於ける判断作用に含まれる所の者を研究した。そして判断の意味又は内容に關する根本的疑問への解決を發見した。だが眞理並に證明に關する一層困難なる二つの問題の研究が尙残つてゐる。此本の後半に殆んど其事のために費されるであらう。其等の二問題は完全に分離せしめられる事が出来ない。何人でも十分なりと考へられる證明によらない陳述を眞理であるとして受容する事がないであらう。しかし我々の心に斷案を與へさうな證明でも屢々他の者によつて、不十分なりとして或は全く價値ないとして排斥せられる。我々の仕事は其故に、眞理の最後の試みは何であるかを考察する事、其試みを満足せしむべき判断の基礎になる根據の種類を吟味する事、及び如何にしてかかる根據が求るべき

かを確かめる事等である。要するに我々は「如何なる方法によつて人間が知識を求むるか？」といふ問に對して解答を求めなければならぬのである。

第二節 方法の性質

方法とは秩序的なる處置を意味する。即ち或る定まりたる原則によつて導かれる手續きである。仕事がよくなされたといふのは、其が方法的に追求せられた場合のみの事である。そして其仕事の困難が増すに比例して方法の必要が増大して来る。知識の獲得——即ちすべての課業の内最も困難なる者、に此方法が適用される程強くは何物に對しても適用される事がない。方法がなくとも斷片的知識の散漫なる集積は出来るであらう。しかし知識と名付づるに足る者は全く得る事が出来ないのである。科學に於ける方法が完全に近づく程其部門の知識が益々増進せしめられる。此事が日常思索家によつては認められてゐる。そして論理學の全組織が、種々なる機會に知識を求むべき方法の本質的特色を完成する試みにすぎぬと言つても宜いと思ふ。かくて或時期に於ける論理的思潮は眞理の試み又は其時に得られた知識と關係的になつてゐる

のである。

第三節 方法の原理の發達

原則の組織體としての論理學がアリストートルが方法を組織しやうとした試みに起源を有する。其方法によつて人間の思想と信仰とが相互に調和する事が出来た。そしてギリシヤの思想家によつて受容せられた眞理の試みを先づ以て擔當するのであつた。中世に於ては眞理の此試みは單にドクマを承認する事によつて取つて代られた。或一般命題は自明として受容せられた。そして思索の全體の仕事はかかる原則から結論を演繹する事であつた。中世の論理學がかかる演繹がなされるべきあらゆる條件を細かく示す試みであつた。其は全く正確であつた。しかし自ら思考の表面的形式に關係するだけであつた。といふのは眞理が單に、疑問もなく眞理であるか、と受容せられる或根源的命題と一致する事に於てのみ成立するとせられて居つたのみであるからである。斯様な論理學はアリストテレスの者から導かれる、しかし眞の普遍的命題の定立に關する仕事はアリストートルではすべて實際上省かれてゐる。知識に關する中世の見解の他の

結論は、論理學の職能に關する誤れる考へであつた。論理學の領域は思惟に對する方式を決める事、眞理を得る唯一の方法を定める事であるとせられてゐた。

第十六世紀自然科学の發達が顯著になつたと同時に眞理への中世的試みが次第に廢棄せらるるに至つた。そして眞理の唯一の試みは事實と一致する事であるとの考が起つて來た。かかる一致は中世の論理では證明も反證もされる事ではない。かくて知識の方法の新構成に關する必要が感ぜられて來た。かかる仕事は明にフランシス・ベーコンによつて始められたのである。しかし不幸にも彼は、論理學の職能が、科學的研究が従はねばならぬ方法を信據の許に定める事だといふ中世的見解を残存してゐた。彼自身はコペルニクス、ガリレオ、及び他の偉大なる科學の開拓者が實際に試みた方法をば研究しなかつた。彼は、周到なる比較及分類による無數の事實を集積する事が自然の隠れたる眞理を直接に明ならしめる者と信じてゐた。此方法は根本的に誤つた者である。ゼボンスが「如何なる大科學者によつてもかかる事は成し得られない」と言つてゐるが如くである。しかし其事は事實に訴へる事によつて學說を證明する必要があるといふ事に注意を喚ぶだけの意義はある。「然しながら、彼の方法を歸納法と呼ぶ事によつて

又事實の蒐集に非常なる力を注ぐ事によつて、彼は人々に科學の仕事の全部は觀察に存するといふ誤りたる考へを助長し且つ實際固定せしめた」(ミントウ)此考へが實に科學を機械的の者たらしめる。何故なれば其は、心の外にあり心の活動より全く獨立なる知識の一團に於ける人工的整正として方法を考へる事になるからである。此事は實にベーコン自身によつて明に叫ばれてゐる。「科學を發見する我々の方法は機智の鋭敏と力とに任ぜらるる事が少ない。大部分はすべての機智と容知とを覆へす者である」と。

ベーコンの方法に關する考へは、上述せる如くに、科學的發見の實際の仕事には影響が少なかつた。そして近世科學が其一般的方法を第一に明に構成したといふ功はむしろニウトンに歸すべき者であつて彼ベーコンに歸せらるべきでない。

しかしながら論理學者は永い間知識の方法に起りつゝあつた革命につきては無知であつた。そして思考の術を求めるといふ要求のみで以て中世の古き論理學の註釋だけを續けてゐた。

此事は自然論理學自身を甚だ一般的なる概念に陥らしめた。其組織は大部分技巧的である。

そして各方面の科學を實際十分に證明する思考様式とは無關係であつた。空虚なる死から論理學を救助した名譽はミルに歸せらるべきである。彼は論理學の職能は科學に方法を示す事ではなく、眞理を確定するに於て其科學が完全に發見する所の方法を認容する事であり、且分析によつて其方法の一般的特色を明瞭ならしめる事である、といふ道理をのべた。次に彼は望んだ。自然科學に斯くの如き進歩を導いた此方法は、歴史社會學倫理學乃至心理學等人間の精神的及道德的生活に關係する科學に對しても同じ様な成果を結ばしむる事が出来るのが知られるかも知れぬと。ミルの論理學に對する見解は次第に承認を得る様になつて來てゐる。論理學は最早科學へ法則を與ふる者なるを要求しない。そして其自身其方法の構成に於て科學に負ふ所あるのである。

ミルの大業以來論理學の發達は知識の概念をより深め、より正確ならしむる所に、主として存してゐた。もしも事實といふ事を感じによつて知られる者とするならば、事實と符合するといふ事は眞理を求める十分なる試みではないといふ事がわかつて來た。科學は普遍的關係及法則の内により多くの眞理を求める。特殊的事實は其の單なる事例であり、表明であるに過ぎ

ぬ。眞理に對する我々の試みは事實に訴へる事によつて檢證せられた普遍的判斷の終極の恒久性と關係とを求める所に存する。組織といふ語がかかる結果を意味するのである。それで現代の見解は或意味ではアリストートルへの復歸である。しかし現代科學の根本精神たる事實と一致するといふ事が、更に強められた意味での復歸である。

第四節 方法と思考

此眞理の意義は方法は本質上思考の秩序であつて事實の秩序ではないとの意味を含む。普遍へ導く原則としての理由を發見する事によつて人間の心が自身の合理的性質を満足せしむるの、此思考の自己活動の過程に於てせられるのである。其は外界自然の秩序が受動的受容的なる心に印象せられるといふ過程ではない。コレリヂが言ふ「方法は進歩的移行といふ意味を含む。而も其言葉の語源はかかる意味のものである。……其故に方法といふ言葉は、其自身の中に何等の進歩的原則を含まざる單なる生命なき處理に、濫用以外の正しき用ひ方で適用せられる様な事があつてはならない。」と。かかる進歩の——不十分不完全なる知識から十全にして完

全なる知識への徐々の進歩の——原則が現はれて、其がすべての眞實なる科學を生じて來るといふ事になる。といふのは科學は、其自身を世界の活動と調和せしむる精神的活動の結果であるから、科學の成巧は一方事實を整理した事により、他方知識の根據たる終極の合理的特質の適用を徐々と進めて行つた事に起因する。

第五節 方法と事實

其故に、知識が精神的の構成であるといふ事を記憶する事が重要であると同時に、其は感覺的經驗及かかる經驗の試練を経た事柄に基づく構成であるといふ事も、同じ様に注意せらるべき本質的事項である。それだから知識の方法はかかる經驗が明にせらるべき仕方を分析せねばならぬ。換言すれば如何にして事實の正しき確固たる知識を得る事が出来るかといふ事を研究せねばならぬ。所で物的事實のあらゆる人間の知識は、最後の手段として直接觀察によつて導かれる。だから我々は、知識の構成が確なる根據の上に築かれるためには、如何にせば誤りたる不注意なる觀察による誤謬を避け得べきかを考へねばならぬであらう。一言に云へば、如何

にせば、「事實を確實なる者たらしめよ」といふ原則に従ふ事が出来るかを研究せねばならぬであらう。

しかし結局あらゆる事實の知識が直接觀察によるとしても、尙其結局の手段たる直接觀察が限りなき場合に於て我々のすべてによつてせられるといふ事が不可能である。すべて知識の探求者が他人の試みた事を最も多く受容せねばならぬ。「最も勝れた科學的事業に於ても、最も勝れざる者に於ける如く、多くを信用する事に依らねばならぬ。即ち適當なる觀察者、巧妙なる器械製作者、又は最初の研究者の力を信用する事に依らねばならぬ。」(ラベンシエール)だから知識の方法は、唯一の信用をなす事が出来るためには、眞理の如何なる試みが證明のために採らるべきかを示さねばならぬ。意見、觀察、實驗の結果批判等の複雑なる交換——其は勞力の分配といふ事になる——其は科學の生命を發生せしむる者である——の圏外にある如何なる方法の構成も満足せられ得べき者ではない。

第六節 方法の推理的性質

しかし事實を確める事は知識の唯一の出発點である。すべて科學の眞の目的は單なる事實を超えて、其事實の中に思惟の協力によつて普遍的關係を發見し、以て知識を擴大し更に其等關係より或結果を推論し斯くして觀察せられざる他の事實に到達し、かかる全體を一の理解せられたる組織的知識に結合する所に存する所にあるのである。すべてのかかる思惟の働きは推理といふ一般的名稱の許に包含せられる。それで推理の目的及方法の最後の段階は、知識を組織すること、及び其組織の中に思惟の終極目標たる其組織の説明を發見する事に存する。其故に方法の研究は三つの主要部分に分れる。觀察と證明、推理、組織及説明、が即ち之である。しかし之等は時間上分離せられた三つの過程であると考へられてはならない。其等は、便宜と明瞭とのために分けて考へられるが知識構成の實際の發達に於ては、分離すべからざる性質の者である。

かくて組織といふのは單に推理の完成に過ぎないといふ事が明にせられる。尙檢證といふ事も推理過程に外ならぬ、といふ事も明である。一見せる所では觀察も亦推理を含むといふ事はそれ程明ではない。しかしよく考へて見るとやはりさうである事が知られる。此事が觀察の論

(第十一章)に於て述べられるであらう。只此處では、何處に誤謬が存しやうが先づ現在の推理を疑つて見なければならぬといふ事を指摘せば足りる。感覺の印象は其がある所の者であるしかし最も簡單な場合に於てさへも其は多少面目を變へて我々に表はれる。そして實際如何なる觀察を我々がなすとしても此感覺的印象を誤りだとなし得る者は實に判斷である。即ち此誤謬の根據は單なる感覺的印象に求むる事が出来ない。それは何等の主張をもなさないからである。其根據は其故に其印象を或概念の許に含ましめる精神的構成活動の中に求めなければならぬ。そしてかゝる構成は即ち推理の性質である。何故なれば其は印象の性質を、現在經驗せられざる印象との類似といふ事を基礎に主張するからである。例へば月光に照された墓石を幽靈と間違へる無骨者があるとする。彼は、幽靈の出現に對する自己の概念の根本的特色をなす光澤並に白色といふ事に於て實際に受取る感覺的印象が類似性を有する所から、其を幽靈と推測するのである。而も彼の推測が夜中といふ事が幽靈の出現に最も適當した時であるとの事實によつて助けられ、愈々幽靈と決定するのである。

かくて知識の方法は推理によるといふ事が明であらう。それで觀察が事實の眞判斷に表はれ

るといふ事を確かめやうとする用心の吟味に入るに先だつて先づ推理の性質を考察するといふ事が必要になつ来る。

第七節 方法的思考の特質

しかし此考察に入るに當つて先づ、方法として見た何等かの推理過程について云々する場合其が如何なる意味を含む者であるかといふ事を更に確實に考察するの必要がある。

其過程は數多の推理を結合する者で有り得る。而も其結合は長さ及程度に於ける複合で有り得る。しかし其長さ或は複合程度が如何様であらうとも其が一の目的によつて統一されてゐる限り方法的なのである。上述せる如くあらゆる方法的思惟が組織に導く、そして又組織といふ意味が其語に始めから内在してゐるのである。勿論或研究の最初に於ては、我々は何等出來上つた組織といふ者をば有してゐない。我々の研究が到達しやうとする實際の具體的組織は事實其自身から學ばれるのである。

さうすると、事實の觀察といふ事が、或種類の問題——其を解決する事が、事實が其中に自らの位置を求むべき組織の構成となる様な問題——を示唆する、といふ事になる。であるから『いづれの科學に於ても事實の觀察の次の段階は或方法的組織によつて問題の系列を構成する事である。すべての科學はかかる問題の系列に對する解答から成立するのである』（ラングロア……）實際は解答が問題と共に示唆せられるといふ事が屢々ある。その場合は直ちに解答を求むる事に着手せねばならぬ。かく示唆された問題に對する解答を求めやうとする過程は一般には事實の觀察以上の事柄を含んでゐる。而も此が更に他の問題を示唆する。かくて一の研究が他の研究を喚起せしめる事になる。しかし最初の觀察が正確にせられるでなかつたならば全體の研究が無益な證明をやつてゐるといふ事になるのである。又もしも或研究に於て、眞理と假定するが而も實は全體か部分かが誤謬である所の一般的命題から研究を始める業な場合になるとしたならば、其場合我々の努力が無益である事になる。以上の考察は方法に關する根本的にして相互に密に關係せる二つの規則を我々に示してくれる。

- 1、確定せる目的を持たねばならぬ。
- 2、出發點を確實にしなければならぬ。

第八節 方法に附帶する謬論

以上の二つ或は一つを觀過しても謬論に陥るといふ事になる。即ち正しき思惟であるかの如く假裝せる不正なる思惟に陥らしめるのである。此事が議論もしくは説明には最も有り勝ちの事である。

もしも目的と出發點とが混同せられるとすると我々は先決問題要求の謬論即ちラテン語で *Petio Principii* といふものに陥るのである。此は證明の根據に我々が證明しやうとする其斷定を含む命題を潛入せる事を意味する。同一判斷を種々なる形式の言語に表はし得る事がかかる謬論に走り易からしむる事になる。例へば「阿片は其が催眠性といふ性質を持つてゐるから眠りを催うさしめる」とか或は「物體の體積が其が冷却せられた場合には減ずる。何故なれば其場合には分子がより密になるからである」とかいふ立論に於ては我々が明に此斷定を犯してゐるのである。

恐らくは此謬論を犯せる最も普通なる様式は、一般に傳統的に考られた誤れる原理を受容する事及び其等を推理の基礎に用ふる事であらう。かかる者は最も多く人々に受け入れられてゐる、其中多くは尙疑ひなき眞理として取扱はれてゐるのである。少しばかり例をあげるならば次の如き者がある。自然は眞空を嫌ふ。金屬は黄金に變ずる事が出来る¹。すべて人間は平等な者である。奴隸制は自然的な者である。すべて子供は全く善なる者として生れて来る。すべての子供は全く惡に傾ける者として生れて来る。すべての取引に於て或る仲間を得る事は他の仲間を失ふ事である。夢は豫言的のものである。云々

かかる形式の謬論の最も顯著なる一例は、ハーバート・スペンサーの教育論の第一章に見出され得る。彼は『あらゆる種類の獲得には二方面の價值が見られる——知識としての價值と訓練としての價值である』といふ事を述べ更に先づ最も多く事物の價值を知識といふ見地から論じ、次に訓練的價值に移つてゐる。そして次の先決問題要求の謬論を用ひてゐる。『何が或目的に對して最上のものなるかを知ると、同時に何が他の目的に對して最上なるかを知る事になる。行爲の統整に最も役立つ程度の事項を會得する事は、其能力を強めるに最も適當したる精神的試練でもある。或種類の教化が知識の獲得に必要であり他の種類の教化が精神的試練には

必要であるとしたならば、其事は全く自然の讚美すべき經濟性に矛盾する事にならう。』云々。

曖昧なる目的の概念は屢々論點相違の謬論 (Ignoratio Elenchi) に陥らしめる。矛盾を犯せる議論又は人身攻撃の議論に於ては往々にして此事が見られる。「意見のちがふ人々を負かす事は力が勝つてゐるのを證明する事になるかも知らぬ。しかし論理が勝つてゐるか否かを證するや否やは疑問である」(スペンサー)

謬論の他の様式は偏見又は感情に訴へる事から出て来る。文學の研究に對する次の議論は最も著しき例である。「猩紅熱で初生兒を失つた母が悲しめる場合——其子供が過度の勉強で衰弱する様な事がなかつたならば恐らくは回復したであらうとの考に於て其母と醫師とが一致した場合——彼女が悲しみと後悔との結合せる歎息の許にひれ伏す場合——かかる場合にダンテの創作を読むといふ事は唯一の小さき慰藉になる」(ストック)

謬論が、對手の結論する議論について無知であつて、其代りに藁の^〇人形^〇を置いて其を得意さうに打破る場合にも表はれ得る。古典教育に反對する議論の中によき例がある。次の通りである。「兒童が後職業につくに當つて十中の八九まではラテン又はギリシヤ語を實際の役に立て

る事がない』云々。今一つ『オリノコインデアン人が自分の小屋を出る前には顔料を用ひるが其は直接の利益のためにするのでなく、其がなければ人に見らるる事を嫌がるといふ理由の許にするが、同じ様に子供がラテン又はギリシヤ語を練習する事も其本來の目的よりするのでなく、其を知らない爲に他人から恥辱を受けない様にとの理由——即ち神士としての教育を受けるのだとの理由——或社會的地位を示し其結果尊敬を受ける印にとの理由——によつてせられるのである。』云々。(スペンサー)勿論スペンサーは課程を選ぶ妥當なる根拠がないといふ事を示すには少しの難點をも持たない。しかしかかる言方が古典研究の訓練的價値に關する議論である限り最も誤りたる態度と言はなければならぬ。そして古典研究の擁護者が主として頼みにする點は此の所に存するのである。

説明をなすに當つては絶えず此謬論を避けやうと勉めなければならぬ。一帯説明が、不明であると思はれる者を明にせんがために求められる。然し説明者自身此難點(論點相違)に陥り易い。そして誤りたる個所を直接に説明するといふ事がある。同じ誤りが學ぶ側の人にも存する。即ちド・モルガンが次の様にいつてゐる。「學ぶ者の、方法に於ける最大の難點は何所に已の

難點が築かれてゐるかを正しく知る事ではない。或者が明にせられた場合に其が所謂其或者であるかと考へ込む傾きがあるが其點に存する。『抽象的關係が具體的事例によつて説明された場合には特に此事が多い。特殊なる事例の中には理解せられる考察點に實際無關係なる或物が存するといふ恐れが常にある。そして概ね具體的事例によつて満足せしめられる精神は其以上努力しやうとしない者なのである。』

説明に責任が歸せられる他の形式の謬論は、研究者が説明と明にせらるべき難點との間に比論を用ひてする事があるといふ事である。斯かる考察は、すべて説明が眞に其機能を果たすためには、其に大なる注意が拂はれなければならぬといふ事を知らしめる。

第九節 方法的過程の本質

兎に角方法過程は定まりたる出發點と一定の目的とを持たねばならぬ。しかし方法が見出されるのは、出發點から目的に不斷に移つて行く間にある。何所から出立してゐるのか何所へ行くかとしてゐるのかを先づ以て知る事がなかつたならば、秩序的な進行を見るといふわけには

行かぬであらう。其等を知る事は實際出来るがそれでも途中でさまよふといふ事がある。特殊なる場合如何にしてかかる徘徊が避けらるべきかは其に關係する特殊科學によつて決定せられなければならぬ。我々の住事は繼起的進行を分拆する事によつて、何がかかる方法の一般的特質であるかを見出す事だけである。其特質といふのは次の言葉に總括する事が出来ると思ふ。方法過程は何物をも遺失してはならぬ、一個一個吟味すべきである。そして一步一步出立點から目的を満たす方へと近づく如き秩序に其等を排列する。そして其等個物が他の個物及び全體としての研究に對して己が眞實なる位置關係にあるが如くに排列せられなければならぬ。云云。

第十節 推理の本質

組織が造り上げるといふ過程の中に存するのであるから、發見の過程に於ては、かかる目的への接近が豫期せられる事以上の事は存しない、といふ事が明瞭である。直接の徑路以外にある事物が取除けられ、出發點から目標までの思考の進行が必然的連續的なる移動として見られ

得るといふ事が、其過程が完成せられ証明せられた場合に於てのみ存する。かかる完成せる事例はユークリッドの幾何學の証明には多く見られる。推理過程が、発見である事を止めて證明といふ事になると、論理的に完全になつたと言へる。其過程が或個人に取つて熟知的であるか新しい者であるかは其論理的特質には關係しない。其故に推論といふ語を或個人が今まで知らなかつた所の眞理に到達する事に制限して使ふ事は誤りである。推理の本質は思惟が、組織の特質によつて必然的に規定せられた徑路を出發點から結論へと不斷に移動して行く事である。其結論は其人に取つて親しい者でなかつたからとの意味ではなく前提に表はれてゐないからといふ意味で新しいのである。ここに前提とは其から過程が出發する所の判断であり、して其過程はかかる判断の結合の必然的結果に外ならぬ。推理とは始から終りまでの思惟の單なる移行きではなくて其全體の構成をいふのである。

推理の問題はそれで次の通りになる。或眞理が與へられた場合、如何にして其與へられたる者を超えて他の眞理に到達するのであるか？と。其に對する答は推理が不離に連結される組織の概念の中に求めなければならぬ、與へられた事實又は與へられた判断を組織する場合は何時

でも其者を推論の出發點とする事が出来る。例へば、ばらの木の小さな芽が與へられたと假定しやう。觀察せられる者は正しく豌豆程の大きい色の固い小體である。もしもそれを細かく分割するとしたならば我々は更に以上の事を觀察する事が出来るであらう。しかし我々は、其芽が木についたまゝである場合に適當な條件の許に其から出て来る所の完全なる花を、今其芽の中に觀る事が出来ないであらう。しかし其芽を見る場合には我々が單に今あるがまゝの其芽を考へる事が出来るのみならず我々の思惟を開ききつた花に向けて行く事が出来る。此事が、我々が其芽と花とがばらの木の生活としての一組織の部分であり、其故に其花が芽から自然に出て来るのだといふ事について十分なる知識を有してゐるから可能なのである。即ち心の中に組織が出来上るのである。そして其組織から更に花が芽から出て来るのだとの判断が出て来る。我々の斷案の確實性は明にばらの木の生活に對する我々の知識の程度に依存する。或人は單に一般的事實の順序のみを言ひ得るであらう。他の者は更に其變化が起る時期について稍正確な事を言ひ得るであらう。精神的構成が正確になるに従つて其構成が表はす斷案が更に更に正確になつて来る。

次の例がある『私の汽車が半時間遅れた。私は某驛に於て乗換への時間に間に合はぬであらう。何故ならば其處で私が乗らうと思つてゐる汽車は今乗つてゐる汽車がつく時刻から五分後に立つ様になつてゐるから。時間關係は此場合私が乗換へが出来ぬといふ事に必然的條件である。其等の汽車がちがつた會社の者であればかかる事は尙更確に實行せられるであらう。一方が他方を待つてゐるなどといふ事は決してあるまい。のみならず私が乗換へやうとする其汽車が件の停車場を出てしまふ以上私が其汽車の出發を差止める様な都合よき機會に頼つて、結局私をして時間に間に合ふ様に到着せしめるといふ事も出来ない。……斯様な次第で私の推論の基礎をなす、組織へのあらゆる附加的知識及其組織に影響する種々なる條件によつて、私の推論の妥當性が増して來るのである』(ヒボン)

推理といふのはかくて、精神的構成であり、其は特殊なる組織的知識及び前提の中に明に示されざる結果が其構成が行はれる場合思惟によつて直接に理解せられる、といふ性質を有する知識に立脚せる者である。我々の推理力は如何なる場合でも、其組織についての我々の知識の分量と本質的に關係のある者である。例へば子供又は野蠻人が始めて火藥の蓄積を見るとき

と其が彼等には單なる黒い砂の様な者の蓄積に見へるであらう。其を火藥と認め得る知識の發達せる或人は兒童とは遙に異なりたる組織に其を編み込む。其組織からして彼はマッチで點火せられたる場合の結果を考へる事が出来る。——其結果をば野蠻人並に子供は或は災厄になるかも知らぬ經驗によつて僅かに發見する事であらう。しかしもと火藥は其が小供によつて觀察されやうが化學者によつて觀察されやうが異なる同一物である。異なる點は觀察者によつて得られた知識の組織の中に存する。推理を可能ならしめる者は實に此組織である。しかし其自身は推理ではないが。

我々は組織について知ると其中を事實から事實へと移り行く事が出来る。しかし其移動は常に普遍的關係を通して行はれる。即ち事實間に共通なる或同一性質を通して行はれる。すべて知識の増進といふのはかかる普遍性を發見する事である。普遍的概念によつて事物の考察が行はれる程我々は益々其事物を熟知するといふ事になる。そしてかかる概念といふのは即ち關係に外ならぬ。推理は普遍といふ事がなければ働く事が出来ない。しかし普遍は事實の中にあるが感覺によつては識別せられず思惟によつてのみ見出さるる者だといふ事が注意せられなければ